

42497

教科書文庫

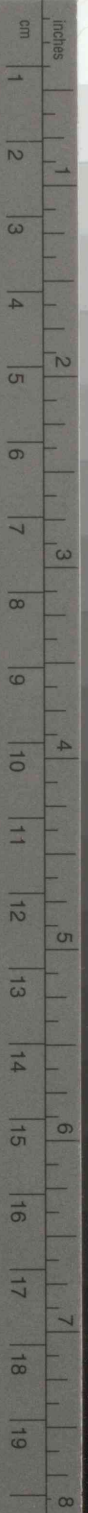
4
810.
44-1941
20000 48922

Kodak Gray Scale



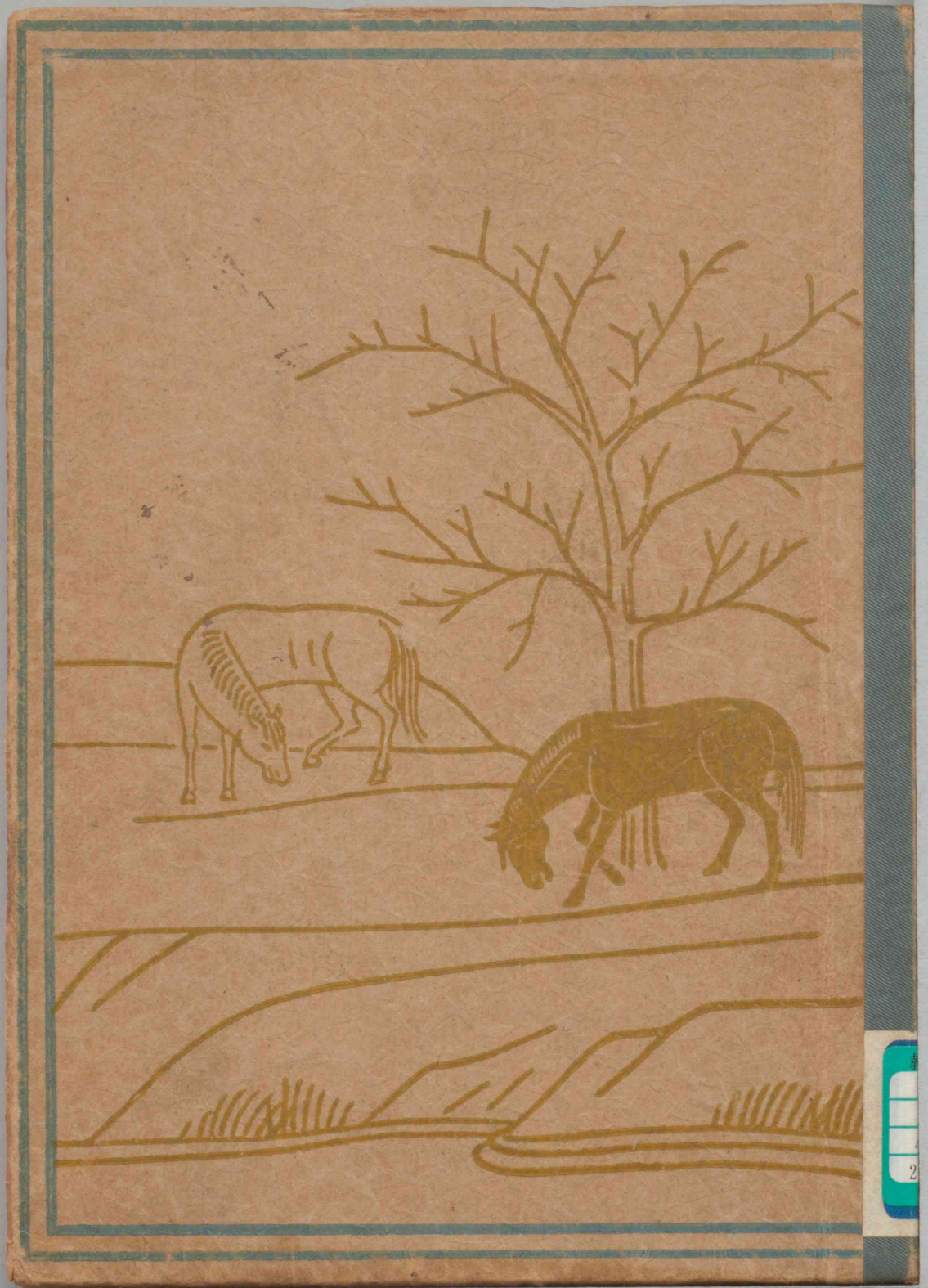
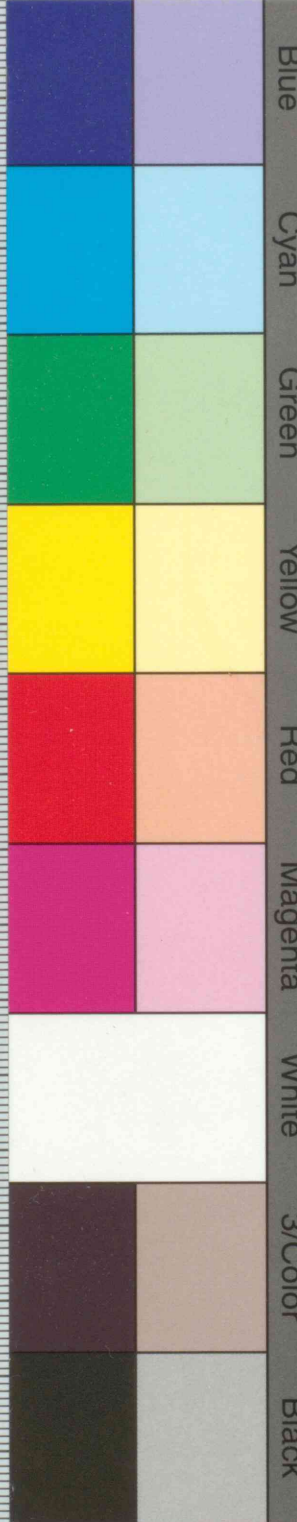
© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資 料 室

教科書文庫
4
810
44-1941
2000048922

375.9

Ka 9

文部省檢定濟

實業學校國語教科書 昭和六十一年九月四日

實業
學校

國文新選

新
制
版

垣內松三
西尾實編

株式會社

文

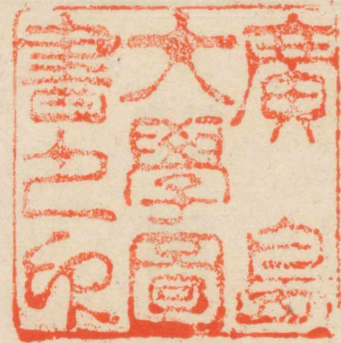
學

社

広島大学図書

2000048922





一 國民教育の要求に基づき、國語教育の使命に鑑みて、各時代に於ける最もすぐれた人と文とを網羅蒐集しようといふことを力めました。

二 教材はそれぞれの形質はもとより學習の方法をも考慮して選擇しました。

三 教材は縦に學年を貫ぬき横に學期を連ねて發展的體系的に排列しました。

目次 卷二

一 言葉の味……………五十嵐 力……………六

二 明治大帝の御製……………北原白秋……………三

三 近江の國……………谷崎潤一郎……………九

四 峠の茶屋……………夏目漱石……………三

五 動物畫談……………西村五雲……………六

六 千瀉の舟……………幸田露伴……………三

七 近江聖人……………橘 南 谿……………六

八 安井仲平……………森 鷗 外……………四

九 西郷との會見……………勝 海 舟……………五

一〇 日本海の海戦…………………………五

二 蟬…………………………六

三 暑 い……………千家 元 麿……………七

三 清 水……………荻原井泉水……………八

四 朝の上高地……………田部 重 治……………九

五 鉛筆日鈔……………長 塚 節……………一〇

六 明治神宮……………溝口 白 羊……………一〇

七 一本松と松林……………草野俊助……………一七

八 苦言二則……………正岡子規……………一八

九 余吾の湖……………室 鳩 巢……………一九

一〇 板倉父子……………新井 白 石……………二〇

一一 渡り鳥……………松本亦太郎……………二〇

一二 畫の話……………杉村楚人冠……………二五

カキリ 16. 23 課

白三全部
三三
三三
カキリ 三十三

○三	イランカラブテ……………	金田一京助……………	一四
○三	短歌鈔……………	正岡子規・伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦・齋藤茂吉……………	一五
三	晩秋小筆……………	齋藤茂吉……………	一六
三	武藏野……………	國木田獨歩……………	一七
○三	鐘の音……………	奥田正造……………	一八
三	惜陰……………	貝原益軒……………	一九
元	人事と天命……………	永田秀次郎……………	二〇
三	冬のアルプス……………	横有恆……………	二一
○三	氷上戯技……………	高村光太郎……………	二二
○三	色々な言廻し……………	芳賀矢一……………	二三
○三	杜子春……………	芥川龍之介……………	二四
○三	村を復興させた話……………	武者小路實篤……………	二五

○三	野口英世……………	二六	
三	勿來の關……………	岡本綺堂……………	二七
三	松江の曉……………	小泉八雲……………	二八
三	國史に歸れ……………	徳富蘇峯……………	二九

五十嵐 力
文學博士 早
稻田大學教授
明治七年生

海上胤平
歌人 大正五
年歿、年八十
八
小出 榮
歌人 明治四
十一年歿、年
七十八

一言葉の味

五十嵐 力

老農友日氏の話である。
日本の古言には、簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだのがあ
るものですね。

いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上胤平と
いふ歌人が小出榮といふ人の歌を評した中に、小出氏の歌に、牛
牽き歸る云々とあつたのを咎めて、外國は知らず、我が國では昔
から牛には「追ふ」といひ來つたものであるのに、「牛を牽く」といふ
のは落着かない詞遣だといつたのがありました。

當時私はそれを見て、歌人なんて暇つぶしに下らんことを云
つて樂しんでゐるものだと思つて、馬鹿にしてをりましたが、其
の後十數年經つてはつと思つたことがありましたよ。
それは斯ういふ譯です。

或日、牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男にあ
づけて出してやりましたが、程なく走つて來て、
「乞食橋の向ふまで行くと、牛が坐り込んでどうしても動かな
くなりました。」

と云ふのです。
「意氣地のない弱蟲だ。それぢや、お前が行つて手傳つてやれ。」
と云つて、小力のある他の男をつけてやりましたが、しばらくす
るとそれが又歸つて來て、

「二人でもどうしても立ちません。」
と申しました。

板橋
東京市板橋區
乞食橋
東京市豊島區
巢鴨六丁目。
西巢鴨二丁目
同三丁目を境
する富士橋の
こと 谷端川
に架す

「馬鹿な奴だ。二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。それぢや五平、お前行つてやれ。」

と申しますと、五平は、

「情ない奴だな。それぢや俺が一つ立たせてやらうか。」

などと云つて、威勢よく出かけて行きました。が、しばらくするとそれも歸つて来て、

「旦那、どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな。打つても、叩いても、引張つても、だましても、一寸も動きませんや。」

と申しました。

私は「をかしい事だ。しかし、俺が行けばどうにかなるだらう。」と怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男どもには多少優

宍戸邸
東京市豊島區
真鴨六丁目
今の東京傷兵
院

つた一日の長とを頼みにして急いで行つて見ますと、成程牛の奴が宍戸邸の裏門の前に大磐石と腰を据ゑてをり、周圍には眞黒に人だかりがしてゐます。それから、私は三人の男に手傳はせて鞭うつたり、あやしたり、いろいろ工夫をしてみました。が、どうしても一寸も動かすことが出来ません。

困りぬいて呆然としてをりますと、人だかりの中に、半纏を着て股引をはいた馬方らしい六十恰好の爺さんが居りましたが、
「旦那、それぢや動きますまいよ。私がひとつやつて見ませうか。」

と云つて呉れました。

「それは有難い。是非に。」

と云つてねんごろに頼みますと、爺さんは私の手から鼻綱を取

カトウ
ニトクサガリ
賈島
唐の詩人

應舉

圓山氏 通稱

主水 畫家

寛政七年(二

四五五)歿、年

六十三

觀世大夫

觀世流の家元

フローベル

(1821-1890)

フランスの小

説家

賀茂眞淵

國學者、明和

六年(二四二

九)歿、年七

十二

つて、靜かに牛の右側に立ちましたが、右の手に持った綱を伸ばして、牛の尻邊を軽く打ちながら、「しつしつ」と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振り上げて、むつくり起きあがりました。

それから、爺さんは後の方に立つて、尻を打ちつゝ、二三度圓く引廻しましたが、やがて三四十間追つて行つて、

「さあ、かうして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。」と云つて、綱を渡して呉れました。

私は厚く禮を述べて別れましたが、此の時電光のやうに私の頭に浮かんで來たのは、例の海上氏の云はれた、牛には「追ふ」といふ辭が古言であるといふことでありました。私は一向に古學に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらも斯ういふ風に祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を

疊み込んだのがあることでありませう。言葉の味なんていふものも實にえらいもんですね。

私はこの老農夫の話や、賈島の「推敲」の話よりも、應舉の「あし」の話よりも、觀世大夫の「木賊刈」の話よりも、フローベルの一語説よりも、更に面白く、更に意味が深いと思ひ、黙止すにもだされずして備忘することにした。(八重葎)

古の歌ははかなき如くして、よく見ればまことなり。

後の歌はことわりある如くして、よく見ればそらごと

なり。古の歌はたゞことの如くして心高きなり。後

の歌は巧みある如くして、心淺らなり。(賀茂眞淵)

北原白秋
名は隆吉 詩
人・歌人 明
治十八年生

二 明治大帝の御製

北原 白秋

(12)

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。此の神ながらの道に立ち、まことに一大聖王として萬民の崇仰を受けさせられた。その御製を拜するに、まことに王者の御風格が、蒼穹のごとく、日天のごとく、十方四海に光耀してわたらせられる。歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて如何とも爲すすべはない。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

御製は桂園派の歌調にして、而もその御歌所調を遙かに超越し

桂園派
香川景樹(二
四二八—二五
〇三)の流

御歌所
宮内大臣管理
の下に、御製
御歌及び歌御
會に關する事
務を司る所

ておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。何となれば、大帝の御製は既に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て批判し奉るべきではない。大稜威(中)そのまゝが、帝王調として流露し光被して遍ねき故に、ひたすらに景仰し奉るのである。

眞の王道こそは大帝の立たせたまうた絶対無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが、既に一の宗教でおはせられた。御製を一々拜誦するに、その殆ど凡てが、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈しみ、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬはない。我が國民の常に禮拜しまつるところである。人たるの道、子たるの道、言の葉の道、あくまでも實に即いて御詠歌

(13)

ケンまゐ

遊ばされた。その中には教訓としての教訓、道歌としての道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少くないが、翻つて世の教育家、宗教家、道學家達は、眞純なる御風格の御製をも、各自の道の爲に牽強附會するやうな冒瀆があつてはならぬ。何となれば、大帝の御製は、理趣の爲の理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられたからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかゞひ奉つても、私はほとほと人としての大帝を思慕しまつるの情に堪へないものである。誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる故に、敢へて茲に其の種の御製を謹抄して、歌壇の人々の拜誦を希ふのである。

京都をいでたたむとするころ聽雪にて

わたどのの下ゆく水の音きくもこよひ一夜となり
けるかな

秋風寒 (言葉末書)

宮のうちもふくかぜさむくなり
にけり山べはいまや
時雨ふるらむ

をりにふれて

蟲の聲しづまりにけり
とのもりの朝ぎよめする時や
きぬらむ

土 筆

庭のおもの芝生がなかにつくつくし植ゑたるごとく
おひいでにけり

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ庭の薄もほにい
でにけり

禁 庭 萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の花もこのごろさか
りなるらむ

旅 夕

あとさきに人をともなふ旅ながらくれ行く道はさび
しかりけり

里

うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのここ
ちこそすれ

代々木
東京市澁谷區
今明治神宮の
ある所

枕詞 旅 宿 雨

草枕たびのやどりに着きて後うれしく雨はふりいで
にけり

庭花
九重の庭木のさくらさきにけり野山の春もさかりな
るらむ

見花
高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりを
ぞみる

何等の滞りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪であ
る。その純真無垢こそは天意である。所謂太古にして太新、蕩
蕩乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であ
らせられる。(季節の窓)

思無邪
詩三百、一言
以テ之ヲ蔽フ
曰ク、思無邪無
シト (論語)
蕩々乎として
天の如し
子曰ク、大ナ
ル哉、堯ノ君
タルヤ、巍々
乎タリ 唯天
ナ大ナリト爲
ス 唯堯之ニ
則ル 蕩々乎
トシテ民能ク
名ヅグルル無シ
(論語)

三 近江の國

谷崎潤一郎

鬱陶しい雨がざあざあと美濃の野山を閉込めて、恐しく蒸し
暑い日の午後である。汗かきの私は、べつとりと脂のにじんだ
顔を窓外に出して、冷やかな雫をほてつた兩頬に受けた。
汽車は關が原を出てから、間もなく近江の國境に入る。兩側
の平地には菜の花が一面に咲亂れて、見渡す限り遠く續いてゐ
る。近江の國一圓は菜畑で埋められてゐるかと思はれる。天
氣の好い日であつたら、黄色い花が、眼の覺めるやうに萌えて輝
くであらう。
湖水の端の見え出したのは、米原を過ぎてからである。をり
をり雨が上りかゝると、白い雲の裏から薄日が光つて、幽暗な拜

谷崎潤一郎
文學者 明治
十九年生
近江の國
今は滋賀縣の
管轄、大津・
彦根二市の他
十二郡に分れ
る
美濃
今は岐阜縣の
管轄、岐阜・
大垣二市の他
十五郡を含む
關が原
岐阜縣不破郡
の町
湖水
琵琶湖
彦根の城

彦根市にある
もと井伊氏の
居城

伊吹

滋賀・岐阜兩
縣境にある山
海拔一三七七
米

比良

滋賀縣滋賀郡
の北部にある
山 海拔一〇
七七米

比叡

京都府と滋賀
縣の境にある
山 海拔八四
八米

勢多の唐橋
現在は瀬田と
書く 滋賀縣
滋賀郡と同栗

太郡の境を流
れる瀬田川に
架けた橋

人麿

柿本朝臣人麿

滋賀の都

天智・弘文二

天皇の皇都

現大津市近傍
の地

平家物語

十二卷 源平

争亂の顛末を
敘した軍記物
語

忠度都落

平家物語卷七

にある 忠度

は平忠度 平

家の武將・歌

人 壽永三年

(一八四四)一

殿の奥の神鏡のやうに、青葉の生ひ茂つた丘陵の蔭から、湖の面
がきらきらと雲霧の中に窺はれる。やがて遙かに彦根の城の

白壁が、右手の小高い山の

一角に現れる。伊吹・比良

比叡など、いろいろの神話

や傳説を想ひ出させる國

境の山々も、今日は朦朧と

打煙つて姿を見せない。

近江の國は、私にとつて、

幼い時分から憧れの的であつた。伊吹山の大蛇だの、勢多の唐

橋の龍神だの、三上山の蜈蚣だの、お伽噺や歴史讀本に書いてあ

る奇怪な口碑だのが、どれ程少年時代の私の頭に想像の火の手

を煽つたであらう。「霞立つ、春日のきれる百敷の、大宮所見れば

悲しも。」と人麿が詠嘆した滋賀の都は、

平家物語の忠度都落を讀むに及んで

一入なつかしいものになつた。經政

が辨財天の靈驗に出遇つた竹生島も

近江である。

近江の國といへば、私はいつでも、土

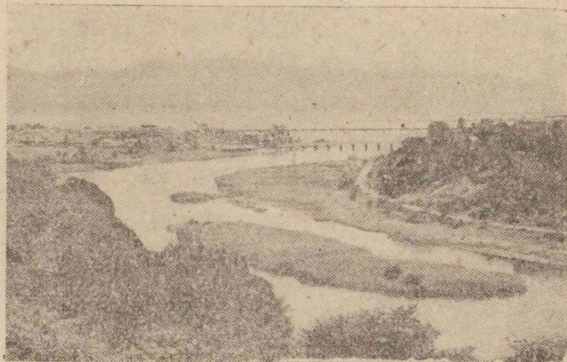
佐繪のやうな春霞が湖水を周る山々

浦々にたなびいて、明るい、暖かい、さう

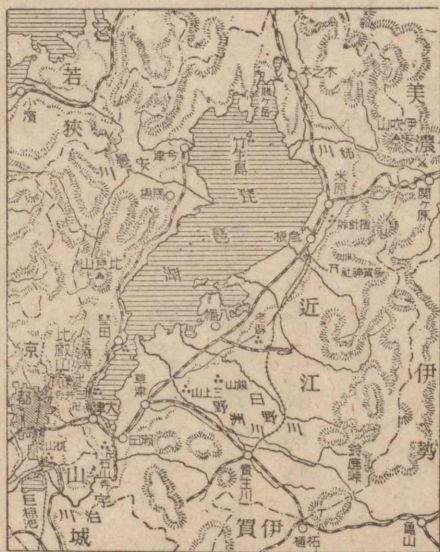
して何となくうら悲しい、夢のやうな

土地を心に描いた。

奈良や京都の趣を喜ぶ者は、あのうららかな近江の國を何と



瀬田川から琵琶湖を望む



近江の國

ノ谷で戦死
經政が云々
平家物語卷七
にある 經政
は皇后宮亮經
政 琵琶の上
手 壽永三年
一ノ谷で戦死
竹生島
琵琶湖の北部
にある周圍約
二軒の小島
八幡
滋賀縣蒲生郡
の町
草津
同栗太郡の町
石山・馬場
大津市内

思ふであらう。鏡のやうな湖水の沿岸には、自由な、豊富な、さま
ざまの神祕が潜んでゐるやうに感じられる。

八幡、草津、石山、馬場——一つ二つの停車場には下りて見物し
たい所もあるが、とにかく一旦京都へ安着してからの事ときめ
て、私は車室の窓から脇目もふらず移り行く風景に眺め入つた。
あゝ、近江の國、ちやうど菜の花のやうな美しい物語の生れる
近江の國、私は一度この國の風光を背景にした物語を書いてみ
たい。

瀬田の鐵橋を渡る時、ぱつと雲切れがして、琵琶湖遊覽の白塗
の蒸氣船が、青々とした水面に小波を立てながら、目の下を走つ
て行つた。(藝術一家言)

四 峠の茶屋

夏目漱石

「おい。」

と聲を掛けたが、返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子
が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が、淋しさ
うに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄
菓子ダ菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつ
てゐる。

「おい。」

と、また聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある白の上にふくれ
てゐた雞が、驚いて眼をさます。くくくくくと騒ぎ出す。敷
居の外に、土竈土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる。

文久錢
文久永寶とい
ふ唐銅錢で、
明治以後一厘
五毛に通用し
たもの

夏目漱石
名は金之助
英文學者・小
説家 大正五
年歿、年五十

イヌ
ヒメ
ヒメ
ヒメ
ヒメ

其の上に眞黒な茶釜がかけてある。幸ひ、下は焚きつけてある。返事がないから、無断でずつと這入つて、床几の上へ腰を下した。雞は羽搏をして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこつといふと、雌が細い聲でけつこつこつといふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には「一升枿程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐるを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に收る。」

書取

暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は吞氣に燻つてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店をあげ放しても苦にならないと見える處が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも面白い。其の上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で「高砂」を見たことがある。その時これは美しい活人畫だと思つた。茶店の婆さんの顔は、その高砂の婆さんの顔にそっくりである。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、嘸お困りでござんしよ。お、お、大分お濡

寶生
能樂の流派の
一つ
高砂
能樂の曲名

れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し焚付けてくれれば、あたりながら乾かすよ。」

どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と立ちあがりながら、「しつしつ。」と二聲で雞を追下ろす。こここ

こと駈出した雌雄は、焦茶色の畳から駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆くはくばの上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられてゐる。

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。自分分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話を

自分
「草枕」の主人
公なる畫家

しかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと尙聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で何處ぞへ逃げました。」

折柄、竈のうちがばちばちと鳴つて、赤い火が颯と風を起して、

一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸お寒かろ。」

と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微かな痕をまだ板底にからんでゐる。(草枕)

西村五雲
本名源次郎
日本畫家 西
村塾主 昭和
十三年歿、年
六十二

祇園神社
官幣大社八坂
神社の舊名
京都市東山區
圓山公園にあ
る

五 動物畫談

西村 五雲

(28)

春はすべての動物が喜ぶ。孔雀が大きな羽をひろげ鴛鴦や鴨など水禽も一際美しくなる。小禽は枝から枝へ輕妙に飛んで嬉々と春を謳歌する。

元日、鶯の初音を聴くのはよいが、私は雀の方がより好きだ。

大晦日の晩から出かけて、祇園神社でおけら火を貰つて来て、元日の雑煮をたく。やがて東がほんのりと白んで来る頃、庇に「ちゅんちゅん」と雀の囀りをきくのは、何ともいへずいい。

霽の立ちこめた冬の朝、枯枝に黙々と何羽も雀がとまつて、まゝくふくられて、朝日に羽をあたゝめてゐる風情や、山吹の花の片と散るころ、雀の雛が巢立ちして餌を求めてゐる様子や、秋の



燕 青 鼠 (竹内栖鳳筆)

新鳥丸
京都市上京區
の町

栖鳳先生
竹内栖鳳 名
は恒吉 日本
畫家 帝室技
藝員 元治元
年生

粟畑に群雀の行交ふ姿など、いづれも繪心をそゝる。雀の姿には(地味、キヤル)澁い味があつて、小鳥の中では一番好きだ。

新鳥丸の私の宅の附近では、二月頃になると、藪鶯の音にうらかな春の訪れを感じさせられる。霰降る木賊の根方に「ぢゆぢゆ」とさゝ鳴きする藪鶯の姿も面白いし、袖子の實の色づく枝に啼く鶯も、私の好きな繪になりさうだ。鶯については、いつか栖鳳先生が「杓子を半分に割つて目や口をつけると鶯のかたちができる。」と云はれたのは、實に簡にして要を得た名匠の至言であると感じ服してゐる。かうした急所をつかんだ觀察は、我々の深く學ばねばならぬところと思ふ。

鶯は飼養上なかなか技巧を要するさうだが、私はかつて畫室で放ち飼ひして見たことがある。段々馴れて來ると、繪を描い

てゐる私の肩にとまつたり、喉が渴くと筆洗の水をのんだりして、終日飛廻つて、私の無聊を慰めて呉れること多大であつた。繪になる鳥に鶴と軍雞とがある。鶴と聞いただけでも麗朗な春らしい氣持がある。繪になり易い代りに、表現によつては平俗低調に墮する傾きがある。

軍雞はその大きさといひ、形といひ、色といひ、さうしてあの鬪志から來る迫力といひ、どの點からも繪にしたい衝動に驅られる鳥である。私は先年畫材を求めて洛南淀の町を歩いてゐるうち、路傍の牛小屋の一角の、青草のもられてある中から走り出た一羽の軍雞の若雞を見た。小屋に隣つた板塀には、菅笠や早乙女の脚絆、手甲などがかけられてあつて、好個の畫題をなしてゐた。

書取



「泉飛」筆雲五村西

私は小禽を描く時は、實際よりも幾分小さく描くやうにしてゐる。その方が、枝から枝へ「ちゆんちゆん」と飛んで、瞬時も停滯しない小禽の輕快な躍動を表現するに効果的だと思ふからである。

また、小禽の自然な動きを忠實に觀察してゐると、逆さにとまつたり、下をのぞいたりするやうな姿がよく見られ、いづれも好個の畫材となる。動物はどんなものでも親しく見てゐると、だんだんいゝところが分つて來る。先日動物園の温室をのぞいて見た。手長猿が長い手をのばして、右の手で左手の肘のところを搔いてゐた。そ

れから、長い腕を組んで、手骨を膝の邊りにおいて、きよとんと人の顔を見廻しはじめた。不恰好なものではあるが、猿の特徴が一番よく出てゐると思つた。

手長猿はほかの猿とちがつて、手に特殊な味をもつてゐる。拇指が他の四本の指とちよつと距離をもつて上の方についてゐるため、指先が長く見えていゝのだ。

日本猿は冬も温室に入れる必要がないので、普通の小舎に澤山いれられてゐるが、素朴な親しみやすい味をもつてゐる。

(東京朝日新聞)

六 干潟の舟

幸 田 露 伴

風にさからひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流にさからひて舟を進むるには押切るといふ意地もあれど、たゞ春の日の潮の底りて遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の煎らるるものなり。

嘗て此のことを言出でて、さる折にも何とかなすべき手段ありや」と年老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人は打笑ひて、

「何時にても纜を解かんとすれば、何時にても水あるところに舟を繋ぐべし。我等は繋ぐ時には解くことを思ひて繋ぎ解

幸田露伴
名は成行 文
學者 文學博
士 應三年
生

く時には繋ぐことを思ひて解く。素人は繋ぐ時には解くこ
とを思はず、解く時には繋ぐことを思はず。こゝを以て、歸ら
んとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干瀉
にあせるやうのこともあるに至るなり。若し既に干瀉に
すわりたる舟となりたらんには、我等なりとて其の場に臨み
て何の手段のあるべき。たゞ少しは早くとも心長閑に食事
などすませて、やがて立働かん折に足纏れのせぬやうに、舟の
中を取片附け、猶それにても時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕
ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれど
も、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さで叶
はぬことを爲しつゝ、待たば必ず來べき潮を待つに、大抵其の
ことを爲し果つるにも至らで、潮ははや忽ちにして來るもの

なり。何時か一度爲さで叶はぬことは、小さき舟の中にても
いと多きものなれば、潮待つ間に爲すべきことのなしといふ
はなし。潮待つ間に爲すべきことのあるを見出して之を爲
さば、たゞ時の足らざるを覺ゆるのみにて更に心のあせらる
ることなどあるべくもなし。

と言ひけり。面白き言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

(露伴全集)

古の人は、散亂心を以て事をなすことを忌む事甚
だしく、學問にせよ功業にせよ、爲して成らざるあ
るは、大抵この散亂心を以て事に當るが故なりと
まで思考せり。

(幸田露伴)

橘 南谿

宮川氏 名は
春暉 文學者
醫を業として
京都に住む
文化二年(二
四六五)歿、
年五十三

中江藤樹

名は原 儒者
慶安元年(二
三〇八)歿、
年四十一

大溝

滋賀縣高島郡
今は町

小川村

高島郡 今は
青柳村に屬す

王陽明

七 近江聖人

橘 南 谿

中江藤樹先生は、俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生れ、學、王陽明の流を汲みて、その徳行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと先生の墓所小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、「先生の墓所は」と問へるに、農夫は「畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせん。」とて、士人を導きて行きけり。ほどなく小さき藁屋の前に出でけるが、「しばし待ち給へ。」とて農夫は内に入り、やがて出で来るを見れば、木綿の新しき着物のうへに紋附きたる羽織を着たり。士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて

つきて行くほどに、やがて墓所に到りぬ。農夫は竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ。」と言ひて、その身は戸外に退きて恭しく拜伏せり。士人はこの様を見て再び驚き、さては衣服を改めた



中江藤樹

るは、我に對するためにはあらで、先生を敬するためにてありけるよと思ひつきければ、農夫に向ひて「汝は藤樹先生の家來筋の者なるか。」と問ひぬ。農夫は詞を改めて、「さには候はず。されどこの村の者は、一人として先生の御恩を

蒙らざるものなし。我等が親を敬ひ子を慈しむことを辨へ知りたるは、皆これ先生の御恩なれば、子々孫々、必ずその御恩を忘

明の大儒 名
は守仁 良知
の説を立つ
皇紀二一八九
年歿、年五十
七

墓所

青柳村小川の
玉林寺にある

フランク

るべからず」とわが父母常に教へ候ひき」と答へたり。士人はそのはじめ、只何となく一見せんとの心にて來れるが、この農夫の舉動によりて俄かに敬慕の念を起し、懇ろにその墓前に禮拜して歸りきとぞ。

この一事、以て先生の徳行のいかに高くして、またその化育のいかによく下に及びしかを見るに足らん。

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を尋ぬるに、その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ榎木に走り行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふ

熊澤蕃山
名は了介 備
前侯池田光政
に仕へた 元
祿四年(二三
五)歿、年
七十三
河原市
滋賀縣高島郡
榎木の宿
滋賀縣滋賀郡

ヨミガエリ
ヨリ

に、相違無ければ、その金を取出して返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、行李より別の金子十五兩を取出して、馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。さればこの恩なかなか言葉のいび盡くすべきにあらず。まづ當座の御禮までにこれを贈り奉る」と涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顔色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふことあるべき」とて、手にだに取らず。

色々にしらへ言へども、更に受けずして歸らんとする故、止むことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々減じて遂には金二歩となし、「せめてこればかりは」と、理を盡くし詞を盡くして言ふに、「この金を受くるほどならば、二百兩をも留め置くべ

し。それだにかく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるはわが心にあらねど、餘りに餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべきところをこゝまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば申し請くべし」と言ひて、二百文を懐にして歸らんとす。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。たゞわが在處の近くに小川村といふ處あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き申したるに、親には孝を盡くすべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば取るべき理なしと心得たるまでの事なり」と言ひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

一冬晴暖雨全少

己酉和月

蕃山熊澤書

蕃山筆蹟

蕃山をりふし田舎よりのぼりゐて、學問修業の最中なりけるが、この物語を聞きて、「その人こそ誠の儒といふものなれ」とて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學徳なし」とて、更に許し給はず。蕃

蕃山筆蹟
一冬晴暖雨全
少
己酉和月
蕃山熊澤書

備前侯
岡山の藩主池
田光政 天和
二年(二三四
二)歿、年七
十四

東遊記
五卷 著者が
東海・東山・北
陸を遍歴した
間に見聞した
奇事異聞を録
したものと
なり。

山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門にたゞずみて歸らず、先生の老母これを氣の毒がり「よしや、まづ内に入れ申せよ」とあるに、辭みがたくて入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり。とて蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

(東遊記)

子曰く、徳孤ならず、必ず隣あり。徳はもと人心にそなはりて、人の同じく好む所のものなれば、徳ある人は孤立することなく、必ず朋類ありて之に従ひ親しむこと、猶人居の隣あるが如きなりとの意なり。

(論語解義)

ハ 安井仲平

森 鷗 外

森 鷗外
名は林太郎
文學者 大正
十一年歿、年
六十一
安井仲平
名は衡 號は
息軒 儒者
明治九年歿、
年七十六
仲平の父
學者 朝完滄
洲と號した
日向國宮崎郡
清武村
今の宮崎縣宮
崎郡清武村
段 肥藩
藩主は伊東氏
五萬石 その

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、仲平さんは不男だ。といふ陰言が、清武一郷に傳へられてゐる。仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝ほどの宅地があつて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れだ所に田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにあつたのである。併し仲平の父は、三十八の時江戸へ修行に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、段 肥藩で任用せられるやうになつたので、今では田畑の犬部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つするとき、父は兄

弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の背丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして、外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが、例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が、皆言合はせたやうに二人を見較べて、連があれば連に何事をかさゝやいた。背の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕になつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ不具になつたのを思へば、偶然といふのも殘酷なものだと云ふ外無い。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで、朝は少し早目に食事を濟ませて、一足先に、出晚は少し居残つて爲事をして、一足遅れて歸つて見た。併し、行逢ふ人が自分の方を見て、連とさゝやくことはやまなかつた。そればかりではない。兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度は餘程不遠慮になつて、ささやく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狭い土地で、行逢ふ人は大抵識り合つた中であつた。

仲平はひとりで歩いて見て、二つの發見をした。一つは自分が

篠崎小竹
名は弼 字は承弼 儒者
嘉永四年(二五一一)歿、年七十一
大阪土佐堀
大阪市西區の町

これまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを悟らなかつたといふことである。今一つは驚くべし、兄と自分とに渾名が附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄までが猿引と云はれてゐるといふことである。仲平はこの發見を胸に藏めて誰にも話さなかつたが、その後は強ひて兄と離れ離れに田畑に往反しようとはしなかつた。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして、大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に著いて長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。

古賀侗庵
名は煜 字は季暉 通稱小太郎 徳川幕府の儒者 弘化四年(二五〇七)歿、年六十

昌平爨
江戸幕府官設儒學専門の最高學府 將軍綱吉の創設 江戸湯島にあつた

松崎慊堂
初の名は密 字は退藏 儒者 弘化元年(二五〇四)歿 年七十四

た。中一年置いて、二十三になつた時故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病身で、とうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて、昌平爨に入つた。後世の註疏に據らずに、經義を窮めようとする仲平がためには、古賀より松崎慊堂の方が懐かしかつたが、昌平爨に入るには、林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、背の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも、仲平は無頓著に黙り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀ん

林
昌平費大學頭
林氏、こゝで
は林述齋をい
ふか

で見ると、

今は音を忍が岡の時鳥いつか雲井のよそに名告らむ
と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ。」

と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍氣味悪くも思つた。こ
れは十九の時漢學に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり
研究した名殘で、わざと流儀違の和歌の眞似をして、同窓の擲楡
に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にせられ
た。そして、翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。

今年の正月から清武村字中野に藩の學問所が立つことにな
つて、工事の最中である。それが落成すると、六十二になる父滄

洲翁と、去年江戸から藩主の供をして歸つた三十になる仲平と
が、父子共に講壇に立つ筈である。

江戸がへり、昌平覺仕込と聞いて「仲平さんはえらくなりなさ
るだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で、背の低
い男振を見ては、「仲平は不男だ。」と陰言を云はずには置かなかつ
た。(鷗外全集)

詩人は利己者である。作品中に無遠慮に自
己を置いてゐる。讀者は其の作品に對して
讀者の自己を見出して面白がる。

(アナトールフランス)

アナトール
フランス
(1841—1921)
フランスの詩
人・文藝批評
家

勝海舟 名は安房守、後に安義邦、後徳川末期の政治家 明治三十二年歿、年七十七
 西郷 名は隆盛、號は南洲、維新の元勳、明治十年城山に歿、年五十一
 阪本龍馬 慶應勤王家、三年刺客の刃に斃れた、年三十三

九 西郷との會見

勝海舟

始めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰せ附けられた時で、場所は大阪の旅館であつた。その時、西郷は御留守居役格であつた。轡の紋の附いた黒縮緬の羽織を着て、中々立派な風采であつた。阪本龍馬が来て、先生が屢、西郷の人物を賞せられるので、拙者も會つて見たいから、添書を書いてくれ。」と云つた。早速書いてやつたが、その後歸つて来て、「成程西郷といふ男はわからぬ男だ。小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらう。」と云つたが、阪本も中々鑑識のある男である。

西郷の偉い所は、大膽識と大誠意とにある。自分の一言を信

せりしつてせんりかく

ハカヤ



勝海舟肖像

のさなはかり手
あつたか

じて、たつた一人で江戸城へ乗込んで来た。自分も事を處するには多少の權謀を用ひないでもないが、唯この西郷の至誠に對しては、それを用ひることが出来なかつた。この時に際して、小籌淺略を事とするのは、却つてこの人に腹を見すかさされる許りだと思つて、自分も至誠を以て之に應じたから、江戸城の受渡も、あの通り立談の間に濟んだのである。西郷は阪本の評した通り、實に漠然たる男であつた。幕府が倒れて新政が未だ布かれず、ちやうど無政府の姿になつてゐた所へ、官軍が乗込んで来たのだから、江戸市中の取締が甚だ面倒になつて来た。然

品川
今の東京市品川
品川北品川
芝田町
東京市芝田

るに、大量な西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局を自分の肩に投げかけて、「後は勝さんがどうかなさるだらう。」と云つて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる「だらう」には、自分も實に閉口した。これが普通の男なら、「これはかう、あれはあゝ。」とそれぞれ談判して置くだらうに、さりとては餘り漠然ではないか。併し、考へてみると、西郷の天分が極めて高い所以はこゝにある。西郷はどうも人にわからぬ所があつた。小さい人物なら、どんなにしたつて、すぐ腹の底まで見えてしまふが、大きい人物になると、さうではない。

西郷の大度洪量に就いて、維新當時の模様を今少し細かに話さう。官軍が品川まで押寄せて来て、今にも江戸城へ攻入らうといふ際に、西郷は、自分が出した僅か一本の手紙で、芝田町の薩

摩屋敷までのそのと談判にやつて来た。なかなか今の人には出来ない事である。

あの時の談判は實に骨であつた。官軍に西郷が居なければ、



西郷南洲肖像

話はとても纏らなかつた處だらう。その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが来る、板橋からは伊地知などが来る、江戸の市中では今にも官軍が乗込むだらうと大騒をしてゐた。しかし、自分

分は外の人々には頓着せず、たゞ西郷一人を眼中においた。そこで、今話した通り極短い手紙を一通遣つて、「雙方何處かで出會つた上で談判したい。」との旨を申し送り、其の場所は田町の

板橋
今の板橋區板橋町
伊地知
名は正治
明治十九年歿

薩摩の別邸がよからう。」と此方から選定してやつた。すると、官軍からも早速承知したと返事をよこし、いよいよ薩摩屋敷で談判を開くことになった。

當日自分は羽織袴で、馬に騎つて、従者を一人連れて薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内せられて暫く待つてゐると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、「これは實に遅刻しましたて失禮。」と挨拶しながら座敷に通つた。其の様子は少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

さていよいよ談判になると、西郷は自分の云ふことを一々信用してくれ、其の間一點の疑念も挟まなかつた。「色々むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受します。」西郷の

當日
明治元年三月
十四日

この一言で、江戸百萬の生靈は、その生命と財産とを保つことが出来、また徳川氏はその滅亡を免れたのである。若しこれが他人であつたら、「いや、貴様の云ふことは自家撞着だ。」とか、「言行不



(聖徳記念繪畫館壁畫)
江戸開城談判(緒城素明筆)

い。その大局を達観して、しかも果斷であつたのには、自分も感心した。

致だ。」とか、「澤山の兇徒があつて、通り處々に屯集してゐるのに、恭順の實は何處にあるか。」とか、色々喧しく責立てたに違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。しかし、西郷はそんな野暮は云はな

殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣としての敬意を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光をもつて、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつた事である。

その膽量の大きいことは、所謂天空海濶で、見識ぶるなどいふことは固より少しもなかつた。人見寧といふ男が、若い時分に自分の處へやつて來て、西郷に會ひたいから紹介狀を書いてくれと云つたことがあつた。所が、段々様子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。そこで、自分は人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、其の中に、「この男は、下を刺す筈だが、兎も角も會つてやつてくれ。」と認めておいた。それから人見は、むきに薩州へ下つて、まづ桐野に面會した。桐野も流石に眼があ

桐野
名は利秋
王家 明治十
年 城山に陣歿
年四十

る。人見を見ると、その舉動が如何にも尋常でないから、ひそかに彼の西郷への紹介狀を開封して見たら、果して今の始末だ。不敵の桐野も、之には流石に少しく驚いて、直様委細を西郷へ通知してやつた。ところが、西郷は一向平氣なもので、「勝からの紹介なら會つて見よう。」といふことである。そこで、人見は翌日西郷の屋敷を尋ねて行つて、「天下の大勢に關するお話を承りに参りました。」と云ふと、西郷はちやうど玄關に横臥してゐたが、その聲を聞くと、悠々と起きなほつて、「私が吉之助だが、私は天下の大勢などいふむづかしいことは知らない。まあお聞きなさい。先日私は大隅の方へ旅行した。その途中で、腹がへつてたまらぬから、十六文で芋を買つて喰つたものだが、高が十六文で腹を養ふ様な吉之助に、天下の形勢などいふものが分るはずがない

アイカ

ではないか。」と云つて、大口を開いて笑つた。そこで血氣の人見もこのだしぬけの話に氣を吞まれて、殺すどころの段ではなく、挨拶もろくろくし得ずに歸つて來て、「西郷さんは實に豪傑だ。」と感服して話したことがあつた。

知識の點においては、外國の事情などは却つて自分が話して聞かせた位だが、その膽氣の大きいことはこの通り實に絶倫なものであつた。(永川清話)

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。(南洲遺訓)

10 日本海海戦

五月二十七八日
明治三十八年
第二・第三艦隊
ロシアの太平洋第二艦隊及び第三艦隊
安南沿岸
佛領印度支那沿岸のカムラシ湾及びホンコウ湾
東水道
對馬と壹岐との間の海面

天祐と神助とに依り、我が聯合艦隊は五月二十七八日、敵の第二・第三艦隊と日本海に戦うて、遂に殆ど之を撃滅するを得たり。初め敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基づき、之を近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して、徐ろに敵の北上を待ちしが、敵は一時安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く數隻の哨艦を南方に配備し、各隊は一切の戦備を整へ、直ちに出動し得る姿勢を持したり。

果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、「敵艦見ゆ、東水道に向ふものの如し。」と警報せり。全軍踴躍、直ちに對敵行動を開始せり。

片岡艦隊
 第三艦隊司令
 長官海軍中將
 片岡七郎率

東郷艦隊
 第三艦隊所屬
 海軍少將東郷
 正路率

出羽艦隊
 第一艦隊所屬
 海軍中將出羽
 重遠率

壹岐・對馬
 共に長崎縣に
 屬する

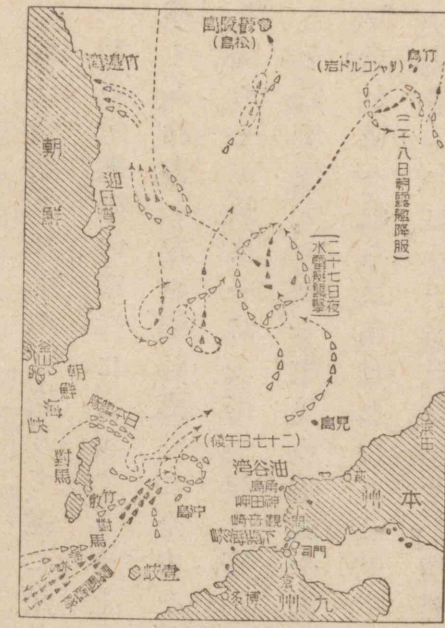
沖の島
 福岡縣に屬す
 る

主戰艦隊
 東郷大將直率

裝甲巡洋艦隊
 第二艦隊上村
 司令長官率

瓜生艦隊
 第二艦隊所屬
 海軍中將瓜生
 外吉率

午前七時、哨艦和泉、亦敵の北東に航進するを報じ、片岡艦隊、東郷艦隊、つゞいて出羽艦隊も、午前十時十一時の交、壹岐對馬の間より沖の島附近に至る迄、時々敵の砲撃を受けつゝ、終始よく之と接觸を保ち、詳かに敵情を電報せしかば、海上濛氣深く、展望五海里以外に及ばざり



本日海海戰狀況圖

し此の日も、數十海里を隔てたる敵影恰も眼中に映れるが如く、既に敵の戦隊は其の第二、第三艦隊の全力なること、其の陣形は二列縦陣にして、其の主力は右翼の先頭に立ち、其の他の艦船約

七隻は其の後尾に續けること、其の速度は約十二ノットにして、なほ北東に航進せること等を知り、本職は之により、我が主力を以て午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ、先づその左翼の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。

午後一時三十分、主戰艦隊、裝甲巡洋艦隊、瓜生戰隊、各驅逐隊及び出羽東郷戰隊等前後して來り會し、暫時にして正に我が左舷に當れる南方數海里に敵影を發見せり。こゝに於て戰鬪開始の令を下し、我が全艦隊に對し、皇國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよとの信號旗を掲げたり。而して、主戰艦隊は斜に敵の先頭を壓迫し、裝甲巡洋艦これに續き、他の諸戰隊はいづれも南下して敵の後尾を衝けり。これ我が豫定戰策なり。敵は我が壓迫を避けて、稍右舷に舵を轉じ、こゝに砲火を開始

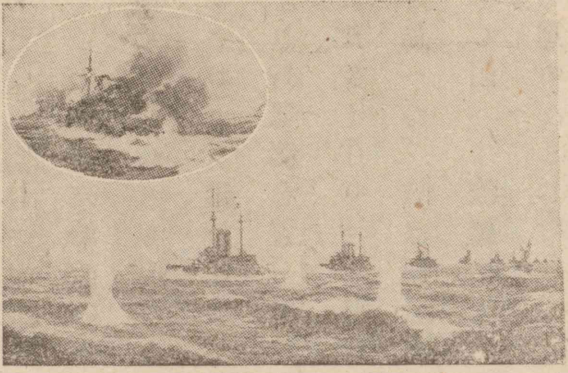
ユルヤ

せり。われは暫く之に耐へて、距離六千メートルに近づくに及び、猛烈に敵の左右の先頭艦に砲火を集中せり。敵はこれが爲に益、東南に壓迫せらるるもの如く、自然に不規則なる單縦陣となり、われと並航の姿勢をとれるが、我が全隊の砲火は距離の短縮とともに益著しき効果をあらはし、その左翼の先頭艦オスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて大火災を起し、旗艦クニヤージスワロフ、二番艦アレクサンドル三世もまた大火災に罹り、相ついで戦列を離れければ、敵の陣形いよいよ亂れ、他の諸艦また火災に罹れるもの多く、炎煙西風に襲きて忽ち海面を蔽ひ、濛氣と共に全く敵影を包みぬ。これ午後二時四十五分にして、彼我の勝敗は既にこの間に決したるなり。
我は煙霧のうちに敵影を發見する毎に、緩やかに之を砲撃し

ヤクシ

廣瀬
名は順太郎
當時中佐
鈴木
名は貫太郎
當時中佐

サワサク
ウメツキ



日本海海戦(二十七日午後二時過) 艦旗は上圖

つ、敵の前路に出でたれば、敵は俄かに變針して北方に遁走を試みんとせり。我は急にその前路を扼して、再び南方に壓迫し、猛射したれば、敵の諸艦は多大なる損害を受けて、頗る混亂を極めぬ。この間に壯烈なる事蹟として特記すべきは、千早及び廣瀬、鈴木、の兩驅逐隊が敵の敗艦スワロフに對し、二回まで勇敢なる水雷攻撃を執行したることなり。

かくて、我は洋上に彷徨離散せる殘敵を縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時夕陽すでに昏き、我が驅逐隊、水雷艇

鬱陵島
朝鮮慶尙北道
に屬する

隊は漸次に敵に逼れるを以て、主戦艦隊は日没と共に引上げ、同時に本職は「全軍北航して、明朝鬱陵島に集合すべし。」と傳令せしめ、こゝに當日の晝戦を終了せり。

この日朝來南西の強風浪を揚ぐることに高く、夕刻に至りて風稍和ぎたれども、浪なほ靜まらず。洋中の水雷攻撃は不利尠からざれど、各驅逐隊及び艇隊は、この千歳一遇の時機を失せんを恐れ、皆風濤を冒して日没前に來り會し、各先を争うて敵の周圍に蟻集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して激烈なる攻撃を加へつ。敵は探照砲火を以て極力防戦したるが、遂に我が攻撃に耐へず、僚艦相失して四分五裂の状態となり、各一方の血路を覓めんとしたれば、我が追撃のために一場の大混戦を現出し、少くも敵艦三隻は、この間に我が水雷に罹りて全くその戦鬪航

行力を失ひぬ。後日捕虜の言を聞くに、當夜水雷攻撃の猛烈なりしは殆ど言語に絶し、左右應接に遑なく、且その距離あまりに近きために、備砲俯角の度を過ぎて照準する能はざりきといふ。二十八日黎明、濛氣拭へるが如し、既に鬱陵島附近にありたる我が艦隊は、早くも東方に當り、殘隊の煤煙數條あるを發見せり。これ問はずして、殘敵の主力たるや明かなり。即ち三方より之を包圍す。固より敗餘の敵艦、已に多大なる損傷を負へるのみならず、わが優勢に抵抗し得べきにあらざれば、砲火の開かるるや須臾にして白旗を掲げ、敵艦司令官ネボガトフ少將は、その戦艦四隻を擧げて部下と共に降意を表しぬ。本職は特に將校以上に帶劍を許して之を受けたり。

驅逐艦漣陽炎は、鬱陵島附近に於て敵の驅逐艦二隻の遁走し

乙巳巳

キコノオノレツナト

下は付キ イステはヤロミサハマシハ

ロゼストウエ
ンスキー
(606T-388T)

ガ
ン
マ
リ

エ

來れるを發見し、極力これに追及して戰鬪を開始したるに、その後續艦は遂に白旗を掲げぬ。これビエードウイにして、敵艦隊

司令長官ロゼストウエ

ンスキー中將及びその

幕僚の移乗し居るを知

り、その乗員と共に之を

捕虜となせり。聯合艦

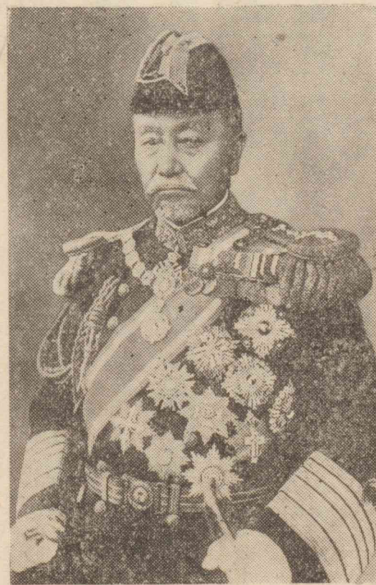
隊の大部が北方追撃の

戰果を收むるに汲々たるに南方、前日の戰場に於ても亦相應な

る殘獲ありて、敵艦數隻を撃滅したり。

抑日本海を通過せんとせし敵艦隊は約三十八隻にして、我が

撃滅或は捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦驅逐艦及び特



東郷司令長官肖像

務艦各數隻に過ぎず。この二日間の戰鬪に於て、我が失ひたるものは水雷艇三隻のみ。その他多少の損害を蒙りたるものあれども、一として今後の役務に支障あるものなし。

此の大戦に於ける敵の兵力、われと大差あるにあらず、敵の將卒も亦その祖國の爲に極力奮闘したるを認む。しかも、我が聯合艦隊がよく勝を制して奇績を收め得たるものは、一に天皇陛下の御稜威の致す所にして、もとより人爲の能くすべきにあらず。殊に我が軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に敵に對して勇戦したりし麾下將卒も、皆この成果を見るに及びて、唯感激してその言ふところを知らざるもの如し。(東郷聯合艦隊司令長官公報による)

キ
ガ
キ

二 蟬

蟬は夏至の頃始めて姿を現す。炎熱に焼け、足に踏まれて固くなつた、人通りの多い小徑の地面に、拇指位の圓い孔があく。これは蟬の蛹が出て来る孔である。蛹はこの孔から地表に出て、變態を行ふのである。孔は耕作されてひつくり返された地面でないかぎり、まづどこにでも見られるが、普通最も多くあるのは、暑い乾燥したあらはな地面で、それも特に路に沿うたところである。必要とあれば、凝灰土や焼けた粘土をさへ通過出来るほど丈夫な道具を備へてゐるので、蛹は孔を掘るのに特に堅い地點を好むのである。

六月の下旬、私は見棄てられたばかりの坑孔の取調べに著手

せんちこがね
鞘翅目ヨガネ
蟲科の甲蟲

した。孔の口は圓く、直徑は約二センチメートル半位ある。この圓い口の周圍には、絶対に剩り土や、外に押出された土の堆積がない。蟬の穴は「せんちこがね」の穴のやうに、土が盛上つてゐることは決してない。



蟬の土出と孔の口

この相違は、仕事の運び方によつて説明される。「せんちこがね」は外から内に進んでゆく。即ち、最初坑孔の口から掘始めるので、そのために掘出された材料は表面に運び出されて積上げられる。蟬の蛹は、反對に、内から外に進み、出口の戸を開けるのは一番最後である。

仕事の終になつてはじめてあくのだから、そこが物棄て場にされよう筈がないのである。

蟬の坑道は大體四十センチメートル位の深さである。それは圓筒の形をなし、土質の必要に應じて多少曲りくねつてはゐる。が常に最短距離の垂直に近いものである。全體の長さに亙つて、何一つさへざるものがない。このやうな發掘作業から豫想される剩り土は、どこにも見當らない。坑道の下端は行止りになつてゐて、そこはほかより幾分廣い。そして、平滑な壁のある住居になつてゐる。どう見ても、この坑孔の延長である別な地下廊がありさうには思へない。

孔の長さと同徑とから推して、この發掘は大體二百立方センチメートルの量をあらはしてゐる。その除き去られた土は一

體どうなつたのであらうか。

蛹は非常に乾燥して非常に碎け易いところを掘るので、坑孔もどん底の部屋も、埃つぽい、崩れ易い壁を持たねばならぬわけである。しかし、事實はその反對で、壁には上塗りがされ、粘りを含んだ土の練りもので粗塗りがされてゐるのを見出して、私は少からず驚かされた。それは嚴密に云つて滑かといふ程ではないが、しかしざらざらは上塗りで止められ、崩れ易い材料は膠着劑で固められてゐる。蛹が地表の近くまで昇つたり、どん底の隠れ家に降りたりしても、爪のついた脚のために土が崩れ落ちて、圓管を塞いだり、昇りを困難にしたり、歸ることを不可能にしたりするやうなことはない。

この昇り孔は、蛹が太陽の下に出るのを待兼ねて、突嗟の間に

性急に作り上げたものではない。これは、本建築の屋敷であり住居である。孔を明けたら直ちに出てしまふだけの出口だつたら、こんな用意は不用であらう。



蟬の裸と蛹のそと坑の道

辛抱強く、幾週間となく、恐らくは幾ヶ月ともなく、裸蟲は垂直な圓筒を穿ち、中を片付け、固める。たゞ上の方は、外面との連絡をつけないために、指一本位の厚みだけはそのまゝにして置く。底の方には、ほかよりは入念に手の這入つた小室を拵へる。これが裸蟲の隠れ家である。どうやら天氣が好ささうだといふ氣がすれば、裸蟲は上へ攀上つて行き、覆

ひになつてゐる僅かばかりの土を通じて外界を聴診し、天候と溫度との具合を調べる。萬一脱皮の爲には致命的に重大な異變である驟雨や寒風などの恐れがあると、この用心深い蟲は管の底に降りて行つて、更に後日を期するのである。反對に大氣の状態が良好であれば、天井は爪の幾撃かで壞され、裸蟲は坑孔から顯れ出るのである。

以上によつて次のことがあきらかになる。即ち蟬の地下廊は待合室であり、測候所であつて、裸蟲はこゝに長い間滞在してゐて、或は外の天氣具合を調べるため表面に近いところまで登つて行つたり、或は一層よく身を匿まふために底の方に降りて行つたりする。底の方に休息部屋を作つたことや、また絶えず往つたり來たりしても崩れ落ちる心配のないやうに、壁に固著

塗料を塗ることが如何に必要であるかは、かくして説明されよ

たゞさう無造作に説明出来ないのは、發掘作業に伴なふ剩り土がすつかり無くなつてゐるといふ事實と、如何にして灰のやうに乾燥しきつた土の中で、壁の材料が手に入れられるかといふ問題である。

地面から裸蟲が出て來るところを調べて見ると、裸蟲は殆どいつも幾分泥で汚れ、その泥は時には生々しく、時には乾き切つてゐる。穴掘り道具である前足の鶴嘴の先は、泥の塊の中に見えなくなつてゐる。他の肢は泥足袋を穿き、背中は粘土で汚れてゐる。謂はば、泥を搔廻して來たばかりの下水掃除夫と云つた形である。非常に乾いた地面から出て來るだけに、かうした

汚れは特に注意を惹かずには置かない。

この方向に一步を進めると、坑道の問題は解かれる。私は蛹が出口の廊道で仕事をしてゐるところを掘出したことがある。この僥倖にも見附けた蟲は、いま孔を掘始めたばかりのところであつた。遮るものの少しもない隘道が一寸ばかりと、どん底に休息の部屋と、それがその時の工事のすべてであつた。ところで工夫はどんな状態にあつたらうか。

蛹は外へ出たところを掴まへたものより、ずつと色が淡い。

あの大きな眼は特に白味を帯び、どんよりしてゐて、藪睨みで、どうも物を視る力がないらしい。眼があつたところで、地下で何の役に立たう。地から出て來た蛹の眼は、反對に黒くつやつやしてゐて、物を見る性能を現してゐる。太陽の下に現れた未來

の蟬は、時には出口の孔からかなり離れた處に、變態を行ふ止り木を探さねばならぬ。はつきりと見るといふことは、その際蟬にとつて明瞭に必要なことである。蛹がその昇りの隘道を、急いで即席に作るのではなく、長い間手掛けて作るのだといふことがわかるには、解放の色々な準備の間に行はれる、この視官の成熟を見るだけでも十分であらう。

その上、色の淡い眼の見えぬ蛹は、成熟した状態よりも、嵩が大きい。液體で脹れてゐて、まるで水腫症にでも罹つたやうだ。指に捕へると、裸蛹は後方に透明な液汁を漏らす。この液汁でからだ全體が濕つてゐるのである。腸から排泄されたこの流動體は、尿分泌作用の所産であらうか。それとも、樹液で養はれてゐる胃の單なる殘物であらうか。とにかく私はこゝでは、言

葉の便宜上それを「小便」と呼んで置くことにしよう。

さてこの「小便」の泉それが謎を解く鍵である。蛹が進むにつれ掘るにつれて、蛹はかの粉狀の材料にこの水を撒き、それを練り粉に變へ、その場で下腹で壓してそれを壁に押しつけるのである。乾き切つてゐた土が粘々した泥になり粗い土の隙間に入り込む。一番よく溶けた部分が奥深く滲込み、残りは壓され、詰められて、方々の間隙を埋める。このやうにして廊道の空所が得られるのである。そこに剩り土が少しもないのは、粉狀の廢物が通過して來た土質よりもつと緻密な、もつと等質の漆喰として、その場で用ひられてしまふからである。

蛹は、だから粘々した泥の中で仕事をしてゐるわけである。そしてそれが、からだのよごれてゐる理由である。成蟲になる

ファールブル

(1823-1915)

フランスの昆

蟲學者

正岡子規

名は常規 俳

人 明治三十

五年歿、年三

十六

ともう坑夫の苦役を免れたわけであるが、それでもこの小便袋
をすつかり抛棄してしまつたのではない。その名残は防禦手
段として保存されてゐる。即ちあまり側に寄つて眺めると蟬
はこの邪魔者に「小便」をびつと引つ掛けて、不意に飛んで行つて
しまふ。蟬はその二つの形態を通じて、かさかさな體質をして
はゐるが、なかなか達者な水撒きである。

(「ファールブル昆蟲記」による)

物干のころもの袖に蟬鳴きて晝照草に日は

ゆふべなり

蟬の鳴く森の木末に風すぎて松葉杉葉のは

らはらと落つ

(正岡子規)

三 暑 い

千家 元 麿

暑い。

遮るものもない日盛りの空、

無限に續く島、

胡瓜の棚、

唐茄子畑、茄子畑、

唐黍の列、ごぼう畑、馬鈴薯、

その間を道は

人も通らず白く續いてゐる。

千家元麿
詩人 明治二
十一年生

小さい草叢ですいつちよが鳴いてゐる。

ぐらぐらするやうな熱氣の中で、

野菜の花が咲き、實が育つてゐる。

唐黍の廣い葉は無遠慮に繁り溢れて實を隠してゐる。

大きな花は中々立派だ。

自分は野菜の展覧會でも見てゆく氣持で

いろいろの野菜の藝術に感心する。

いかにも食物らしい實のある花は、

素朴で鄙びてゐて面白い。

夏草

三 清 水

荻原 井泉水

荻原井泉水
名は藤吉 俳
人、文學博士
明治十七年生

岩の窪みにたゞ、へられてゐる清水、そこには象牙細工のやうな白い美しい蟹が遊んでゐたりする。木の根からにじみ出る清水、そこには草の葉が水滴のために、休むことなくかぶりを振つてゐたりする。

私は嘗て大島から三宅島通ひの船に乗つたが、烈しい西風に吹立てられて、新島の本村へさへも船を寄せることが出来なかつた。小さな舢舨で漸く新島の或濱へ漕ぎつけられた時は、ほんたうに漂流した者のやうなたよりなさであつた。浪音に沿うてゐながら、椿の密林のために薄暗く、齒朶の茂みの中についてゐる細い徑に、私は船暈のまだ癒えないふらふらする身體を

大島・三宅島・
新島
何れも伊豆七
島の一 東京
府に屬する

運んだ。咽喉は渴ききつてゐたが、どうすることも出来ない。
辛うじて二里ばかり来た頃、路傍に始めて清水を見出したうれ
しさは、嘘へやうがなかつた。そこにはお寺があつた。もう人
里も近いと見える。私は全く救はれたといふ氣がした。

富士の裾野を旅した時、行けども行けども青い草原にきりぎ
りすが淋しさうに鳴いてゐるばかり。暑い日がじんじんと照
りわたつて、日蔭を作る木立さへもない。人にも逢はない。鳥
も啼かない。さうした路に疲れきつた時、ふと學生らしい旅人
に逢つた。「清水のある所はありませんか。」と私がかう云つた言
葉と、「人穴村までどのくらゐありますか。」と向ふで問ひかけた言
葉とが、同時にぶつかつた。そこらは見渡す限りの平野で、大き
な牧場にでもと思はれるが、水といふものが絶えてないために、

人穴村
今は富士郡上
井出村の大字

生物を飼ふことが出来ないのであつた。清水のない所には生
命がない。私たちが汗を垂らしながら旅をしてゐる時、生命の
泉を求めるやうな氣持で清水を尋ねることがある。

夏の野の旅をしたことのある人、又は山に登つたことのある
人で、清水の味を知らない人はあるまい。暫く經つてからその
旅のことを想ひ起してみると、清水のあつたあたりのことが一
番鮮かな印象に残つてゐるものである。人里を離れてゐる所
でも、路傍に清水があれば、大抵一軒の人家があるものだ。大き
な木を刳つた槽から惜しげもなくさらさらとこぼれる水が、不
斷に生じて不斷に流れ去る。時といふものを思はせ、靜かな障子
を開いた家には、老婆が一人、絲車をわくわく廻しながら、毎日毎
日同じやうな時を繰つて飽かないでゐる。そこを通る旅の者

仕事

西行
俗名佐藤義清
出家して法名
を圓位とい
ひ、後西行と

は、軒先の清水を所望しながら、そこに住む人と何か言葉を交さないではゐられない。又は深い山の中で、人家などは勿論なく、人の通ること稀であるらしい所でも、ふと見出された路傍の清水に立寄つて見ると、誰か辨當を使つたらしい飯粒がこぼれてゐたり、手すさびに摘んで來たらしい花が挿してあつたりする。いつかこゝを通つた人が、こゝで休んで行つたのかと思ふと、同じ路を先へ行く者、後から行く者の懐かしさも感じられる。清水といふものは實に幽邃な境を思はせるものだが、それで、又不思議に人間生活の親愛を感じさせるものである。昔、西行が吉野山に隠れて柴の庵を結んだ時も、彼はなるべく人里から遠い所を選ぶとともに、また清水の滴る所を選ばねばならなかつた。

改めた 有名
な歌僧 建久
元年（一八五
〇）寂、年七
十三

とくとくとおつる谷間の苔清水汲みほすほどもなき
住居かな

芭蕉
松尾氏 俳諧
正風の祖 元
祿七年（二三
五四）寂、年
五十一
かのとくとく
の清水云々
「野晒紀行」に
見える

と詠んで、彼はこの清水を以て命を支へてゐた。それから五百年の後、芭蕉がそこに訪ねて來た時には、西行の庵は朽ちてゐたが、その清水は苔にも隠されずにあつた。「かのとくとくの清水は昔にかはらずと見えて、今もとくとくと雫落ちける」と、彼は感激の心を記してゐる。芭蕉は西行の歩んだ人生を慕つて、自分も亦その道を歩かうとしてゐた。その道は極めて幽かな、ほんたうの隠者のみが行く唄しい道である。しかも、先人の足跡は「時」の力を以て湮滅せられることがないといふ眞實を、芭蕉はこの清水の昔に變らず湧いて滴つてゐることを以て實證し得たのであつた。

下野國蘆野
今の栃木縣那
須郡蘆野町

下野國蘆野といふ所に、清水流るるの柳といふのがある。私
が持つてゐる昔の旅行案内には、柳の下に水が流れてゐる小さ
い圖がはいつてゐる。西行がこゝに來た時であらうか、

道のべに清水ながるる柳かげしばしとてこそ立ちと

まりつれ

奥の細道
芭蕉が元祿二
年奥羽・北陸
を行脚した時
の紀行
こゝの郡守云
云
「奥の細道」に
見える

と詠んだといふ。芭蕉はその傳説を聞いて懐かしくは思つて
ゐたが、奥の細道の旅の時にそこを通りかゝつて、こゝの郡守戸
部某のこの柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづく
のほどにやと思ひしを、けふこの柳のかげにこそ立ちより侍り
つれ。」と、彼はその喜を筆にしてゐる。西行も芭蕉も一生を旅に
過した人々である。彼等は自分の先に行つた人が、いかに行路
に苦しみ、そしていかにこの清水の邊りで喜を見出したかを實
によく知つてゐたに違ひない。(雜誌「女性」)

一四 朝の上高地

田部 重治

田部重治
法政大學教授
明治十七年生
上高地
長野縣南安曇
郡
霞澤山
上高地の東
海拔二六四六
米
梓川
源を槍ヶ嶽・
常念岳に發し
上高地の盆地
を経て、東北
流して犀川に
合する
燒岳
上高地の西
アルプス中唯

朝の上高地を味ははうとする人は、まだ此の溪谷に朝日のさ
さぬ五時過頃の欄干に凭れて、先づ梓川のほとりに眼をやるが
よい。そこに第一に眼に入るものは霞澤山である。秀麗な其
の峯頭から、下つて針葉樹、それから濶葉樹と波うつゆるやかな
うねりは、梓川の對岸に左右に連なる柳と榛木と白樺と落葉松
とのゆつたりした林となつて終つてゐる。此の林と河面とに
かけて一面にかゝつてゐる薄靄は、今やかすかに揺れ動いてゐ
る。此の時、右の方燒岳の一角に何物かが作用しつゝ、あること
が見られる。今、燒岳は河童橋に立つて見る時の山容とは全く
打つて變つて、雄偉に見上げる計りに高く見える。そして其の



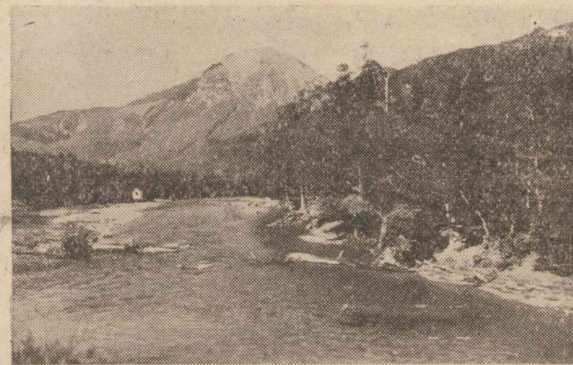
富士十邊華山筆

de

一の活火山
海拔二四五八
米

徳本峠
島々から上高
地への途中の
峠 海拔二一
二二米

六百山
上高地の東
海拔二四五〇
米



梓川と焼岳

東の半面は薔薇色に輝いて噴煙は今眠からさめたかのやうに
静かな曉方の天に沖して、其の梓川に向つた斜面を蔽ふ立枯れ

の木と、熔岩の流れた慘憺たる痕跡と
は、ますます其の雄偉さを引立ててゐ
る。

暫くすると、徳本峠方面から朝日が
昇り、朝靄がとけるにつれて、上高地一
帯の溪谷には俄かに銀のやうな明る
い光が漂うて、梓川の川面がぴかぴか
と光つて来る。しかし河童橋から上
の方、徳本峠から六百山の麓へかけて
の密林にとざされた約四軒の冷たい空気は、なほ温められずに

残つて、氷のやうな冷たい水は、其の間を山側に沿うて流れてゐる。上高地温泉の附近は此の四軒の冷たい平地と焼岳の麓の密林との間の梓川を真中にさしはさんだ平地の一角を占めて、それが此の溪谷の一番温い、明るいところになつてゐる。かうしてゐるうちに、霧は残りなく消えて、山の隅々から皺まで残りなく現れる。霞澤連嶺の八合目以下の溪谷は一面に緑と萌黄に蔽はれてゐる。

此の溪谷の與へる感じは、溪谷にありがちな、何となく頭を壓



橋 高 地 河 上

へつけるやうな狭苦しい感じでもなく、さればといつて、纏りのつかない、個性のない感じでもなく、どこを見てもゆつたりして、雄大で、堂々たる威風があつて、そしてどこかに鋭い性格をもつてゐる感じである。四圍の山々がアルプス式の山相をもつてゐるから、山頂の峻峻な姿、其の儘の風趣が此の溪谷を蔽うてゐるだらうと期待する人は、失望するに相違ない。又、奔流岩を嚙む奇景もない。所謂、奇岩淵にのぞんで老松これに伏すといふやうな光景は、此の溪谷から期待せらるべくもない。此の溪谷を埋める気分は、どこまでも新鮮な色彩の、あくまで透明ならんとする動搖そのものである。黄金色のいろどりが、あたりの風物の心髓を貫ぬく美はしさである。しかも、かくの如き柔かい趣を抜け出た、此の溪谷の嶂壁をなす外圍の山々の何と雄渾な

ことだらう。

耳をすませば、溪谷の曉は静かで、唯あたりの潺湲の音が聞える計りである。人は毎朝覚める時には、此の溪聲を雨の音と聞誤つて床を出るのである。そして焼岳から穂高岳に連なる嶺の密林の滴りの集合であるといふ、氷のやうな筧の水に口を漱ぐのである。(山の溪谷)

穂高岳
上高地の東北
方 海拔三一
〇三米

大自然によつて自然的精神を得た人は、大白然のなかに動物や鳥類のごとくに飛躍し行動することに、子供のやうな快感を感じる。

(田部重治)

長塚節
歌人 大正四
年歿、年三十
七

八月三十一日
明治三十九年

山雉の渡し
鮎川濱から金
華山へ渡る所
また鹿渡しと
いふ 金華山
水道の最狭部
約一軒
鮎川
宮城縣牡鹿郡
の村
お山
金華山 牡鹿
郡に屬する島
海拔四四五米

一五 鉛筆日鈔

長塚節

八月三十一日

山雉の渡し

鮎川の港からだらだらと上つて、勾配の急な坂をおりる。杉の木の間を出ると、茶店がある。茶店の前を行過ぎようとする、女房があとから呼びかけて、「お山へ渡るなら草鞋を買つて鹿の土産を持つて行け。」と云つた。これはお山の砂を草鞋へつけて來ることは昔から禁じてあるので、島へ渡る者は皆新しい草鞋を穿いてもどりの船に乗る時にはぬぎ捨てる筈ださうである。鹿の土産といふのは小さな煎餅の括つたのである。渚へおりると、船頭小屋には四五人で楷火を焚いてゐる。客が集ら

ねば船は出さないと云つて、一向に取りあはぬ。小船が一艘動揺しつゝある。雨が降つて來た。突兀たる岸の巖には波がだんだん強く打ちつけて、小船が更に動揺する。雨が大粒になつた。幻の如く見えた金華山はまた雲深く隠れて、裾だけが短く表れた。山の裾はなつかしい程近い。桐油を着た道者がぞろぞろと余の後からおりて來た。各自に背中を高くして小荷物を背負つてゐる。一行の饒舌るのを聞いて、船頭のうちの老人が、一行の者を「米澤ぢやないか。」と云つた。「米澤の山の中だ。」と云つたので、「言葉で、どこのものでも分る。」と、老人は頗る得意である。道者が來ても船はまだ出さうともせぬ。海がだんだん悪くなりさうなので、「何故出さないのだ。」と云ふと、「この日の渡しはこれぎりなので、金華山から鮎川へ酒買に渡つた者が戻るまで待つ

江ノ島列島
金華山の北十
三軒許りの海
中にある列島
牡鹿郡に屬す
る

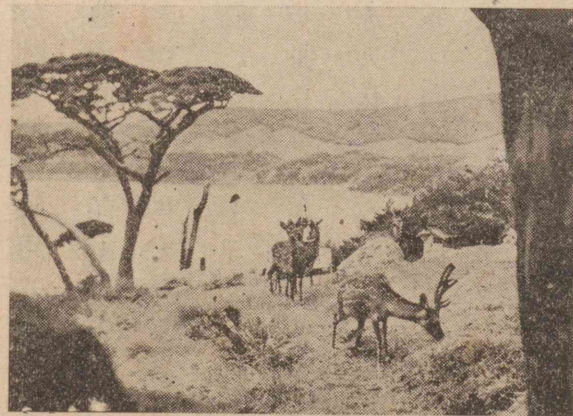
てゐるのだ。」と云ふのである。「鮎川に二人で酒を飲んでゐるの
があつたが、あれならとても今日のうちには歸りさうはない。」と
道者の一人が云つた。遂には船頭も待ちあぐんで、一人が南京
米の袋をかぶつて出て行つた。ところが、それも沙汰がない。
「きつとあいつも引つ掛つたに違ひない。呑氣なにも程がある。」
と云つて、道者等が頻りに呟いてゐる。幾ら待つても島の酒買
は來ないので、やつとのことで船が漕出された。

三人が艫を押しして舳の一人が權をとる。巉巖に添うて船が
進む。鹿渡しの岬に近づくとき、波は澎湃として、船が思ひ切つて
揺れる。岬に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。
北方に開けた海上には江ノ島列島が大小相竝んで、狭い瀬戸の間
から見える。列島は波の穂に隠れては復あらはれる。桐油を

神社
縣社 金華山神
社、一に金華
山神社といふ

頭からかぶつて余と向合ひになつてゐた男は、目がどろつとし
て、さつきから下脣が垂れた儘であつたが、遂に桐油でぐるつと
顔をくるんで轉がつてしまつた。他の道者も顔が眞蒼になつ
て、小縁へしがみついた儘反吐をついてゐる。老人の押してゐ
た艫は艫べそが外れた。老人は狼狽して嵌めようとしたが、船
の動揺が激しいので幾らあせつても嵌らぬ。「止める、止める。
いゝやいゝや。」と兩肩からうんと力を入れた男が、聲にも力が籠
つて叱りつけるやうに云つた。老人は極りわるげに船の底に
蹲つた。雲が一方からだんだんに禿げると、三角に握つた握飯
のやうな金華山が、頭から押へつけるやうに聳えてゐる。中腹
の神社から下には、缺で梢を刈込んだやうな木立が青い芝の間
に鹽梅されて、庭園の如く見える。常磐木の繁茂した山上には、

綿打弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれてゐる。船が岸へつくと、道者は一同に漸く生き返つたといふ鹽梅で、船ぢや我折つたやア。」と云ひながら、ばらばらと勢よく立上つた。青い芝は地にひつついた様になつてゐて、糸薄の叢が連なつてゐる。道者は口々に「鹿、鹿」と呼んだら、思はぬ糸薄の中から大きな角が動いて、鹿が五六匹あらはれた。土産を出して見せると、五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくと、ついと逃げる。投げてやればたべる。一行が黄色な桐油を掛けたり、



山 華 金

笠をかぶつたりしてゐるので、気が悪いのであらう。鹿が煎餅をたべる所を、道者が三四人で手と手をつないで坂の下へ追ひつめようとしたが、鹿は軽く飛退いて、けろつと立つてゐる。道者はこんなことをしては騒いで、船の中に居た時とは別人のやうである。よく見ると、鹿は糸薄の中に、そこにもこゝにもけろつとして立つてゐる。其の斑紋の美しいことは、奈良の鹿などの到底及ばぬ所である。顧みれば一行の乗つて來た船は、追手に帆を揚げて、雨の中に遙かに隔つてゐる。木立にはいると、庭木のやうに見えたのは皆二抱三抱の樹ばかりであつた。雨はしとしととして深更までやまぬ。厠へ立つたら、目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

九月一日

猿

社務所から出た一行十人ばかり、白衣の先達に案内されて金華山に登る。坂が極めて峻しい。曉の霧がひやひやと梢を渡つて、雨がはらはらとかかる。老樹の鬱然として濕つぽい間を行くので、深山の様な寂しい心持がする。忽ち後の方で「猿、猿」と呶鳴る者があつたので、振りかへると、一行のうちの三四人が立ちどまつて、梢を仰いでゐる。余も急いで降りて行つて見ると、五六匹の猿が樅の喬木に枝移りをしてゐる所であつた。猿はゆさゆさと枝を揺がしながら、こちらを見おろしてゐる。赤い顔がほのかに見える。余は猿の木に居るのを見たのは、これからはじめてである。からかつてみたい様な氣もした。一行の者

は皆樹の下へ集つて、口々に「オンツアマ、オンツアマ」と呶鳴つて、手を叩いたり樹を揺ぶる眞似をしたりして騒いだけれど、彼等は一尙平氣で、枝をゆさゆさと揺がしてゐる。猿といふものは何處で見ても剽輕なものである。道者の一行が騒いでゐるうちに、先達は一人で行つてしまつた。かくて、後姿も見えなくなつた。ばらばらと先達の後を追掛けながら、道者の一人が云ふのを聞くと、この前に來た時は猿が丁度栗を揺り落した所へ通り掛つたので、みんな拾つてしまつたら、枝から糞をかけられた」といふのであつた。

鳥

山巔の小さな社の縁へ腰をかけて、一行の者は社務所でくれた紙包の握飯をひらいた。縁先には僅かに二坪ばかりの芝生

がある。何處から來たか鳥が二羽來て、一羽は芝生のめぐりに立つた樹木の、とある枯枝へとまつて、一羽は足もとへおりた。おりた鳥は嘴をあげたり首を曲げたりして、握飯が欲しさうに見てゐる。余は鹿の土産がまだあつたので、投げてやつたら、ひよいと一跳ね跳ねて、それを啜へて元の處へ戻つて、足で押へてはむのである。さうして又嘴をあげたり首を曲げたりして見てゐる。握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返し引返しして、その紙の中の飯粒をはむのである。幾百千の參詣者が繰返し繰返し登山するので、鳥までがこんなに馴れてしまつたのであらうが、深い木立の間を雲霧に濡れて漸く山嶺について、何となし人寰を離れた感じで居る所へ、こんな鳥が飛んで來たのは更に別天地のやうに思はれた。一人が握飯の食殘しをくれ

たら、何と思つたかそれを啜へた儘、霧深い谷をさして飛んでしまつた。飛ぶ時に啜へた握飯がぼろりと缺けて芝の上へ落ちた。枯枝に止つてゐた一羽はこちらを見おろしてゐたが、遂におりては來なかつた。さうしてこれも大きな聲で鳴いたと思つたら、ついと芝の上の飯をさらつて飛んで行つた。外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬々として更に吹きおろす。木の葉が交つて飛散る。

鹿の糞

霧の吹きつけるなかを山陰へおりる。やつぱり樹木が深くて坂が急である。だんだんおりて行くうちに、霧が薄らいで、枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。又誰か後の方で「鹿、鹿」と呶鳴つた。「あれ、あれ」と一人が指さしてゐる方を見たら、その

時はヒオウと鳴いた聲ばかりで、鹿は見えなかつた。ヒオウとまた鳴いた時は、聲は遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時は、やつと聞取れる程であつた。

深い木立を出ると、疎らな赤松が見え出して、窪んだ草原のやうな所になつた。先達は「皆さん此處は不淨場であります。」と云つて、自分が先に小便をした。一行の者も皆小便をした。草の中には羊朶の葉が秀でて、既に枯れた自然生の芍薬も交つてゐる。此處からすぐに海へ出る。岸は皆削りたつた大きな巖である。断面には縦横に切れ目があつて、恰も十文字に繩を掛けた大荷物が問屋の庭に積みあげられたやうな形である。小徑はこの斷崖の上をめぐりめぐつて北へ走る。一行はばらばらになつて先達に跟いて行く。左を仰いで見ると、鬱蒼たる山の

マハラ
クボク
フセウハ

ミンダ
ニキクヤク

セウケイ

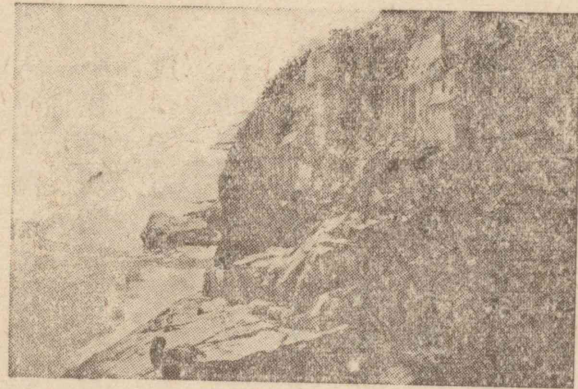
ウツソフ

イタタキ
キエツ

マハラ
ウツソフ

巖は頭に掩ひかぶさつた様で、その急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が奔馬をばつたり喰止めたやうに、この小徑で切斷されてゐる。小徑については到る所青芝と糸薄が茂つてゐる。さうして糸薄の中には疎らに赤松が聳えてゐる。時々鹿に逢ふことがある。山陰に居る鹿は能く馴れてはをらぬと見えて、きつと逃げて行く。一つか二つか離れてゐるのが、ひよつこり人を見ると、非常に狼狽して叢を跳ねて逃げて行く。糸のやうな脚で跳ねるのが、ふはふはとした綿の上でも跳ねるかと思ふ様に見えて、如何にも輕げである。驚いて逃げるときに、ヒオウと細い聲で鳴き捨てるのである。五六匹も揃つてゐるといふと、體と體と押合ふ様にして、ある距離の所まで行くとき、げろつとして何時までもこちらを見送つてゐる。無邪氣

なものである。大箱の岬といふ札の立つ所へ出た。急な山の脚が海へ踏込む前に、青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截断して海へ捨ててしまつた時に



金山華山突端

恐しい懸崖が出来た。これが大箱の岬である。四つに這つて覗いて見ると、さらさらと僅かに碎ける白波が遙かの下の方である。その遙かな下の方に小さな物が動くやうに見える。それがだんだん昇つて近づく所を見ると、一匹の小さな蝶であつた。暫く見てゐたら心持が悪いやうになつた。青

大箱の岬を覗くものは馬鹿だといふのだ」と道者が云つた。青

芝は地にひつついた様で綺麗である。鹿がこの芝をくひに來ることがあると見えて、豆粒のやうな鹿の糞がころころと轉がつてゐる。青芝の上に休んでゐると、何時の間にか蝶は懸崖の面を舞ひあがつたものと見えて、小さな黄色い羽をひらひらと動かしながら、めぐりめぐつて鹿の糞へとまつた。際涯もない外洋を望むと、今日ばかりは波がないのかと思ふ程平靜である。余は一朝暴風がこの平靜な海を吹亂して、雲と相接してゐる水平線の先から煽り立てて來る激浪が、この大箱の懸崖に吼えたけつて、しぶきのとばしりがこの青芝へ氷雨の如く打ちかかる時に、牡鹿が角を振立ててこの岬に突つ立つ所を想像してみた。(炭焼の娘)

217
203

溝口白羊
名は駒造 文
學者 明治十
四年生
代々木
東京市澁谷區
二木

二六 明治神宮

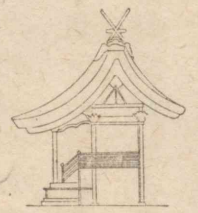
溝口白羊

快美な色彩の反射と、和かな感觸とを持つた秋の陽光に包まれた代々木の森、私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂^こつて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。或時は、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになつて、曳々聲して森の中へ引入れるのを見た。

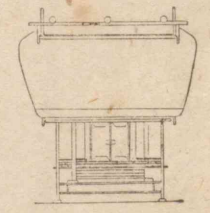
あの中に明治神宮が建つのだと思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墳墓に對するやうな懐かしさに

に充たされた。そして、其處を通る度に、工程が目に見えて捗つて、殿舎の次第に整うて行くのが何より嬉しく思はれた。

その明治神宮がとうとう竣工を告げた。かつて赤土の露出してゐる上に鋭く尖つた大理石が幾つも竝んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、まばらな森林の中から耕地の廣く展開してゐるのが遠望された御料地は、いつの間、にやら尊い神域と化して、森嚴と幽邃との趣を兼備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへぬ神々しい感じを起させる。



造



流

明治天皇
御名は睦仁
第二百二十二代
皇紀二五二七
年御即位、御
在位四十六年
明治四十五年
七月三十日崩
御、喪算六十
一
昭憲皇太后
御名は美子
明治天皇皇后
大正三年四月
十一日崩御、

御年六十五

神域！眞に神のいまし給ふにふさはしい莊嚴と靜寂と幽雅の領土！私は始めて神宮の神苑に立つた時の感激を、生涯忘れることがあらうとは思はれない。

何者の力が此の偉大な建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月以來、直接造營の事に當つた延人員が約百數十萬人であるとか、用材の總計が尺、一萬九千本であるとかいふやうな細密な數學的計算が擧げてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた力こそ、實に此の神宮の基礎を磐石の固きに築き上げたのである。即ち限りなく高い明治天皇の御聖徳と、極みなく深い昭憲皇太后の御懿徳と、そしてこの二柱の大神の御恵に對へ奉る國民の至純な感謝と、此の三つが陰に陽に工程を抄らせて、此の大工事を完成

(108)

するに至らしめたことは、何人も疑ふことの出来ない事實である。嗚呼、至粹な動機から出た全國青年團の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木、これ等は、何事を語つてあるか。實に此の神苑を形成する一株の樹木、この神殿を組織する一本の柱には、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、全國國民の誠意の結晶たるこの宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇並びに昭憲皇太后の神靈が永遠に鎮まらせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

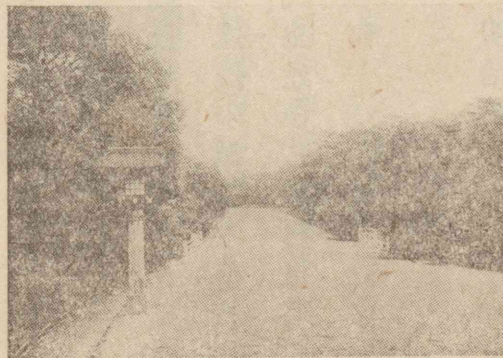
今までの神社に曾て見たことのない明治神宮独自の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔の第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一

(109)

岡山萬成
今村岡山市内
筑波山
茨城縣筑波・
眞壁・新治三
郡に跨がる山
海拔八七六米
淺野侯爵
名は長勳 昭
和十二年薨

に此の事を直感した。そして、一步一步美しい小砂利の上を神
殿に近く踏入るに随つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟をか
き合はせた。

参道の兩側には密林がどこまでも
續いて、行くに随つて段々濃くなつて
ゐる。鳥居から約一町ばかり奥へは
いつて神橋の處へ來ると、何處からと
もなく清冽な水の落ちる音が聞えて
來る。岡山萬成産の石で出來てゐる
といふ勾欄フウランに凭つて下を見ると、溪流
を模した景致のよい小流の兩岸、筑波山の國有林から發掘した
自然石の配立する處に、淺野侯爵から獻納した數十株の楓が、今



橋 神

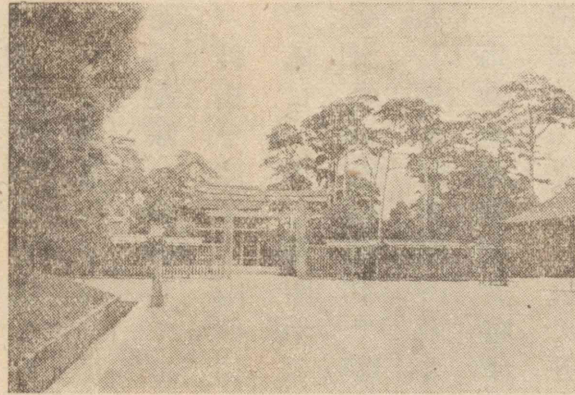


原宿・千駄ヶ
谷
東京市澁谷區

しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。此
處は神苑の中で唯一の人工味の加つた處で、神苑の殆ど總べて
が繊細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の
庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉竝木で、その左側の竝木が斷え
た處に、一千七百四十の樹齡を重ねたといはれる、直立六丈餘の
臺灣産の檜の古木で造られた大鳥居が立つてゐる。明神鳥居
としては日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとの事だ。
此の鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の
南参道と、北方千駄ヶ谷方面から來てゐる幅員六間の北参道と
の接合點で、此の處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大
されて、西を指すこと百五十間、其の道の盡きた處で右を見ると、

木曾
長野縣西筑摩
郡に屬する、
木曾川沿岸の
山谷に亘つて
御料林がある



御社殿正面

眼界はばつと急に廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜する事が出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてゐる。近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香が強く鼻を撲つて、如何にも新しい神の宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。

拜殿から中門を通して、奥は即ち神靈のおはします内内院で、

衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖な場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙

こぼるる

私は默禱を終へて始めて向ふを見た。

あゝ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今迄見た

た大抵の社殿が、暗い周囲から來る鈍い光の中に、靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせてゐる中に、此の神宮ばかりは、隠す所なく、十分な光線に總べてを開放してゐる。それでゐて決して淺露な心持はせず、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭の下るのを覺える。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出

來ると私は思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と新しく協力して、新文明を吸収しようとおつとめ遊ばされた明治天皇の活動的・進歩的の潤達な御氣象に對して、この明るい感じが、いかにもびつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれた。

拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊にあらはれる幾多の列柱、其の奥に續いて遠く望まれる便殿、總べてが又たとしへない莊嚴美の具現である。

拜殿を下りて西神門から出てゆくと、約一町に亙る森林帯があつて、その向ふ、廣く開けた廣野の中に、目の覺めるやうな芝生が一面に緑の色を展べてゐる。そこに嚴肅から優雅への急轉が見られる。こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶

びて、樹林を組成する樹類の中に落葉樹の交つてゐるのが目につく。

實物殿全景



實物殿までの道には、ずつと長い間さうした色彩が續いてゐる。實物殿は其の形式を中古に採り、其の材料と建築の方法とを現代に採つた鐵筋コンクリート石張の建築で、その建坪は實に五百十六坪、之に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帯の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつて楓樹が美しく植ゑられてゐる。

八幡製鐵所
日本製鐵株式
會社八幡製鐵
所 福岡縣八
幡市にある東
洋一の製鐵工
場

私は一わたり拜見して、深い感激に打たれながら、夕暮近く御苑を出た。振返つて見ると、神殿の邊りはもうすっかり深い露に包まれて、黒々と晝も暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中に、かつきりと切開いたやうな路筋の白い色が暮残つて續いてゐるのが、いひやうもなく、神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見えるあたらたかな気分を起させた。

私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも鑄つけられたやうに残つてゐた。(明治神宮)

二七 一本松と松林

草野俊助

海岸の岩の上に寂しく立つてゐる磯馴松や、山の頂にたゞひとり立つてゐる老松を見ると、幹の曲り工合や枝の伸び方に何の束縛もなく、自由氣儘の生活を樂しんでゐるやうに見える。人間から見ればそこに風致も備はつてゐるのであつて、昔からかういふ松は、幾度となく詩歌に詠まれ、文章に書かれ、また繪畫の題材となつた。

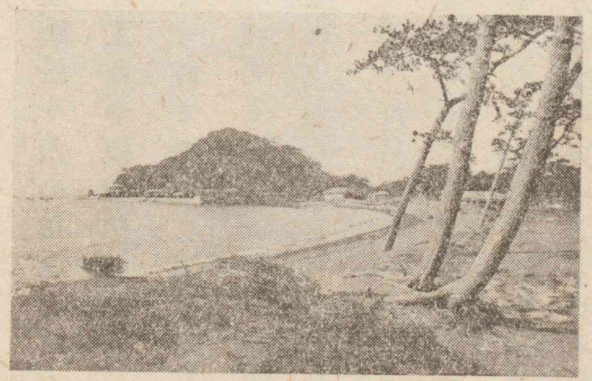
勿論、その面影には、幾星霜の風雪を凌いで多くの辛酸を嘗めて來た跡が残つてゐて、それがわれわれに深い印象を與へることも認めなければならぬ。しかし、一方には、自分一人を守つて得々然とした様子も見え、食物の奪ひ合ひもない代り、座席の讓

草野俊助
理學博士 東
京帝國大學名
譽教授 明治
七年生

ハルカ

り合ひもなく、他人の手前を憚る心配もない、至つて不行儀な姿にも見られる。

ところが、集つて森林となつてゐる松を見ると、一本立の松のやうに思ふ存分に枝を四方に張ることも出来ず、食物も、たとへば一つ鍋を大勢でつくやうな有様で、幹を十分肥らせることが出来ない。また、周囲の仲間に對して氣苦勞が絶えず、たゞ差障りのない上方に向つて、細長く眞直に延びてゆく外はない。それで、誠に行儀正しい姿勢をしてゐる。



松 馴 磯

ハルカ

全く違ふ。孤生では、幹が太く短く、枝葉は四方にひろがり、またよく發育する。群生の方は、下枝が早く枯れて、頭だけに枝葉が茂り、幹は細く長く伸びることになつて、姿勢が場所によつて異なつて来る。



松 の 生 群

があつて、根でも枝でも勝手に蔓らせることが出来、地中の榮養分も多量に吸収することが出来るし、同化作用も盛に行はれる。

岩の上の一本松と深山の松林との間には植物の生活方面からいふと、著しい差がある。孤生の方には多くの自由

發育上、至極結構である。

群生の方になると、多くの不自由がある。根を十分に張ることも、枝葉をひろげることも、思ふやうにはゆかぬ結果、榮養も十分でない。しかし、全くの生活難といふわけではなく、自己の努力によつて上方に枝葉を伸ばして、同化作用を營むことも出来るのであるから、非常な密林でない限り、榮養上に大した不利もない。

孤生の方は頑丈であるから、風雪のやうな外力には、十分單獨で抵抗が出来る。群生の方は細長いために、これを孤立させると、一溜りもなく倒れたり折れたりしてしまふ。しかし、林立してある間は、かなり強い風に對しても安全である。そこに團體生活の強みが認められる。

人間の立場からこの二つを比較して見ても、やはり差がある。孤立のものは、野外にしる庭園にしる、風致の上から賞美される。群生の行儀のよい姿は、餘り單調で鑑賞の價値がない。その代り、利用の上では孤生のものの及ぶところではない。幹の眞直な點、木理の正しい點、及び材の中に節の少い點が、用材としての價値を高めるのである。われわれの側からいへば、ひねくれた孤生の松は、澤山はいらないが、團體生活によつて眞直に仕上げられた松は、いくら多くても困ることはない。

自分本位の孤獨生活は氣樂でよいの、他人の犠牲にならねばならぬ共同生活は嫌ひだなどと勝手な事をいふのは、外圍が平穩無事の時のこと、かの烈風の吹荒む海岸地方とか、高山など

孤依生活のよ
はみ
中途で死滅

団体生活の
苦言

では、そんな太平樂は云つてゐられない。是非互に助けあふ團體生活をやらねばならぬ。

烈風がいつも吹きつける土地では、たゞさへも枝葉が傷つきやすく、また乾燥が強いから、立枯れする危険が多い。一本立の木は、風當りがはげしいから、一枝折れ、二枝折れ、葉も吹飛ばされて、大抵中途で死滅してしまふ。

臺灣の南端などにも、密生して風に堪へて茂つてゐる樹林を見受けるが、孤立してゐるものは一本もなく、皆、藪のやうに密生し、枝と枝とがまるで柴を重ねたやうに込みあひ、喬木となるべき木さへ、刈りこんだ庭の躑躅のやうに見える。共同生活の有難味は、かういふ非常の場合に、始めて十分に現れるのである。

(我が植物観)

一八 苦言一則

正岡子規

正岡子規
名は常規 俳
人・歌人 明
治三十五年歿
年三十六

君の村
茨城縣結城郡
岡田村園生

只今君に貰つた大和芋を食ひながらつくづく考へた。此の芋が君の村で今始めて植ゑたといふ程なら、君の村は實に開けてをらぬ野蠻村に違ひない。恐らくは小學校もないであらう。若し尋常校があるなら、高等校はないであらう。兎に角子供は學校にも行かないで鼻垂れてゐるのが多いであらう。従つて農藝などは少しも進歩してゐないであらう。思ふに君の村では君の一家一軒だけ比較的開けてゐて、他は盡く野蠻なのに違ひない。

そこで僕の考へるに、君には大責任がある。それは君は自ら

率先して君の村を開かねばならぬ。學校も立てるが善い。村民の子弟の少し優秀ともいふべき者ならば君は學資を出して(若しくは村費を出して)東京へでも水戸へでも出し、簡易農業校位を修業させてやるが善い。其の外農談會とか幻燈會とかを開いて村民に知識を與へねばならぬ。委細は面會の節話すべし。

一家の私事だけでも忙しいといふやうな能無しでは役に立たぬ。其の傍で一村の經營位には任じなくてはいかぬ。

君は東京へ出て來ることを道樂か何かのやうに思つてゐるか知らぬが、それは大間違だ。時々東京へ來て益を得て歸るやうに努めなくてはならぬ。田舎に引込んでしまつてそれで忙しいなどと云つてるやうでは困る。

僕などへ物を贈られるには珍しいものを要せぬ。水戸の名菓などよりは君が手づくりの大根か蕪の方が善い。今度のやまと芋の如きは甚だありがたく感ずる。

明治三十五年八月十九日

長塚詞兄

長塚詞兄
長塚節 明治
三十三年(二
十二歳)の春、
子規門下とな
る 第一五課
参照

拜啓二年ぶりの手紙云々の一語を見て小生も一種の感慨に打たれ申候。兎角筆無精なれば御無音勝に相成申譯無之候。小生自分病氣にて心細く候まゝ、諸子の行末など案じるとはなけれど考へる事も有之候。時勢と運命とは致し方なきものとするも、半分は自分のやりやう次第にて善くもなり悪くもなる

ことと存候。世の中をうまく渡るといふ人あれども、うまく渡
る人はいつでも終ひに失敗するかと存候。小生はどこ迄も正
直にやるつもりにて馬鹿といはるる覺悟に御座候。はじめか



正岡子規肖像

ら苦辛するつもりでやれば、いつまでも苦辛に堪へ得らるるものなれど、うまくやるつもりでやり損なつたら多くは頓挫致候かと存候。小生などは不幸ばかり打

此の上まだありとあらゆる不幸は小生の一身にかゝつてくるものと常に覺悟致候。足は二本とも立てぬやうになるべしと存候。月給を貰へぬやうになる時もあるべしと存候。熱があ

り苦痛烈しき最中でも筆をとらねば家族がかつゑるといふやうな時も来るべしと存候。かゝる思想も小生にありては思想にもあるまじ、眞に來るべきかと存候。併しどこ迄も艱難に負けぬつもりにも有之候。小生の身で艱難にまけるやうなら一刻も生きてをられまじくと存候。

小生をして若し身體の健康を得しむとも正直に苦辛するつもりなれど、萬一小生が山を思ひたち候事あらば、それは命がけの山をやりたく存候。即ち山があたればよし、あたらねば死ぬといふ山にて實際死ぬるなり形容に非ず、それも愉快かと存候。さうでなければ死ぬ迄難儀を求めて苦辛しようといふ野暮主義を立居候。併し何を申すにも足の立たぬ人間では致し様もなければ、體の健康な人は十分考へて一時の輕擧に出でぬやう

紅緑兄
佐藤紅緑 本
名治六 文學
者 嘗て正岡
子規に師事し
た 明治七年
生

願ひ居候。けふも貴兄の御地方に評判よしといふことを聞き
てうれしくもあるからに何やら例の杞憂も起り候儘、下らぬ繰
言申上候。早々不具

四月八日

規

紅緑兄

われ病んでさくらにおもふこと多し

(子規全集)

室 鳩巢
名は直清 幕
府の儒官 世
に駿臺先生と
稱する 享保
十九年(二三
九四)歿、年
七十七
秀康卿
結城秀康 德
川家康の第二
子 慶長十二
年(二二六七)
歿、年三十四
越前
今福井縣に屬
する

一九 余吾の湖

室

鳩巢

秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて武功の譽あり
しものを厚祿にて召抱へられけり。又伯伊勢とて、これも國に
て世祿の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初させけるに、かの掃部を
招待しつゝ、子に鎧着することを頼みけり。

さて饗膳すみ、祝の杯に及びし時、伊勢今日は愚息が鎧の着初
にて候ま、御身の御武功の事御物語り候ひて、彼に御聞かせ候
へ。と言ひしに、掃部

いや、某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覚え申さず候。
されど、御望もだしがたく候ま、某一生の内に武者振の見事
なる士を一人見申して候。その事を御話し申すべし。

三三三

江州賤嶽
滋賀縣伊香郡
天正十一年
(二二四三)羽
柴秀吉、柴田
勝家の軍をこ
こに破る
余吾の湖
滋賀縣伊香郡
余呉村にあり
賤岳の北に當
る

江州賤嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵と覺しくして、うしろより言葉をかけし故馬を引返し候へば、その人申し候は、今朝よりかせぎ候へども、よき敵に遇ひ申さず候。御人體を見受け、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし。とて、進みより候故、それこそ此方も望む所にて候へ。とて、互に馬を乗りはなし、すでに鎧をあはせんとしけるに、その人、しばし御待ち候へ。今朝より雑兵を多く突崩し候故、鎧よごれて候ま、鎧を洗ひ候ひて御相手になり候はん。とて、余吾の湖に鎧を打浸し、二三遍洗ひつゝ、さらばとて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れ果てても、ものあやめも見えずなりぬ。その時あなたより又言葉をかけ、もはや鎧先も見えず候。御残り多くは候へども、こ

三三三

れまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候。とて、某が名をも尋ねて候ひて、この後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手にはかゝり申すまじく候。もし又味方にて候はば、わりなく入魂致し候べし。さらばとて立別れしが、これ程見事なる武士は遂に見侍らず。いかがなりはて候にや。と語りけり。

その頃、伊勢がもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も来て勝手に居たりしが、物語を聞き、勝手よりにじり出でつゝ、掃部に向ひて、さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その時御相手になり候青木新兵衛は、恥づかしながら我らにて候。かく申すばかりにては、浮きた

オトシ

ホニモウ

駿臺雜話

仁・義・禮・智・

信の五卷 八

十三の短篇を

収める

る事におぼすべく候。』とて、その時雙方の鎧の緘馬の毛を一々言ひけるが、一も違はざりければ、掃部驚きつゝ、さして久しく逢ひ候うて本望に候。』とて、手前にありし杯を方齋にさし、これをしるしに。』とて、腰の脇指を抜いて引きけり。それより方齋が名國に高くなりし程に秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召出されけりとぞ。 (駿臺雜話)

子曰く、君子は争ふ所無し。必ずや射か。揖讓して升下し、而して飲む。其の争や君子なり。

(論語)

二 板倉父子

新井白石

板倉勝重

天正十六年、徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひて、勝重して此所の町奉行に任せらる。

初め勝重を召され、此の職の事仰せ下されしが、其の任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更に御許なし。勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ、御返事をば申すべけれ。」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありなん。罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべき事ありと告げ知らする人あり。如何なる幸や候。」と云ひけるに、勝重物

新井白石 名は君美、字は在中、儒者、徳川家宣・家繼の二代に仕ふ。享保十年(一三八五)歿、年六十九。板倉勝重 字は甚平、通稱四郎左衛門、徳川譜代の臣、寛永元年(二二八四)歿、年八十。天正十六年、後陽成天皇の御代(二二四八) 徳川殿

をも云はずほくそ笑みて、衣裳ぬぎ捨て座になほり、妻に打向ひ、「されば、今日召されし事、餘の義にあらず。此の度御座所を移さるるによつて彼の町の奉行たるべきよしを仰せ下さる。如何にも叶ふべからざる旨を辭し申せども御許なし。さらば、我が家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことは如何にや思ふ。」と云ふ。妻は大いに驚きて、「あなあさまし。わたくし事などならば夫婦はかるといふ事もこそあれ、公にてかゝる事や宣ふべき。まして是は仰せ下さるる所なり。殊に其の職に堪へん堪へじは御心にこそあるべけれ。みづから如何で知り候べき。」と云へば、勝重、「いやいや、我この職に堪へん堪へじは、我が心一つのみにあらず、御身の心による事にて侍るぞ。まづ心を靜めてよく聞き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、

奉行頭人などと云はるる者の、其の身を失ひ、其の家を亡さぬは稀なり。或は内縁に就いて訴を斷る事おほやけならず、或は賄賂によつて理を判つ事わたくし多し。これらの禍は婦人より起る所あり。我若し此の職奉ぜん後は、親しき人の云ひよらん事なりとも、訴訟の事執し給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候事ありとも、苞苴の物受け給ふまじきか。これらの事を始として、おことは勝重の身の上如何なる不思議の事ありとも、さし出で、物のたまふまじき由固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずる事は如何にも叶ふべからず。さればこそ、御身と謀るべしとは申したれ。」と云ふ。妻つくづくうち聞きて、「誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ。みづからは如何なる誓をも立てなん。とく參りて畏まらせ給へ。」と云ふ。勝重大いに悦びて、神に

慶長六年
後陽成天皇の
御代（二二六
一）
京都所司代
京都にあり、
禁中を守護し
町奉行を管し
訴訟を斷ずる
職

かけ佛にかけてかたき誓たてさせて、此の上は思ひ置く事なし。さらば參らん」とて衣裳ひきつくろうて出づ。袴の後腰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、袴のうしろあしう候」と云うて、立寄りてなほさんとす。勝重聞きもあへず「さればこそ我が妻に謀らんと申ししは過たざりけれ。勝重が身の上の事如何なる不思議ありとも、さし出で、物云はじと誓ひしは、今の程ぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職承る事叶ふべからず」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠狀まゐらす。「さらば、その言葉いつまでも忘れ給ふな」と云ひて、御前に參る。徳川殿如何に、汝が妻は何とか云ひし」と仰せければ、妻にて候ものが慎みて承れと申し侍る」と申す。「さこそあらめ」とて大いに笑はせ給ひしとなり。

加藤喜左衛門
家康の家臣
慶長七年所司
代を免ぜられ
た
六條
京都市下京區
本願寺
こゝにいふは
東本願寺 眞
宗大谷派本山
慶長七年徳川
家康の歸依に
よつて建立せ
られた
關ヶ原合戦
慶長五年（二
二六〇）
大阪の兵
冬の陣は慶長
十九年十一月

天正十八年、關東へ移り給ひても、職、元の如く、慶長六年の春、京都に所司代を置き給ふべきにて、勝重並びに加藤喜左衛門を擇びて上せらる。加藤は六條にして本願寺の寺地を賜ふ時に、私の事ありとて罪蒙る。其の後は勝重一人職に在り。同じき八年二月、大御所將軍宣旨を御拜賀の時、從五位に敘し、伊賀守に任ず。此の頃は關ヶ原合戦の後、天下草創の初にて、士も民も威にのみ服して、いまだ徳に懷かず。まして豊臣家京近き程にましまして、都鄙のうちさすが昔を偲ぶ者のなほ少からず、人の心も定まらず。上は一人より三公、九卿諸衛百司の事を執し、下は神職寺務農工商賈の事に至るまで、悉く皆此の職にすべ司る。云ふばかりなき要劇の職なれど、事一つとして淹滞なく、物一つとして廢缺なく、天下皆其の能を稱せずといふ者なし。大阪の兵

夏の陣は慶長二十(元和元)年五月

板倉重宗

字は十三郎

後に五郎八

元和六年(二

二八〇)父に

代つて京都所

司代に住じ、

職に在ること

約そ四十年

明暦二年(二

三二六)歿、

年七十一

京職

京都所司代

愛宕の神

再びまで起りしにも、勝重かくて在りければ、王城のうち動きなく、叡慮も殊に安かりけり。

板倉重宗

周防守重宗は、勝重が嫡男なり。此の人の京職にありし時の名譽、天下の稱する所、また擧げて數ふべからず。

重宗職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして遙かに拜する事ありて決斷所に至る。此所には茶磨一つをすゑ置き、明障子を引立ててその内に坐し、手づから茶ひきながら訴を聞き分つ。人みな此の事どもを不審しあへり。されども問ふことも得ならず。遙か年經て後問ふ人ありしに、答へて曰く、「まづ決斷所に出づる時に、西面の廊下にて拜する事は、愛宕

京都市右京區
愛宕山にある
愛宕神社

の神を拜するなり。多くの神の中に殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きし程に、所願ありてかくは拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴をことわらんには、心に及ばん程は私の事あらじ。若し過ちて私の事あらんには、たち所に命を召され候へ。年頃深く頼みまゐらする上は、少しも私心あらんには、世に承らへさせ給ふなど、日毎に祈誓するにて候。また訴を判つ事の明かならぬは、我が心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よきは自ら動かさざらんやうこそあらめど、重宗それ迄の事は叶ひ難し。たゞ我が心の動くと靜かなるとを試みるには、茶をひきて知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じて、磨の廻る事平かにして、きしられて落つる所の茶如何にも細かなり。茶のこまかに落つる時に至りて、我が心も動かぬと知り、其の後

やうやくに訴を判つ。また明障子を隔てて訴を聞く事は、凡そ人の面貌をうち見るに、憎さげなると憐がましきとあり、誠しきあり、かたましきあり、其の品多くしていくらといふ數を知らず見る所の誠しきと思ふ人の云ふ事は誠と聞かれ、かたましきと見ゆる人のなす事は何にても皆詐りと見ゆ。又、あはれがましき人の訴はまげられたる所あるよと思はれ、にくさげなる人のあらしひはひがごとならんと覺ゆ。これらの類は、我が目に見る所に心の移されて、彼が言葉を出さぬうちには、や我が心の中に、邪ならん、正しからん、曲らん、直からんと思ひ定むる程に、訴の言葉を聞くに至りては、我が思ふ方に其の事聞きなす事多し。訴のなるに及びては、あはれがましきにくむべきあり、にくさげなるにあはれなるあり、誠しきに偽りかたましきが多き事、此

のたぐひ殊に多し。人の心の知り難き、容を以て定めん事叶ふべからず。古の訴を聞くには、色を以て聽く事あり。それは、覆はるる所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所につきて心おほはるる事多し。又、さなきだに訟の庭に臨んでは、恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせて、おのづから云ふべき事も得云はで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮、互に面を見も見られもせぬには、若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候」と答へしとなり。(藩翰譜)

藩翰譜
十三卷 徳川
家宣の命によ
つて慶長五年
から延寶八年
までの八十
一年間に於ける
一萬石以上の
諸侯三百三十
七家の傳記・
沿革・勳功等
を記したもの

二 渡り鳥

松本亦太郎

(142)

梅が枝に飛ぶ黄鳥や、池水の面に眠る鴨の姿はいかにも閑雅で、泰平の瑞相として人に愛でられてゐるが、鳥の無邪氣で愛らしい有様は、その家族生活に於て最もよく現れるのである。サウスーケンシントンの博物館には、殆どあらゆる鳥の巢が蒐集されてあつて、一々の巢の周圍に剝製の鳥を配置し、親鳥がその雛や卵を愛育保護する天然ありのままの状態を眞寫してゐるが、鳥の表情といひ、周圍の風色といひ、いかにも眞に迫つてゐて、これを見るものは、禽鳥の一家親子の情がいかに楽しく、いかに平和なものであるかを想像し、感歎せざるを得ないのである。いかなる不慈の親も、いかなる不孝の子も、ケンシントン博物館蒐

松本亦太郎
文學博士 元
東京帝國大學
教授 慶應元
年生
グイ
サウスーケン
シント
ロンドン市ハ
イドパークの
南にある一區

セイ

集の鳥の巢を見たならば、必ずやその本心の眞に立歸るであらうと思はれるほどである。一方より観る時は、禽鳥の生活ほど喜樂平和な有様を呈するものはない。しかし、鳥類が右の如き喜樂平和な状態中に棲息するのは、その生涯の或短時期に過ぎないので、他の方面から観れば、鳥類の生涯は實に一大奮闘の生涯であると認めねばならぬ。しかも、鳥類の如く勇ましい奮闘をするものは、動物中に於て恐らくその比類がないといつてもよい位である。鳥は自己の生存及び種族蕃殖の爲に、他の鳥と相争ひ、或は鳥以外の諸動物と激烈に相戦ふ必要があるのであるが、鳥類の奮闘の最も雄大な状態は、殆ど不可抗の天然力に抵抗してその意志を貫ぬかうと努力する時に於て現れる。かゝる場合に於ける奮闘は、實に莊嚴なも

(143)

ニューファン
ドランド
英領北アメリ
カの東に位す
る島 イギリ
スの植民地
エイテュー島

西印度諸島の
一 ハイチ・
ドミニカの二
共和国に分れ
る
グリーンラン
ド
北アメリカの
東北、北水洋
中にあるデン
マーク領の大
島

バルチック海
ヨーロッパ北
部の内海

のである。

天然力に抵抗して禽鳥が大奮闘をなす適例は、これをその去
來現象について見ることが出来る。この去來現象は、日本あた
りでは春と秋とに最も著しくこれを見るので、北方から南方へ
向ふものと、南方から北方へ向ふものとがある。即ち自己の生
れた郷土に向つて歸り來るものと、自己の郷土から去つて遠い
遠い所へ飛行くものがある。

禽鳥去來の距離について、西洋の學者は種々研究を試みてあ
る。黄金鷓はニューファンランド附近に生れ、中央アメリカ
のエイテュー島あたりまで移住するのであるが、その距離は千
七百哩に達してゐる。俗に「石返し」といふ鷓の郷土はグリーン
ランド附近であるが、これが冬になると、濠洲或は南米に棲むの

であるから、その旅程は約七千哩に達するのである。この他南



飛群の鷓

阿及び濠洲にある鳥で、春になると北水洋に移るのがある。即ちその移住旅程は九千哩以上である。地球の直徑は八千哩弱である。小さい雙翼の力を頼みに、八九千哩を飛躍する鳥の勇氣と努力とは、人間の想像の及ぶところでない。

徑路を取るのではなくて、多くは至つて迂迴してゐる。例へば、
バルチック海濱に棲息する鷓はアフリカに去來するのである

アルプス山
中部ヨーロッパ
の大山脈
ライン河
アルプス山に
發してドイツ
及びオランダ
を流れて北海
に注ぐ大河
ローヌ河
フランス東部
を流れてリヨ
ン灣に注ぐ
シシリー
イタリヤに屬
する地中海中
の島嶼

が、最短距離からいへば、アルプス山を越え、イタリヤの東海岸を
經て、アフリカに入るべきであるのに、實際はさうでなくて、ライ
ン河に沿うてその源まで溯り、それよりローヌ河に隨つて海岸
に出で、イタリヤ及びシシリーの西岸を通つてアフリカに入る
のである。この徑路は年々殆ど不變である。旅行には休息の
場所や食餌を得る場所が必要であるのみならず、氣候の關係も
あるから、やたら道のをとるといふわけには行かぬ。若し誤つ
て去來の公道を迷ひ外す時は、種々な障礙に躓つて、遂にその目
的地に達することが出來ずに死ぬのである。故に正當な去來
の道筋を知るといふことが、鳥類にとつては死活の問題になる
のである。

鳥類は如何にしてその去來の道を知るに至るのであるか。

本能によりて之を知るのであると言つては、説明が餘りに簡單
に過ぎる。是も人間がまだ十分に説明する能はざる事實の一
である。多くの場合に於ては、年長の至強の鳥が前に飛んで、移
住の一群を導いて行くのが作法であるが、時としては、母鳥が迷
子になつた幼鳥を探しに戻つて、遂に自ら道を失つて死ぬこと
もある。暴風に逢うて一群四散する時は、年長の雄鳥と雖も往
往道を失ふのである。

然るに、移住發程の季節に於ては、幼鳥が一種の旅行熱にうか
されて、親鳥の出發を待つことが出來ず、無經驗をも顧みずして
無鐵砲に飛出し、正當な道筋がわからず、途中に迷うて死ぬこと
もあるのである。かゝる次第であるから、概して群をなして去
來するといふことが、禽鳥の爲に極めて必要なものであつて、幼い

十二時間半
現在は普通急
行列車にて十
時間乃至十一
時間、特別急
行列車にて約
八時間

鳥は、老いた鳥から、去來の公道に當る原野や、山脈や、谿谷や、河流などの形勢を學びながら、飛行かねばならぬのである。



渡り鳥の群(ナイル河畔)

哩以上の速力で随分遠距離を飛ぶのであるから、東京大阪間の

禽鳥の飛行の速力は随分大きなものである。一二の例を擧げて見ると、鶉が海などを渡つて去來する際には、一時間三十八哩ぐらゐの速力で飛んでゆくのである。東京から大阪までは急行列車で十二時間半を要するのであるが、鶉はこれを九時間で飛んでしまふ割合である。鳩は四十三

汽車道ならば八時間ぐらゐで通過してしまふ割合である。競馬の記録に遺つてゐる最も迅速なチルドスといふ馬は、三哩競争に一秒十五・六三ヤードの速力を以て走つてゐるが、燕は一秒に四十九・〇ヤードの速力で飛ぶのである。のみならず、競馬は長い間練習させても以上のやうな速力を保つて走るのは僅か六分か七分に過ぎないが、或鳥類は數日間毫も翼を休めることなしに、大速力で飛ぶことがある。(渡り鳥日記)

芭蕉
名は宗房 俳
人 元禄七年
(二三五四)歿
年五十一

桐の木にうづら鳴くなる塀の内
目にかかるくもやしはしの渡鳥
海くれて鴨のこゑほのかに白し

芭蕉
同
同

三 畫の話

杉村楚人冠

(150)

杉村楚人冠
本名廣太郎
新聞記者・評
論家 明治五
年生

一休和尚

名は宗純 京
都紫野大徳寺
第四十七世の
住僧 文明十
三年(二一四
一)寂、年八
十八

蓮如

名は兼壽 本
願寺第八世蓮
如上人 眞宗
中興の祖 明
應八年(二一
五九)寂、年
八十五

因頼スことば

昔、馬の畫をかいて一休和尚に贊を求めた男があつた。一休は、何のためらふ様子もなく、墨くろぐると「馬ぢやさうな」と書いた。折角かいた馬の畫に「馬ぢやさうな」はちと殿しい。無論その男は不満げな様子であつた。それと見て一休はなぐさめ顔に「おれは無學でこれ以上のことは書けぬが、友だちに蓮如といふ滅法賢い坊さんがあるから、あそこへいつて頼むがいい。」と云つた。

早速蓮如上人のところへ右の畫を持つて行くと、蓮如は一休の書いた贊の直ぐとなりへ「さうぢやさうな」と書加へた。味は

へば味はふほど味のある話と、自分はいつても感心してゐるのである。

二

ついこの頃、ある經師屋へ朝鮮の畫家のかいた墨竹の幅を表装させにやつた。出來上つて來たのを見ると、白地の畫に、ほとんど黒に近いほどのどぎつい濃鼠の縁をあしらつてあつて、如何にも色の取合せが悪い。これでは折角出來てきたのだが、作り直させる外はない。私はその由ことわつて送り返した。

その時の經師屋の態度がすこぶる私の氣に入つた。彼はその送り返されたことを、くやしがるどころか却つて非常に喜んで、どうも近頃は自分の氣に入らうが入るまいが、何もかも經師屋任せで、小言一つ言つてくれる人がない。それにかういふ御

(151)

圓覺寺
神奈川縣鎌倉
市外小坂村に
あり 臨濟宗
圓覺寺派本山
白隱和尚
臨濟宗の高僧
明和五年（二
四一八）寂、
年八十四

註文をつけて送り返して下さるとは、何としても有難いことである。必ずお氣に召すまでは何度でも作り直します。」と聞いても氣持のいゝほど快く作り直しを引受けてくれた。

それについて思ひ出すことがある。前年鎌倉の圓覺寺の塔頭某庵の座敷に、白隱和尚の小幅がかゝつてゐたのを、和尚に懇請して譲りうけた。ところが、宅へ持歸つて見ると、畫の地紙が一面に汚れてゐて、如何にも汚らしい。これのある知人に頼んで、その出入の經師屋へ洗はせにやつてもらつた。

然るに、その經師屋はこの畫を一目見て、「これは古寺の書院か何か長い間かゝつてゐた畫でせう。」と言ふ。「さうだ。」と答へると、「この畫の汚れ方は何でもなまぐさものを料理しない家の煤で、何十年といふ長い間かゝつて汚れたものでかういふ汚れ方

はなかなか得難いものであるから、これはお洗ひにならぬ方がいい、でせう。」と言つて、何と言つても、洗はうとはしないとのことであつた。

金になるなら、心にそまぬ事でも何でも命のまゝにやる者の多い世の中に、さすがに風流に縁の近い經師屋の間には、まだかういふ古雅な名人氣質が残つてゐるかとうれしかつた。

（續湖畔吟）

梅は、遠くから見ては、たゞ白いばかりで、格別の趣はないが、一枝折取つて瓶に挿せば、その枝ぶりに疎影横斜の姿を見せ、その花の香に、暗香浮動の妙味があつて、まことによろしい。

（杉村楚人冠）

金田一京助
文學博士、言
語學者、東京
帝國大學助教
授、明治十五
年生

二三 イランカラプテ

金田一、京助

一ヶ月餘の旅を終へて、樺太を引上げようとする前の晩だつた。始終同行してくれた樺太廳のA氏が、改つて私へかう云ふのであつた。

「お別れに一つ、たつた一言を教へていたゞき度いのですが。」
今迄殆どアイヌ語に關心を持たなかつたA氏がさう云ふので、私も不思議に思ひながら、「どんな一言をですか。」と問返すと、
「いつも、その一言を口にされると、アイヌが不思議になつてこりする、あの一言をどうぞ御傳授に預りたいので。」
と云ふのである。

「それは何だらう。」と私の頻りに考へ込むのを笑ひながら、A氏

の云ふのに、

「たゞさへ無表情なあのアイヌが、殊に女などになつたら無^二想^一で、吾々が道を聞いても物を訊ねても、につこりは愚か、わきを向いて、返事をしようとしぬのに、あなたが何か一言いはれると、どんなアイヌでもきつとにつこりする、あの言葉です。何といふ言葉なのでせう。不思議で仕方がないから、役所へ歸つて、土産話にそのことを話したら、是非ひとつその言葉を教はつて來いと云はれました。」

と云ふ。

そしてA氏は、思ひ出し思ひ出し、かういふことを云出した。

「例へば、あのシルトルの道で、磯に寄り木を拾つてゐるメノコの姿へ遠くから聲をかけなすつた。あゝいふ場合、普通の言

シルトル
樺太廳元泊郡
知取町

葉ならアイヌはいつもわきを向いてしまふものなのに、こつちを向いて、口元の眞黒な入墨が開いて、白い齒を出してにつこりしたぢやありませんか。あの時に、何と云はれたものでせう。」

さう云はれてやつと思ひ出した。

「なに、イランカラフテと呼びかけただけです。それなら何でもない。『お早う』今日は『な』といふ挨拶の詞ですよ。」

アイヌと親しくしてゐる人なら誰でも知つてゐる挨拶の詞だから、A氏がこんな詞を問題にしてゐられようとは、私の方で思ひも寄らなかつた。だから、思ひ出せなかつたのである。尤も、多くの邦人の云つてゐるのは、ヤングラフテと訛つた形で、それでもお互の間にはよくわかつて通用してゐるのである。

本來は毎日逢つてゐる程の人が通りすがりに、「今日は『だの』、今晚は『だの』、お早う」だのといふ軽い挨拶の語は、アイヌの間にはない。では、さういふ場合何と云ふか。アイヌなら、何も云はずに黙つて、顔を見交して擦れちがふのである。だから、無愛想に思へるのである。イランカラフテは、もともとさういふ形式的な會釋ではなく、昵懇の間柄の長らく逢はなかつた久潤の會見などに、「なつかしや」と涙を流しつゝ、云ふ辭である。それが、邦人と交際をするに及び、邦人同士はほんの行きずりにも、「今日は」とか、「今晚は」とか云ふものだから、とうとうそれにあてて、少し贅澤だが此のイランカラフテを日常使ふ様になつたものである。朝晝晩の差別無く「イランカラフテ」と云ふものだから、従つて、「お早う」にも當り「今日は」にもなり、「今晚は」にもなるのである。

だから、もともといへば、見も知らない路傍の人などへ、「イランカラフテ」と云ふのは丁寧すぎる。が、私はアイヌを見かけさへすれば嬉しくなつてどこでも、いつでも、言葉がかけたくなり、會釋をせずに過ぎることが出来ない。だから、道で擦れちがふ老人を見ても、通りすがりに畑の草むしりをしてゐる婦女子を見ても、つい氣輕にこちらから、「今日は」のつもりで、「イランカラフテ」と呼びかける習慣になつてゐたのである。

尤も、樺太發音ではイランカラフテ、或はイランカラツテでも通じるが、ヤンガラフテは随分激しい訛音である。それでも通つてゐる所へ、私が清濁からアクセントから、そつくりアイヌ發音に呼びかけるものだから、破顔一笑させる位の効果があるのかも知れない。

A氏と別れてから、色々思ひ當る様な回想が湧いて来る。今でもそれを思ふと、「過去三十年、茫々たるアイヌ部落を私の辿つて来た一路は、イランカラフテの一本道だつた」と云へるかも知れない。

アイヌ部落といふものを始めて探訪した學生時代のこと、日高の平取から、山を越えて、膽振の似灣へ出て、早來へ抜けたことがある。その途中、一丈餘もある大虎杖の叢林のやうに路を埋めて繁茂した中を、左右の手で押分け押分け一時間も歩いてゐた。人聲一つ聞かない、晝尙暗く、涯を知らないこの原始林野で、段々心細くなり、薄氣味が悪くなつて神經の立つて来た頃、突然ばたばたと大きな音を立てて足元から飛起つものの音に、熊でも出たのではないかと驚いて、やがて、虎杖の梢をすれすれに飛

日高の平取
北海道沙流郡
平取村
膽振の似灣
同勇拂郡穂別
村の大字
早來
同郡安平村の
大字

んで行く山鳥の姿を仰いで、ほつと安心した、すぐその後だった。
今度こそ地上をのそりのそりやつて来る眞黒なものの姿に、
どんと吐胸を衝かれて瞳を据ゑると、ぬつと現れたのは髯のの
びたアイヌたちだったのに、ほつとはしたが、手に手に持つ所の
大鎌は、觸れたら腕でも首でもひとたまりも無ささうに磨ぎす
まされた大きなもので、それが一尺の幅もない小徑いづばいに
塞がつて、避けようにも、身の交しやうが無いのである。が、ばつ
たり逢つた瞬間に、この時もやつぱり「イランカラフテ」と、こちら
から覺えず呼びかけたものだった。

すると、鬼のやうなアイヌたちが、その頭へ徐ろに左の手をあ
げ、縛つてある手拭を外して、「イランカラフテ」と返し、體を開いて
爪立てするやうに辛うじて立つて、私の通るのを待つてくれる。

一人・二人・三人・四人・五人・六人、何れ劣らぬ髯男の爛々たる目と、ざ
らざらする草刈鎌の、ひつか、つたら指でも墜ちさうなのを十
幾人がずらりと竝べた前を、胸の髯へすれすれにやつと通り抜
けるまで、まだかまだかと虎杖を押分けながら、二三人置きぐら
ゐに「イランカラフテ」を云つて通るに、皆も一々被りを取つて、口
口に「イランカラフテ」を返して、じつと立つて私を通らせてくれ
た。通り過ぎた時には、脇の下に、我知らず冷汗を搔いてゐたこ
とだった。

が、この時この體驗から、もう大丈夫、アイヌは決して恐しいも
のではないといふことを體得したと共に、この人達がたつた今
通つたばかりの道だから、もう行手に熊などゐる筈がなくなつ
た安心が、昔頼光が大江山の道に住吉明神に逢つた様な力強さ

育

と元氣とに變じて勇躍して前途に向ふことが出來たのだつた。言葉は畢竟懐かしいもの。殊に郷に入つては郷の言葉。そこに自らの微笑が動き、油然として親しみが湧くのである。大地の胸に湧くのは清水であるが言葉は人間の胸に湧く清水であらう。一掬の胸の清水は、相識らぬ旅人の心と心をもなごやかに濕すのである。(學窓隨筆)

フランソワ
(1841-1917)
フランソワの彫
刻家

生命を表現するにはそれを表現しようとする
ことが必要だ。藝術は良心と精確と意志とで成
立する。誠實は藝術家の仕事に於ける眞の土臺
である。
(ロダン)

二四 短歌鈔

正岡子規
第一八課参照

正岡子規

フツ
臥しながら雨戸あけさせ朝日照る上野の森の晴を
よるこぶ
ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見れば
よき月夜なり
瓶にさす藤の花ふさ花垂れて病の牀に春暮れんと
す
若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでに
けり

(AK-115)
010

伊藤左千夫
本名幸次郎
歌人 大正二
年歿、年五十

伊藤左千夫

まづしきに堪へつつ生くるなど思ひ春寒き朝を小
庭掃くなり
をさなげに聲あどけなき鶯をうらなつかしなつかしみおり
立ちて聞く
みぎひだり背に寄りつくを負ひ竝めて笑ひあふる
る眞晝の家に
秋立つと未だいはなくにわが宿の合歡木はしどろ
に老いにけるかも
おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしと柿の
落葉深く

長塚節
第一八課参照

長塚節

窓の外は藁ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春行
かむとす
檜の木の嫩葉は白しやはらかに單衣の肌には透
りけり
垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつた
るみたれども
蝕みてほほづき赤き草むらに朝は嗽すすひの水すてに
けり
露の葉の雨をよろしみ立ちぬれて聴かなともへど
身をいたはりぬ

島木赤彦
本名は久保田
俊彦 歌人
大正十五年歿
年五十一

島木赤彦

障子あけて昨日の朝も今日の朝も遠くながむる春
さりにけり
山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりに
けり
岩あひにたたへ静もる青淀のおもむろにして瀬に
移るなり
武藏野原枯れゆくころは町中の庭に小禽の來て鳴
きにけり
ある日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず牙え返
りつつ

齋藤茂吉

齋藤茂吉
名は茂吉 歌
人 醫學博士
明治十五年生

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝み
よろふ山
ゆふ闇の空をとほりていづべなる水にかもゆく一
つ螢は
くらやみに檜の木原にとよもせる山のあらしを夜
もすがら聞く
むしばみてわが齒なやみし日ごろより日にけに秋
は深くなりつも
むらがりて庭に衰ふるあらくさにさ霧は白しいで
立ちみれば

齋藤茂吉
前課參照

三 晚秋小筆

齋藤茂吉

宵闇の空にもう雁のこゑが聞えるやうになつた。飛行機などが時々空中を轟かすので、雁の飛ぶのも少くなつたやうにもおもふが、それでも、渡り鳥はもう空を渡つて来るやうになつたのである。

さういふ時節が来た。この夏は避暑にもゆけず忙しく働いてをり、輕井澤へんに避暑してゐる友人から繪葉書などを貰ふと、ひとり寂しくおもふこともあつたが、雨がしきりに降續いて盛夏も盛夏らしくなく、書物にも着物にも微が吹き、梅雨の再現らしい日が續いたかとおもふと、いつのまにか立秋になつてしまつた。

輕井澤
長野縣北佐久
郡の町 避暑
地 海拔九〇
九米餘

芭蕉
松尾芭蕉 名
は宗房 俳人
正風の祖 元
祿七年（二三
五四）歿、年
五十一
病雁の云々
病雁の夜寒に
落ちて旅艱か
な

そのうち蟋蟀などが鳴いて、秋の彼岸になつた。夏の休中に元氣を盛返した人々も勤勉に立働き出したが、休む暇のなかつた人々も、何か新鮮な仕事にありついたやうな氣持になつて立働いてゐる。蠶の出来も悪し、不作だらうといふ心配が、一時人の心を領してゐたが、美しい天氣が幾日も續いて、二たび愁眉をひらくやうになつた。栗の實も金に色づいて笑んで落ちた。雁のこゑはものあはれである。それであるから、古人もこの聲に心をひそめて詠歎した。それ等の詠歎は詩として今に残つてゐるから、僕等は現今その詠歎に接することが出来る。芭蕉の「病雁の夜寒におちて」の句の如きは、今もなほ僕等の身に沁徹るをおぼえる。

雁のこゑの感味は、これをわれわれ直接の感覺にうつたへわ

れわれに親しい、現實のものであると深く理解することによつて、はじめて古人の感情と並行して行くことが出来るであらうか。

一日の勞働を終へ、一ときのゆとりを得た時に、僕等は、雁の一聯を小手をかざして見てゐるミレーの畫境にも參入することが出来るのであつて、これは必ずしもはや一通りの陳腐ではない。況して此處は佛蘭西ではなく、汀の葦に霜のはげしく結ぶ國柄であることを、僕は今おもふのである。

大正十四年の春に、家の焼あとに鐵道草といふ草が一めんに生え、秋に至るまで威を逞しうしたことがある。鐵道草は舶來の雜草であるからさういふ名がついてゐる。一名明治草といふのもさういふ關係に基づいてゐる。この草は、春先には細か

く柔かい愛すべき形をして萌えるが、盛夏には五六尺にもなり、花が咲くやうになると、極めて風情のないものになつてしまふ。

この草が盛に萌えると、從來の日本にあつた雜草が壓倒されてしまひ、あかざのやうな繁殖力の強い草でも、鐵道草の生えてゐる範圍に及ぶことが出来ない。そのほかの日本從來の草などは、秋ぐちになり、鐵道草の下かげになつて幽かな花をつけてゐるやうな工合である。

僕はそのこゝろ家財全部を焼いてしまひ、心にひどく苦しんでゐた頃なので、かういふ植物界の繁殖争鬭のありさまにも心を留めて観るやうになつた。そこで、その觀察した記事を或雜誌に書いた。そのとき僕は、今は鐵道草は、このやうに威を逞しうしてゐるが、びよつとしたら二たび從來の日本の雜草の方が根

づよい力を見せるかも知れない。」といふやうな一種の感傷的な言葉を附加しておいたのであつた。

然るに、大正十四年が過ぎ、十五年が冬になる頃までは、鐵道草は依然として繁茂し、その冬枯れたものを刈取つて、風呂の焚附にしたくらゐであるのに、昨年、つまり昭和二年ごろには、何となしに鐵道草の繁殖力が減少して來、そこには細い日本の從來の草が一めに生えるやうになつた。そこに從來の平凡な名も無いやうな草も雜つて生えるので、鐵道草の勢はひどく減り、今年即ち昭和三年のこの冬には、風呂の焚附にするやうなもの、つひに見つからなくなつてしまつたのである。(念珠集)

三 武藏野

國木田獨歩

國木田獨歩
名は哲夫 小
説家 明治四
十一年歿、年
三十八

昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるるとき、林影一時に煌めく。

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑のまゝ、でありながら、空模様が夏と全く變つてきて、雨雲の南風につれて、武藏野の空低く頻りに雨を送る。其の霽間には日の光水氣を帯びて、彼方の林に落ち、此方の杜にかゞやく。自分は屢、思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出來たら如何に美しいことだらうかと。

昔の武藏野は、萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らし、てゐたやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實

に今の武藏野の特色といつてもよい。即ち樹は主に檜の類で、冬は悉く落葉し、春は滴る許りの新緑萌出づる其の變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、様々の光景を呈する其の妙は、一寸西國地方又東北の者には解しかねるのである。元來日本人は、これまで檜の類の落葉林の美を餘り知らなかつた様である。

秋九月中旬といふ頃、一日自分がさる樺の林の中に坐してゐたことがあつた。朝から小雨が降りそゞぎ、その霽間にはをりをり生暖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空合ひ。あはあはしい白雲がそら一面にたなびくかと思ふと、ふとまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押分

けたやうな雲間から、澄みて伶俐しげに見える眼の如くに、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で微かに戦いたが、その音を聞いた許りでも季節は知られた。それは春先の面白さうな笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおどおどしたうそさぶさうなお饒舌でもなくて、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳つた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子が、間斷なく移り變つた。或はそこに在りとある物總べて一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたつて、そのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は、思ひ

がけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散敷いた細かな落葉は、俄かに目に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうなバアポロトニクの見事な莖しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして目前に透かして見られた。

或はまた四邊一面俄かに薄暗くなりだして、また、く間に物のあいりも見えなくなり、樺の木立も、降積つた儘でまだ日の眼に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む——と、小雨が忍びやかに怪しげに私語するうちにばらばらと降つて通つた。樺の木の葉は、著しく光澤が褪めても、流石に尙青かつたが、只そちこちに立つ稚木が、今は總べて赤くも黄色くも色づいて、をりをり日の光が、今は、雨に濡れた許りの

細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて來るのを、おびては、きらきらときらめいた。

これはツルゲネーフの書いたものを、二葉亭が譯した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣を解するに至つたのは、此の微妙な敘景の筆の力による所が多い。これはロシアの景。而も林は樺の樹で、武藏野の林は檜の樹。植物帯からいふと甚だ異なつてゐるが、落葉林の野である事は同じである。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉が落盡くせば、数十里の区域に互る林が一時に裸體になつて、蒼

ツルゲネーフ
(1818—1883)

ロシアの文學
者

二葉亭

本名長谷川辰
之助 號は四

迷 文學者

明治四十二年
歿、年四十六

ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分分は十月二十六日の記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睥視し默想す。」と書いた。此の耳を傾けて聞くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ざる響。蹄で落葉を蹴散らす音。これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲



雑木林

聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれて近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を読んでゐると、突然林の奥

で物の落ちたやうな音がした。足もとに寝てゐた犬が、耳を立ててきつと其の方を見詰めた。それきりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の樹も随分多いから。若し夫れ時雨の音に至つては、これほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が

國でも和歌の題に迄なつてゐるが、廣い廣い野末から野末へと、林を越え、辻を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り

中野・澁谷・世田ヶ谷
現在の東京市中野區・澁谷區・杉並區・世田ヶ谷區等を指す
小金井
東京府北多摩郡小金井町
東京水道の上流 櫻の名所

行く時雨の音の如何にも幽かた、また鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林の時雨に逢つた事がある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人懐かしく、私語くが如き趣はない。

秋の中頃から冬の初試みに中野あたり、或は澁谷・世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲れを休めてみよう。これ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて、微かな音をたてる。而して其も止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覺ゆるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干たる時、星をも吹落し、さうな野分が、すさまじく林をわたる音を、自分は屢、日記に書

熊谷直好
名は信賢 國學者 香川景樹の門人 文久二年(二五二)歿、年八十一

日光
栃木縣上都賀郡にある 男體・女貌その

いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此の物凄風風の音の、忽ち近く、忽ち遠きを聞いて、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけた事もある。熊谷直好の和歌に、

よもすがら木の葉かたよる音きけばしのびに風のかよふなりけり

といふがあるが、自分は山家の生活を知つてゐながら、此の歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。林に坐つてゐて、最も日の光の美しさを感じるのは春の末より夏の初であるが、それは今こゝには書くべきでない。其の次は黄葉の季節である。半ば黄色く、半ば緑な林の中を歩いてゐると、澄みわたつた大空が、梢々の隙間から覗かれて、日の光は風に動く葉末、葉末に碎け、其の美しさは言ひつくされぬ。日光

他の諸山、中
禪寺湖・華嚴
灘・東照宮等
ある名勝地
碓氷
群馬縣碓氷郡
の西境、長野
縣北佐久郡に
跨がる峠、海
抜八六六米
關東平野と信
州高原との通
路

島木赤彦
第二四課參照

奥田正造
教育家 成蹊
高等女學校長
明治十七年生
奕堂
諱は游崖 總
持寺に住し、
曹洞宗管長と
なること二回
明治十二年寂
年七十四

とか碓氷とか天下の名所は兎も角、武藏野の様な廣い平原の林
が隈なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つとい
ふも、特異の美觀ではあるまいか。若し高きに登つて一日に此
の大觀を占めることが出来るなら此の上もないこと。よしそ
れが出来難いにせよ、平原の景の單調なだけに、人をして其の一
部を見て、全部の廣い、殆ど限りない光景を想像させるものであ
る。(武藏野)

この朝け霧をほろなる木の影に日のけはひ
して鳥鳴きにけり

島木赤彦

二七 鐘の音

奥田正造

一日、奕堂和尚は殷々とひびく曉鐘に心耳を澄まし禪定から
立つて侍僧を召し、鐘つく者が誰であるかを見させた。侍僧は
それが新參の一小沙彌であることを返り報じた。そこで奕堂
和尚は之を膝下に招いて、

「今曉の鐘は如何なる心持で撞いたか。」

と尋ねられた。沙彌は、

「別にこれといふ心持もなく、只鐘を撞いた許りでございます。」

と答へたので、

「いやさうではあるまい。何か心に思つてゐたであらう。鐘
つかばかりこそ。誠に貴い響であつたぞ。」

と云はれて、

「別にこれといふ心得もございませんが、只、國許モトの師匠シニヤウが鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの愼シみを忘れてはならぬと、常々戒めて下さつたことを思ひ浮かべて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ、撞いたばかりでございます。」

と答へた。奕堂和尚はしみじみとその心掛を賞し、

「終生萬事に處して今朝アサの心を忘れるな。」

と戒められた。この小沙彌シヤミこそは後年の森田悟由大禪師であつた。朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻イソにさへ、かほどまで敬虔の念を罩めた古人の心づかひは、いかにも貴い。

通天の鼎洲和尚が、或日、山門内で松の落葉ツルハを一つ一つ手で拾

森田悟由大禪師
永平寺に住し
曹洞宗管長と
なる 大正四
年寂、年八十
二
通天
東福寺の俗稱
東福寺は京都
市東山区にあ
り、臨濟宗の
一本山

鼎洲 東福寺
禪僧
に住した 嘉
永二年(二五
〇九)寂、年
七十六

つてをられた。これを見た侍者某が、「お手づから一つ一つお拾ひになるにも及びませぬ、どうせ只今掃きます故。」と聲をかけた。鼎洲はつくづくと侍者の顔を見て、「今の言葉は修行する人の心持ではあるまい。どうせなどと後をあてにする様ではいかぬ。一つ拾へば一つだけきれいになるのぢや。」と戒められた。箒ハシを持つ言ひかへれば清淨スガサガは實にこの心でなければならぬ。箒を持つた時にのみ掃除があるのではない。一塵の心にとまつた時、その一塵を取除けて、清淨となす處に眞の掃除がある。

雲門大師が門前で菜を洗つてゐた時、思はずその一葉を取流し、非常に驚いて之を追ひかけ、千辛萬苦の末やうやう拾ひ上げた。之を見た庄屋某が、

雲門大師
支那韶州雲門
山、文偃禪師
五代の頃の
禪宗の一派雲
門宗の祖

長江
支那の揚子江
をいふ

「菜の一葉位にそれほどまで苦勞なさるのは、どういふわけでございませうか。」
と尋ねた。大師は

「一莖の大なるも、一葉ヨウの小なるも、均しくこれ天與であつて、人を養はんが爲である。小なればとて之を棄てて顧みないのは、天恩を忘れ、人道に背く所以ではないか。百粒の米は一粒より生じ、一滴の水はよく長江の大をなす。」

と教へられた。この大精神に取扱はれる一粒一葉こそ、眞に道を修める人の生命を養ふに足りる尊い心身の糧といふべきである。(茶味)

貝原益軒
名は篤信 儒者

正徳四年

(二二七四)歿

年八十五

禹王

支那古代夏后

氏の始祖

六 惜 陰

貝原 益軒

凡そ、幼きよりつとめ學ぶに隙ひまを惜しむべし。古の禹王は聖ひまなる人なりしだに、なほ寸陰を惜しみ給ふ。況や今の凡人をや。いたづらに悠々として、空しく時日を費すべからず。光陰箭の如く、時節は流るるが如くなれば、年若きをたのんで時を失ふべからず。

人の世にありては、老幼の時と病する時とは學びがたし。又、四民ともに其の家のことわざしげくして、もの學ぶ隙はすくなし。其のすくなき隙を惜しまず、怠りて空しく過ぎ、或は無益の事をなして時を費し、一生をはかなく終らんこと、いと愚かなりといふべし。今年この年の今日、再び得がたきことを思ひて、假にもい

士農工商

車か出ず

たづらに時をわたるべからず。これ一生の間、心を用ふべきことなり。

常にして云々

(説苑の言)

いたづらに云

云

(荀子の言)

人生は云々

(蘇頌の言)

古人も、常にして置かず、常に行ひてやまざる者には及びがたし。と言へり。又「いたづらになすことなく、常に隙多き人は、人にすぐることはなきものなり。」と言へり。譬へば、農人、商人のつとめて暇を惜しみ、朝夕田を作り、商ふ者は、必ず人にすぐれて其の家富みて、衣食乏しからず。古人も、人生はつとむるにあり。つとむれば、則ちまどしからず。と言へり。國家の政をくはしくつとむれば、其の國家は必ず治る。學問をくはしくつとむれば、必ず諸人にすぐれて其の才すゝむ。萬づの事みなしかり。隙を惜しみて久しくつとむれば、成就せざることなし。如何となれば、君子の學

問をつとめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝を學び、農夫の田を作り、商人の物をひさぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛を織り縫ふも、皆暇を用ひてなし出すわざなれば、人の最も重んじ惜しむべきこと、暇に過ぎたるはなし。故に、その惜しむべきこと、金玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして寸陰を貴ぶ。と言へり。隙を惜しまざる人は、學ぶこともつとむることもなければ、必ず才智も徳行も藝能もなきものなり。暇を惜しまざれば、男子は身を修め家を齊ふること能はず。農工商は其の家業を失ひて、貧窮飢寒をまぬかれず。學者は必ず粗學にして不才なり。くすしは必ず賤工なり。萬づの道々のたくみも、暇を惜しまざれば必ず拙し。これ暇は人生の寶にして惜しむべき故なり。

聖人は云々
(淮南子の言)

大和俗訓

八卷 修身・禮義・作法の
ことを説述し
たもので、爲
學・心術・衣
服・言語・躬
行・應接等に
分つて記す
文化十二年
(二四七五)出
版

朱子

名は熹 字は
元晦 文那南
宋の儒者 慶
元六年(皇紀
一八六〇)歿、
年七十一

年少の時は、事すくなく暇多し。精力つよく、記憶つよく、一たび見聞きて覚えしこと、身を終ふるまで忘れず。此の時つとめ學べば其の功多し。故に書をよむことは少年の氣力つよく、暇ある時よくつとむれば、大いにすゝみて益あり。三十歳以後は萬づつとめ多くなりて暇少く、精力やうやう弱くなるに従ひて其の覺衰へぬれば、力を多く用ひても忘れ易く、勞すれど功少し、年少なる人はよくこれを心得て若き時、隙を惜しみ學問をつとむべし。誠に一生の寶となるべし。(大和俗訓)

偶 成

朱 子

少年老イ易ク學成リ難シ 一寸ノ光陰輕ンズ可カラズ
未ダ覺メズ池塘春草ノ夢 階前ノ梧葉已ニ秋聲

元 人事と天命

永田秀次郎

平常には善く會得してゐると思つてゐる事でも、まさかの場合になると、全く譯が判らなくなる事がある。私は常に、人事を盡くして天命を俟つ。といふ言葉を教訓としてゐた。然るに、大正四年に大正天皇の御大典に際して、私が京都警察部長に任命されて、御警衛の重責に當る事になつた。斯の如き大規模の御警衛は、我が國では全く先例の無い事で、如何なる程度の警備を、如何なる方法でやつたらばよいかといふ事は、總べて皆私の責任に於て、私の考案の下に組立てなければならなかつた。又、若し萬一大なる失敗を醸した時には、如何にして上下に謝すべきか、斯く案じ煩つて自ら苦しんだ時に、常に思ひ起したのは、この

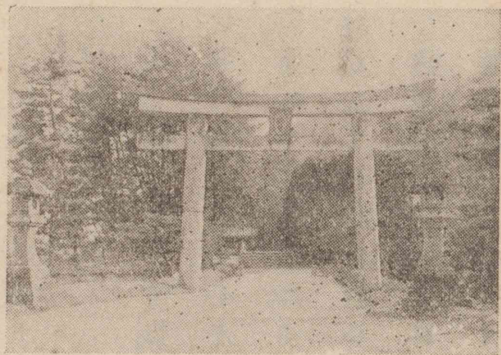
永田秀次郎
貴族院議員
拓殖大學學長
帝國教育會會長
明治九年
生
大正天皇
御名は嘉仁
第二百二十三代
皇紀二五七二
年御即位 大
正十五年十二
月二十五日崩
御、實算四十
八

「人事を盡くして天命を俟つ」といふ文句であつた。所が、平常は何でもないと思つたこの事が、さて愈、實際に當つて見ると、判つてゐる様で少しも判つてゐないことに氣づいたのである。

第一に「人事を盡くして」とは、如何なる程度の事をいふのか。我々が常識を以て想像し得べき出来事に對して、常識の及ぶ限りの細心の注意を以て準備をして置くことだと云つてしまへば、誠に簡單であるが、これが果して眞に「人事を盡くして」と云へるであらうか。失敗すれば辭表を提出する、これで責任が解除せられるといふならば、その責任は全く紙一枚の責任である。「人事を盡くして」といふ一語は、そんな軽いものではない。

然らば、如何にすれば眞に人事を盡くしたものととして、自己の満足を得られるか。私は遂に判らなくなつてしまつた。

私は當時自己の精神の緊張を缺くと感じた際は、唯一人密か



石清水八幡宮

に男山の八幡宮に参拜した。参拜する迄は、私はこれで最善の努力をしてゐるこれ以上は私の力では出来ぬと考へながら、あの男山の長い坂道を登つて行つた。併しさて神前に禮拜して、私はこれで最善の努力を致しましたと口の中で唱へてゐると、

「お前の力はこれだけしか無いのか。」

と問返される様に思はれた。その時、

「私の力はこれしかありません。」

男山の八幡宮
石清水八幡宮
の稱 京都府
綴喜郡八幡町
男山に鎮座の
官幣大社 祭
神は應神天皇
神功皇后・比
賣大神

諸葛亮
字は孔明 支
那劉漢の丞相
劉備の知遇に
感じ二代に互
つて臣事し大
いに補けた
建興十五年
(皇紀八九七)
五丈原で魏將
司馬懿と對陣
中病歿、年五
十四
祁山
甘肅省西和縣
の西北にある
五丈原
陝西省翔府郿
縣の西南にあ
る

劉備
支那劉漢昭烈
皇帝 字は玄
徳 章武三年
(皇紀八八三)
歿、年六十四

と答へることが如何にも残念で仕方がない。それで私は暫く
祈念した後、

「まだ私の力はあります。私の力は決してこれ限りではあり
ませぬ。」

と心に誓ひながら、慨然として、再び長い坂道を下つて來た。私
は斯の如くして心を苦しめた。「人事を盡くして」といふことは、
言葉の上では何でもないが、中々腹の底から判るといふことは、
容易なものではない。

諸葛亮の出師表の中にも、

「臣鞠躬して盡瘁す。死して而して後已まん。」

といふ文句がある。六たび祁山に出て、遂に五丈原頭の露と消
えた彼の一生、文字通りに死して而して後に始めて止んだ彼の

努力、是が即ち諸葛亮の人事を盡くしたものである。然るに、若
し茲に劉備の靈が、夜間枕頭マクドに現れて、

「汝の力はこれだけしか無いのか。」

と問うたならば、諸葛亮は必ずや奮然として、

「まだ私の力は残されてゐます。」

と答へたに相違ない。これを思ふと、「人事を盡くして」といふ文
句一つでも、決して容易に談ずべきものではないのである。

次に「天命を俟つ」といふ文句はどんな意味であるのか。やは
り判つた様で判らない。自分が最善の努力をした、あとは神に
任せることであるといつて、神にのみ依頼してゐれば、それでい
いのであるか。

神佛に依頼するには、先づ供物をしなければならぬ。とい

つても、物質的の供物ではない。神佛が自分の願を聽届けて下さるだけの精神的の供物が必要である。これが即ち信心であり、徳行であり、努力である。この精神的の供物をして、神佛の前に立つと、何となく一種の安心が得られる、精神の靜平が得られる。換言すれば確信が出来る。度胸が出来る。この確信と度胸といふものは、一朝突發の事件が起つた時に、泰然として善處する力を生ぜしめるものである。即ち精神が靜平であり、度胸が据つてゐれば、突嗟に適當の處置を講ずることが出来る。事に支配されずして、却つて事件を支配することが出来るのである。自分に確信があり、度胸があれば、悠々として冷靜に判断を下し、十分にその事件に適應する處理が出来る。然るに、この場合に自分に確信なく、度胸がなくては、唯周章狼狽して、自分の

精神が事件の爲に支配されてしまふ。

斯の如く確信と度胸とを以て事件を支配し、決して事件に支配されないといふ心境、これを稱して私は「天命を俟つ」の心境と考へてゐる。

人間といふものは、考へてみると、何時迄經つても修養の出来ないものだ。唯自分が實際艱難に遭遇して、苦しんでみて、始めて幾分かづつの修養が出来て行くものである。「人事を盡くして天命を俟つ」の一語の理解でも、私は斯の如く苦心しなければならぬのであつた。(九十五點主義)

榎 有恆
登山家 明治
二十七年生

アルプス
中部ヨーロッパ
パの大山脈
メッテンベル
グ・フィシャ
ーヘルナー
グリンデルワ
ルトの東南に
聳える山々

三〇 冬のアルプス

榎 有恆

(198)

大正九年一月十七日午前六時半、案内人を伴なうて宿を出る。寒天星に満ち、南方に聳えるメッテンベルグと蒼白な氷の崖のフィシャーヘルナーとの間に鎌を磨いだやうな有明月が輝き、其の側に大きな星が曉の醒めやらぬ瞬を送つてゐる。

寒い。骨の髄までも沁みて痛む寒さだ。足下の雪が軋つて片栗粉を絞るやうな音がする。何處のホテルでも未だ寝てゐる。只村の男が二人三人橇を引いて行過ぎる。鏡のやうな人影のないスケートリンク、閉された郵便局を過ぎて道がや、坂になつて来た。橇に女の子が二人乗つて滑降して来る。「お早う。」と呼びかけて行く子供等は頬に紅さへさして元氣が好い。

ハイム
アオサ

背囊を背負つて通學するところである。夜が追はれて足下の雪に蒼さがまさつて行く。星は消えて月は白紙の如く輝きを失ふ。今しも冬籠りの小屋の中から出て来た牛共が、道端の溪流を飽くまで飲んでゐる。その頸の鈴の音が凜然と山村の上に響き渡る。私等は道が急傾斜なので、スキーを除き、靴の鉄を打込み乍ら唐檜の森に入つた。鳥の聲すらなく、只枝から落ちる雪の幽かな私話のみである。すると、上方から雪烟を上げて飛んで来る者がある。農夫が、短い材木を小山の如く橇に積み、その前に立つて頑丈な兩脚で雪を蹴、舵をとつて下りて来るのだ。橇の後方に更に鐵鎖で一抱へもあるやうな木の根を引摺つて行く。一臺飛ぶやうに過ぎると又一臺續く。腕も顔面も脚も皆筋骨が逞しく、ミケランジェロの彫刻に見る姿のやうで

ミケランジェ
ロ
(1475—1564)
イタリアの彫
刻家・藝術家

(199)

ユングフラウ
 海拔四一六六
 米
 メンヒ
 海拔四一〇五
 米
 アイガー
 海拔三九七五
 米
 ファインスター
 アルホルン
 海拔四二七五
 米
 シュレックホ
 ルン
 海拔四〇八〇
 米
 ズエツターホ
 ルン
 海拔三七〇八
 米
 何れもア
 ルプス中の高
 峯

あつた。

やがて朝日は山の頂を昇り切つて裾の谷に差込む。私等は



苦惱と陰湿な感情とを吹掃つて、文字通り天空海潤の世界に導

く。決して一時的の興奮ではない。生涯を通じて新しく健かに蘇る記憶である。

輝く峯々、かげる氷河、日に浮き出た断崖の岩皺、頂から立昇る雪烟、そして一切を蓋ふ無限の碧空、私は見るともなく見惚れて、飽かぬ眺に浸つてゐた。人聲がする。村の男衆が五、六人連れ立つて、各、空櫃を擔いで登つて来る。

森は切れてアルプに出た。狐や兎の足跡が走つてゐる。もう日はかかんかと照り出して背を暖める。私等は小屋の縁に腰を下して、魔法瓶から熱い茶を飲み、サンドウィッチを食ふ。頸筋の邊りが日に焼けてひりひりする。案内人は何を思ひ出したか、「日本の百姓は勤勉か。」と問ふ。「さうだ、世界で最も勤勉な人達の中に入ると思ふ。」と云ふと、「さうだらう。日本の人達は皆

強い。決してお世辭ではない。自分がかうやつて山案内をし
ながら會ふ日本人達は、皆勇敢で緻密だ」と云つた。さうだらう。
日本の歴史は古いが精神は若い國民なのだ。



(前正)ソルホクツレシと(前手)ーガイア

少憩後スキーを
穿いて登る。雪面
が風に吹かれて外
殻を作つてゐて、行
進が難儀になる。
案内人が羚羊がゐ
るといふので指さ
れる方を見ると、なるほど三頭鮮かに雪の上に現れた。場所は
シンメリホルンの斷崖の下で、少くとも三百メートルは離れて

シュタイグア
イゼン
雪溪・氷壁等
を踏破するに
用ふる鉄靴
ブリエンツ湖
アール川筋に
あり、面積約
二九方軒
ブリエンツの

町
ブリエンツ湖
畔に位する
インターラー
ケン
ツーン湖とア
リエンツ湖と
の間にある
絶好の避暑地
ツーン湖
アール川筋ア

ある。更に三頭、其の後を追うて雪の斜面に驅出して來た。初
の間は我等を認めなかつたらしいが、そのうちに一頭が岩上に
立つて此方をじつと見る。やがて全群が立止つて此方を見る。
瞬時の後、彼等は雪を蹴つて遠ざかつてゆく。此の六頭の後に
更にまた五頭の一群が岩陰から走り出た。私は屢、羚羊は見た
が、これだけの大群に出會つたのは始めてであつた。

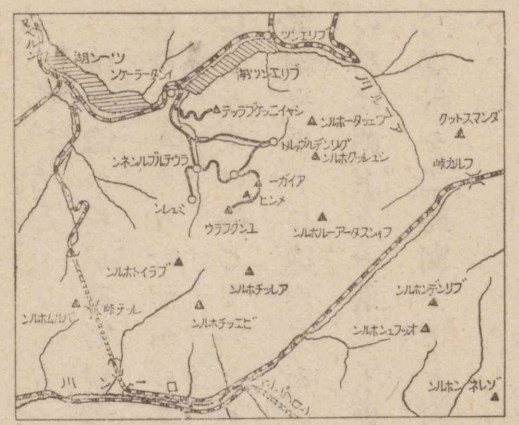
雪のみの世界に何を求めて、彼等はあの様に元氣な生活が出
來るのであらう。自然の力は無限だ。それは氣をつけて見る
者にのみ開かれる驚異の世界である。二人は急な凍つた傾斜
に取附いて、スキーをシュタイグアイゼンに代へて登つた。フ
アウルホルンの頂のホテルの前に立つたのは、眞晝の日盛であ
つたが、固く閉された戸の隅に寒風が徒らに叫喚してゐる。案

リエント湖より下流、面積約四八方軒
ベルン
スウイスの首府
ユラ
フランス中部山地の東側
シュヴァルツアルト
ライン地溝谷に近く森林美を呈する
リギ
ルツェルンの町から鐵道の便があり、沿線の美観は高い
ピラトス

リギと共にアルプス前山の高峰
グリーンデルヴァルト
アルプス中部の都會
インターラーケンから鐵道が通じ、アルプス登山の根據地

内者は一枚戸を破つて入つた。室は戸の隙から吹込む雪で埋つてゐる。少憩の後頂上に立つ。北面二千メートルの崖下ブリエンツ湖が小波一つ寄せず紺青に凝つてゐる。其の東端の西岸にインターラーケンの町を挟んでツーン湖が森々と展開する。案内者はベルンが見えると云ふ。正しく市街の一群が見える。その中に國會議事堂の大きな建物が劃然と認識せられる。透明な大氣だ。少くとも直径五十キロは隔たつてゐるのだ。ユラのゆるい山波も雪を戴いてゐる。其の陰はフランスなのだ。又北東遙かに一群の山脈がある。シュヴァルツアルトだらうと云ふ。其處は獨逸だ。それより近くは、リギのピラミッド形やピラトスの尖つた頂が、雪もなく黒々と聳える。

東から北へ、北から西へかけては、一帶に自分よりは低い。人住む郷の優しい景色である。然し眼を一度南に轉ずると、深いグ



リンデルヴァルトの谷を越えて、ベルナーオーパーランド群峯が高く簇立してゐる。ユングフラウの端正な美しい姿、メシヒの圓頭、アイガーの雪の少い肩を怒らしたやうな固い崖、フィンスターアールホルンの尖塔形の頂、シュレットクホルンの豪壯な威容、その他の山々

が一群して大殿堂の壯觀を展べる。それはあらゆる線の錯綜ではあるが、一線として不愉快な感を與へるものがない。其の

形容の限りを盡くした複雑が、渾然として一つの壯美となつて精神を領する。無音の調律である。それは生命への調律である。

眺は飽かぬが凍傷の恐があるので、長く頂に佇むことを許されぬ。ホテルの前からスキーを穿いて、直滑降する。忽ち鞍部に下り、東に轉じてバツハアルプゼーの湖上に出る。湖面は積雪幾尺の下に凍つてゐて、格好の滑走場となつてゐる。上からの勢は湖上を一過して更に下つて行く。登りに六時間かゝつた場所を二時間で下り、村に歸り着いた。(山行)

高村光太郎
彫刻家・詩人
明治十六年生

三 氷上戯技

高村光太郎

さあ行かう、あの七里四方の氷の上へ。

たたけばきいんと音のする

あのガラス張の空気を破つて、

隼よりもほそく研いだ此の身を投げて、

飛ばう、

すべらう、

足をあげてきりきりと舞はう。

此の世でおれに許された、たつた一つの快速力に

フコ
ハミヤク

鹿子まだらの朝日をつかまう、

東方の碧落を平手でうたう、

眞一文字に風に乗つて、

もつともつともつともつと、

突きめくつて

見えなくならう。

見えないところでゆつくりと

氷上に大きな字を書かう。

(現代詩人全集)

芳賀矢一
國文學者
學博士 昭和
二年 卒、年六
十一

三 色々な言廻し

芳賀 矢一

われわれが平生何の氣もなく使つてゐる言廻しの中にも、よく考へてみれば、随分に面白いことが多い。まづ、身體に關したものを舉げて見よう。

「あの人は頭がいい」「頭がしつかりしてゐる」といふのは、頭腦のよい事で、これは明治以後の新しい言廻しであるから、西洋語を知つた人の使ひ始めた詞であらう。「つぶりを縦に振る」のは承知すること、「横に振る」のは不承知のこと、「頭が高い」といふのは御辭儀の仕方の丁寧でないこと。此等は實際の舉動を言現したのである。

「顔の廣い」といふ事は顔幅の廣いのではない、世間の附合の廣

いこと。附合が廣ければ方々へ顔を出すから、自然にその顔が廣くなるのである。顔は個人の看板の様なもので、お互同士識別するのも顔に依る。嬉しいことも、悲しいことも、いやなことでも、先づ第一に顔にあらはれる。それ故、恥づかしい時には袖で顔を隠したり、顔を背向けて人に見られぬ様にする。「顔が出されませぬ」とか「面目が無い」とかいふのは即ちそれで、古い國語では「おもて伏せ」といつた。それでも平氣であるのを「面の皮が厚い」といひ、「鐵面皮」といふ。「面の皮千枚張」などといふ恐しい形容の語もある。それ故人の言分を通し、その人の意志を承認することを「顔を立てる」といふ。「おれの顔を立ててくれ」といひ、「君の顔に免じてさうしよう」などと話が落着する。之に反して、承知せぬ時は言出した人の「顔が立たぬ」ことになり、「顔が潰れる」こと

にもなる。不名譽の事をすれば自分の顔の潰れるのみではなく、親兄弟朋友の「顔をよごす」。所謂「面よごし」になつて、皆の「顔に泥を塗る」のである。其の外、借りる時の地藏顔「返す時の閻魔顔」「知らぬ顔」泣つ「面」など顔の種類は數限りもなく多い。

顔には目や鼻や口がある。顔の表情は此等のものの助が多い。人間の眼の眼睛は猫のやうに太くなつたり細くなつたりはしないが、喜怒哀樂につれて第一に變化を生ずるのは、やはり目である。情の激しい時には涙といふものが目の中に湧いて来る。それが悲しい時と可笑しい時の兩極端に出るのも不思議ではないか。眠る時には目を塞ぐ。これが人の最も安靜な時である。それ故、目を細くする時は平和な時で、目を怒らす「目に角を立てる」場合などは感情の激越な時である。樊噲が闖を

樊噲
支那漢初の功臣
沛の人
舞陽侯に封ぜられた

カクセイ
キトウアイラク

エンマ

セウリン

排して入つた時は「目眦皆裂く」とある。怒つた時には目が大きくなるから、叱られる方では「大目玉を食ふ」と感ずる。諺に曰く、「目は口程に物を言ふ」と。

鼻は顔の中央に位して、顔の品位を作るのに與つて力がある。あぐらをかいた鼻は低くて上品でない。高いのが上等と思はれたから、自慢することを「鼻にかける」といひ、「鼻を高くする」といふ。少し得意になれば「鼻をうごめかす」といひ、威張る人のことを「鼻の先で人をあしらふ」といふ。「この私が」と鼻を指すのを見ても、個人は或意味に於て鼻を以て代表されるのである。古い軍記物語で「鼻白」といふのはびつくりすること、びつくりすれば鼻が白くなるといふのは、恥づかしい時に顔が赤くなるのと正反對である。「鼻につく」「鼻つまみ」などは嗅覺の官能から出た言廻しである。

口は食物を容れる關門で、同時に言語を發する機關である。

「口に合はぬ」「口が驕る」などは食物の方から言つた詞で、「口が悪い」「口が重い」などは言語に關する慣用句である。「口すぎ」といふのは、實生活の感の滲み出た言葉であるが、「口車」といふ方は如何にも詐偽の多い世の中を眼前に浮かばせる。

「耳を傾ける」といふのは漢語が元で傾聽する様子。「耳を塞ぐ」は聞くを厭ふこと。聞いて心に感動を與へられた場合には「耳立つ」といふ。これは見る時にも同様で「目立つ」といふ語がある。「耳よりの話」といふのは望ましい事を聞いた時にいふ。耳は顔の外に出てゐるから、外氣に觸れ易い。随つて、外方から來る音聲は一番早くはいる。その代り、寒い風などは最も強く感じる。

それ故耳を切るやうな寒さなどといふ。「耳にたこの出来る程聞いたといふのも面白い形容である。

顔は濟んで胸に下る。「胸が痛い」胸がつかへる。精神状態の苦悶は胸に来てあらはれることが多い。やうやう胸が開いた「胸が透いた」はその平癒したのである。胸の中には心臓がある。人の感情は忽ち心臓の鼓動に影響するから昔の人が之を精神作用の本源地と思つたのも無理はない。「胸算用」胸勘定などの語もある。

腹の中には食物を消化する胃腸がある。「腹が減る」腹がふくれるは當然の事であるが、こゝも感情をあらはす處と見られてゐて「腹が立つ」といふ言葉のあるのは面白い。「腹に据ゑかねる」ともいふからその反對に「立つ」といふのがあるのであらう。

の怒が落着くのを「腹がある」といふ。「腹いせ」といつて、日頃の無念を晴らすこともある。膽力といつて、腹の中の膽から元氣が出る」と考へたから、驚くのを「膽を潰す」といふ。

「腹黒」といひ「腹がきたない」といふに至つては、全く精神が腹の中に在ると考へたらしい。笑ふ時に「腹筋をよる」といふのは實際の情態である。又「腹の皮をよる」ともいふ。

「臍で茶を沸かす」といふのもこの類であらう。

(芳賀矢一文集)

芥川龍之介
文學者 俳號
は我鬼 昭和
二年歿、年三
十六

洛陽
支那河南省河
南

三 杜子春

芥川龍之介

或日の日暮です。

唐の都、洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる一人の若者がありました。若者は名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産をつかひ盡くして、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といへば、天下に竝ぶもののない繁昌を極めた都ですから、往來にはまだひつきりなく人や車が通つてゐました。門一ぱいに當つてゐる油のやうな夕日の光の中に、老人の被つた紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱が絶えず流れて行く様子は、まるで畫のやうな美しさです。

しかし、杜子春は相變らず門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空にはもう細い月がうらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思ふ程かすかに白く浮かんでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上どこへ行つても泊めてくれる所はなささうだし、……こんな思をして生きてゐる位なら、いつそ川へでも身を投げて死んでしまつた方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。

すると、どこからやつて来たか、突然彼の前に足を駐めた片目
眇の老人があります。それが夕日の光を浴びて大きな影を門
へ落とすと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へてゐるのだ。」
と横柄に言葉をかけました。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考
へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、
思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、往來にさしてゐ
る夕日の光を指さしながら、

「では、おれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中
へ立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に當る所を夜中に
掘つて見るが好い。きつと車一ぱいの黄金が埋つてゐる筈
だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を上げました。所が、更に不思
議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれ
らしい影も形も見當りません。その代り、空の月の色は前より
も猶白くなつて、休のない往來の人通りの上には、もう氣の早い
蝙蝠が二三匹ひらひら舞つてゐました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持にな

玄宗皇帝
唐の第六代の
天子 名は隆
喜 在位四十
五年 晩年宴
樂を事とした
蘭陵
蘭州 支那甘
肅省の首府
美酒の産地
桂州
支那廣西省

りました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に當る所を夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも餘る位黄金が一山出て來たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けない位贅澤な生計をし始めました。蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉をとりよせるやら、日に四度色の變る牡丹を庭に植ゑさせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂へるやら、その贅澤を一々書いては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

すると、かういふ噂を聞いて、今までは道で行合つても挨拶さへしなかつた友達などが、朝夕遊びにやつて來ました。それも一日毎に數が増して、半年許り經つ内には、洛陽の都に名を知ら

れた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ來ないものは一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に毎日酒盛を開きました。その酒盛のまた盛なことは、中々口には盡くされません。ごくかいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から來た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる藝に見とれてゐると、そのまはりには二十人の女達が、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、何れも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏してゐるといふ景色なのです。

しかし、いくら大金持でも、お金には際限がありませんから、さすがに贅澤家の杜子春も、一年二年と經つ内には、だんだん貧乏になり出しました。さうすると、人間は薄情なもので、昨日迄は毎

日來た友達も、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り一文無しになつて見ると、廣い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は一軒もなくなつてしまひました。いや、宿を貸す所か、今では腕に一杯の水も恵んで呉れるものはないのです。

そこで、彼は或日の夕方もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方にくれて立つてゐました。

すると、やはり昔のやうに片目眇の老人がどこからか姿を現して、「お前は何を考へてゐるのだ。」と聲をかけるではありませんか。杜子春は老人の姿を見ると恥づかしさうに下を向いた儘、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切さうに同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、

「私は今夜泊る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」

と恐る恐る返事をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。では、おれが好いことを教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に當る所を掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋つてゐる筈だから。」

老人はかう言つたかと思ふと、今度も亦人ごみの中へ掻消すやうに隠れてしまひました。

杜子春はその翌日から忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に、相變らず仕放題の贅澤を始めました。庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見

せる天竺から来た魔法使、……すべてが昔の通りなのです。
ですから、車に一ばいあつたあの夥しい黄金も、又三年ばかり
経つ内にはすつかりなくなつてしまひました。

三

「お前は何を考へてゐるのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問ひかけ
ました。勿論彼はその時も洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞
を破つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んでゐたの
です。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つ
てゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。では、おれが好いことを教へ

てやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つた
ら、その腹に當る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に
一ばいの……」

老人がこゝまで言ひかけると、杜子春は急に手を舉げて、其の
言葉を遮りました。

「いや、お金はもういらぬのです。」

「金はもういらぬか？は、あ。では、贅澤をするのはとうとう
飽きてしまつたと見えるな。」

老人は不審しさうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を
見つめました。

「なに、贅澤に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛
想がつきたのです。」

トシケイ

杜子春は不平さうな顔をしながら、突堅食にかう言ひました。「それは面白いな。どうして又人間に愛想がつきたのだ。」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には世辭も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。優しい顔さへも見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた處が、何にもならないやうな氣がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、にやにや笑ひ出しました。

「さうか。いやお前は若い者に似合はず感心に物のわかる男だ。では、これからは貧乏をしても安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。が、すぐに思ひ切つた眼

を上げると、訴へるやうに老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから、私はあなたの弟子になつて、仙術の修行をしたいと思ふのです。いゝえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の中に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙つて何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又にこりと笑ひながら、

「いかにも、おれは峨眉山に棲んでゐる鐵冠子といふ仙人だ。初めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好ささうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりた

カレン

峨眉山
支那四川省嘉
定府峨眉縣の
南方
鐵冠子
作者假作の名
であらう

ければ、おれの弟子にとり立ててやらう。」

と、快く願を容れてくれました。

杜子春は喜んだの喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鐵冠子に御辭儀をしました。

「いや、さう御禮などは言つて貰ふまい。いくらおれの弟子にした處が、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。……が、兎も角もまづおれと一緒に峨眉山の奥へ来て見るが好い。お、幸ひこゝに竹杖が一本落ちてゐる。では、早速これに乗つて、一飛びに空を渡るとしよう。」
鐵冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に呪文を唱へながら、杜子春と一緒にその竹へ、馬にでも乗るやうに

跨がりました。すると、不思議ではありませんか、竹杖は忽ち龍のやうに勢よく大空へ舞上つて、晴渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞下りました。

そこは深い谷に臨んだ幅の廣い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が茶碗程の大きさに光つてゐました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと靜まり返つて、やつと耳に這入るものは、後の絶壁に生えてゐる曲りくねつた一株の松が、ごうごうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上へ來ると、鐵冠子は杜子春を絶壁の下に坐

らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母に御目にかゝつてくるから、お前はその間こゝに坐つて、おれの歸るのを待つてゐるがいい。多分おれがゐなくなると、いろいろな魔性が現れてお前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して聲を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人になれないものと覺悟をしてゐろ。好いか、天地が裂けても黙つてゐるのだぞ。」

と言ひました。

「大丈夫です。決して聲などは出しません。命がなくなつても黙つてゐます。」

「さうか。それを聞いておれも安心した。では、おれは行つて

くるから。」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨がつて、あの削つたやうな山々の空へ、一文字に消えてしまひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つたまゝ、靜かに星を眺めてゐました。すると、彼は半時許り立つて、深山の夜氣が肌寒く薄衣着物に透り出した頃、突然空中に聲あつて、

「そこにあるのは何物だ。」と叱りつけるではありませんか。しかし、杜子春は仙人の教通り、何とも返事をせずにおりました。所が、又暫くすると、やはり同じ聲が響いて、

「返事をしないと立所に命はないものと覺悟をしろ。」

といかめしく嚇しつけるのです。

杜子春は勿論黙つてゐました。

どこから登つて来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一聲高く哮りました。のみならず、それと同時に、頭の上の松の枝が烈しくざわざわ揺れたと思ふと、後の絶壁の頭からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

しかし、杜子春は平然と眉毛も動かさずに坐つてゐました。

虎と蛇とは一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺ふのか、暫く睨み合ひの體でしたが、臆てどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬く内になくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯絶壁の松がさつきの通り、ごうごうと枝をならしてゐるばかりなのです。杜子春は

ほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、と心待ちに待つてゐました。

すると、一陣の風が吹起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりをとざすや否や、薄紫の稻妻が矢庭に闇を二つに裂いて、凄まじく雷が鳴り出しました。いや、雷許りではありません。風の音、雨のしぶき、それから絶間ない稻妻の光……暫くはさすがの峨眉も覆るかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんざく程大きな雷鳴が轟いたかと思ふと、突然渦巻いた黒雲の中から、眞赤な一本の火柱が杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思はず耳をおさへて、一枚岩の上へ平伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴渡つて、向ふに聳えた山々の上にも、茶碗程の北斗の星がやはりきらきら輝いて

「あます。してみれば、今の大嵐も、あの虎や白蛇と同じ様に、鐵冠子の留守をつけこんだ魔性の悪戯に違ひありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭ひながら、又岩の上に坐り直しました。が、その溜息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあらうといふ嚴かな神將が現れました。神將は手に三叉の戟を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を瞋らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一體何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢の昔からおれが住居をしてゐる所だぞ。それを憚らず、たった一人こゝへ足を踏入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ、命が惜しかつたら一刻も早く返答しろ。」

と言ふのです。

しかし、杜子春は老人の言葉通り、默然と口を噤んでゐました。「返事をしないか……しないか。好し。しなければしないで勝手にしろ。その代り、おれの眷屬たちがその方をずたずたに斬つてしまふぞ。」

神將は戟を高く舉げて、向ふの山の空を招きました。その途端に闇の幕がさつと裂けると、驚いたことには、無数の神兵が雲の如く空に充ち満ちて、それが皆槍や刀をきらめかしながら、今にもこゝへ一なだれに攻寄せようとしてゐるのです。

この景色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうになりましたが、すぐに又鐵冠子の言葉を思ひ出して、一所懸命に黙つてゐました。神將は彼が恐れないのを見ると、怒つたの怒らないの

ではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ約束通り命を取つてやるぞ。」

神將はかう喚くが早いか、三叉の戟を閃かして、一突に杜子春を突殺しました。さうして、蛾眉山もどよむ程からからと高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひました。勿論この時は無数の神兵も、吹渡る夜風の音と一しよに夢のやうに消えうせた後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に變らず、ごうごうと枝を鳴らしてゐますが、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

五

杜子春の體は岩の上へ仰向けに倒れてゐましたが、彼の魂は靜かに體から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には閻穴道といふ道があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がびゅうびゅう吹荒んでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉の様に空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取巻いて階の前へ引据ゑました。階の上には一人の王様が眞黒の着物に金の冠を被つて、厳しくあたりを睨んでゐます。これは豫て噂に聞いた閻魔大王に違ひありません。杜子春はどうなるかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いてゐま

地獄

三惡道の一

上品ぼんの十惡を作つた者の赴く所 地下にあるといふ

閻穴道

昔支那で重罪の者が果羅の國へ流される時に通つたといふ閻黑の道 此處では地獄への道といふ

森羅殿

作者假作の名であらう

鬼

こゝでは地獄の獄卒をいふ

閻魔

梵語 縛と譯

した。

「こら、その方は何の爲に峨眉山の上に坐つてゐた。」

閻魔大王の聲は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速其の間に答へようと思いましたが、ふと思ひ出したのは、決して口を利くな。といふ鐵冠子の戒の言葉です。

そこで、唯頭を垂れた儘、啞のやうに黙つてゐました。すると、閻魔大王は鐵の笏を舉げて、顔中の鬚を逆立てながら、

「その方はこゝをどこだと思ふ。速に返答すれば好し、さもなければ時を移さず地獄の呵責に遇はせてくれるぞ。」

と威丈高に罵りました。が、杜子春は相變らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を見て荒々しく何か言附けると、鬼どもは一度に畏まつて、忽ち杜子春を引

立てながら森羅殿の空へ舞上りました。

地獄では誰でも知つてゐる通り、劍の山や血の池の外にも、焦熱地獄といふ焰の谷や、極寒地獄といふ氷の海が、眞暗な空の下に竝んでゐます。鬼共はその地獄の中へ代る代る杜子春を抛りこみました。ですから、杜子春は無慙にも、劍に胸を貫ぬかれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鐵の杵に搗かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、……その苦しみを數へ立てては到底際限がない位、あらゆる責苦に遇はせられたのです。それでも、杜子春は我慢強くじつと齒を喰ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも呆れ返つてしまつたのでせう。

もう一度夜のやうな空を飛んで森羅殿の前へ歸つて來ると、さ
つきの通り杜子春を階の下に引据ゑながら、御殿の上の閻魔大
王に

「この罪人はどうしても、ものを言ふ氣色がございません。」
と口を揃へて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐました。が、臆
て何か思ひついたと見えて、

「この男の父母は畜生道に落ちてゐる筈だから、早速こゝへ引
立てて來い。」

と一匹の鬼にいひつけました。鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空
へ舞上りました。と思ふと、又星が流れるやうに二匹の獸を驅
り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて來ました。その獸を

畜生道
三惡道の一
下品の十惡業
を作つた者の
赴く所

見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかと
いへば、それは二匹とも形は見すばらしい瘦馬でしたが、顔は夢
にも忘れない死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてゐたか、まつす
ぐに白狀しなければ、今度はその方の父母に痛い思をさせて
やるぞ。」

杜子春はかう嚇されてもやはり返答をせずにはゐました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都
合が好ければよいと思つてゐるのだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄まじい聲で喚きました。

「打て、鬼共、その二匹の畜生を。肉も骨も打碎いてしまへ。」

鬼共は一齊に「はつ」と答へながら、鐵の鞭をとつて立上ると、四

方八方から、二匹の馬を何の容赦もなく打ちのめしました。鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず馬の皮肉を打破るのです。馬は、……畜生になつた父母は、苦しうに身を悶えて、眼には血の涙を浮かべた儘、見てもゐられない程、嘶き立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか。」

閻魔大王は鬼共に暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬は、肉は裂け、骨は碎けて、息も絶え絶えに階の前へ倒れ伏してゐたのです。

杜子春は必死になつて、鐵冠子の言葉を思ひ出しながら、緊く眼をつぶつてゐました。すると其の時彼の耳には殆ど聲とはいへない位、かすかな聲が傳はつて來ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せ

になれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰しやつても、言ひたくないことは黙つて御出で。」それは確に懐かしい母親の聲に違ひありません。杜子春は思はず眼をあきました。さうして、馬の一匹が力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へじつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを怨む氣色さへも見せないのです。大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健氣な決心でせう。杜子春は老人の戒も忘れて、轉ぶやうにその側へ走りよると、兩手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、

「お母さん。」

と一聲叫びました。……その聲に氣がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下にぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶間ない人や車の波、……すべてがまだ峨眉山へ行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になつた處が、とても仙人にはなれは
しまい。」

片目眇の老人は微笑を含みながら言ひました。

「なれませんが、なれません。がしかし、私はなれなかつたことも、
却つて嬉しい氣がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮かべたまゝ、思はず老人の手を握り
ました。

「いくら仙人になれた處が、私はあの地獄の森羅殿の前に鞭を
受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる譯には行きません。」

「もしお前が黙つてゐたら、……」

と、鐵冠子は急に嚴かな顔に、じつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、即座にお前の命を絶つてしまはう
と思つてゐたのだ。……お前はもう仙人になりたいといふ望
も持つてゐまい。大金持になることは元より愛想がつきた
筈だ。では、お前はこれから後何になつたら好いと思ふな。」

「何になつても、人間らしい正直な暮しをするつもりです。」

杜子春の顔には、今までにない晴れ晴れした調子が罩つてゐ
ました。

「その言葉を忘れるなよ。では、おれは今日かぎり二度とお前

泰山
山東省泰安府
城の北にあり
支那五嶽中の
東嶽

に遇はないから。」

鐵冠子はかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を駐めて、杜子春の方へ振返ると、

「お、さいはひ今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」

と、さも愉快さうにつけ加へました。(夜來の花)

三 村を復興させた話

武者小路實篤

武者小路實篤
小説家 明治
十八年生
二宮尊徳
通稱金次郎
報徳教の祖
安政三年(二
五一六)歿、
年七十

常陸國眞壁郡
青木村
茨城縣眞壁郡
の村 今は同
郡大國村の一
字
櫻町
栃木縣芳賀郡
物部村字物井
の内の小字

二宮尊徳は實行の人である。彼の言葉の前には實行がある。そして、その實行の前には信念がある。言葉も實行もこの信念から出てゐる。しかし、その信念も亦實行から得たものである。彼を知らうと思へば、彼の言葉を見ると同時に、その實行を見なければならぬ。しかし、彼が地上に遺した仕事は實に多いので、その一々をこゝに書くことは出来ない。

こゝでは彼の成就した仕事のうち、一番簡單明瞭に成功したものを書いて、それについて、僕の考へてゐることを書かうと思ふ。それは、彼が常陸國眞壁郡青木村を復興させた話である。

彼はそれより以前に、十年かゝつて櫻町を復興させた。それ

成田
成田不動眞
言宗智山派の
別格本山新勝
寺の俗稱 千
葉縣印旛郡成
田町にある

は随分の難事業で、何度かしくじりかけたが、さすがに彼である。成田に斷食をしたりして、とうとう櫻町を復興させた。しかし、それには十年を要した。この十年の苦心こそ、彼にいろいろの事を教へた。どうすればいゝかがはつきりわかつた。勿論、又ちがふ苦心も彼を待つてはゐたが、彼はそれをも彼らしく切りぬけてゆく。彼は死ぬまでに、どの位多くの廢村を救つたかわからない。

彼にとつて、櫻町を救つたことが苦心に苦心して畫きあげた勞作とすれば、青木村を救つたことは小品のやうなものである。が、それだけ彼の特色があざやかに出てゐて、胸のすくやうなところがある。

青木村は、幕府の旗本の川副勝太郎といふ人の領の、八百五十

櫻川
茨城縣西茨城
郡の西北方に
發して南流し
霞ヶ浦に注ぐ

石高の土地で、元祿頃には百三十戸の家があつたが、當時はすっかりさびれて、戸數は二十九戸に減つてゐた。それは、その村の水田に流れ込む櫻川が、時々水を出して田畑を荒すので、土地の人にも自暴自棄になつたためだつた。誰かが、この村のことを「家ありやすゝきの中の夕烟」と俳句につくつたさうだが、實際その通りの有様だつた。

そこで、名主の館野勘右衛門が心配して、どうしたらいゝか考へた結果、櫻町を復興させた尊徳に教を乞ふより仕方がないと思つた。そして領主に相談した。領主もよろこんで、用人の竝木柳助をつけて尊徳を訪ねさせた。

尊徳といふ人は、いつも安請合はしない人なので、この時も、自分には暇がないと云つて斷つた。しかし、館野は前から噂を聞

いてゐたから、斷られる位で参りはしなかつた。そして、是非救つてほしいと嘆願した。館野の誠意を知つた尊徳は、青木村の人々が田地の荒廢してゐるのをいゝことにして、畑もろくに耕さず、酒や博奕にふけてゐるのを責め、そんな自業自得な村は救ふことは出來ないと云つた。館野達は恐縮したが、しかし益尊徳を信じて、どんな苦勞にも堪へるから救つてくれとたのんだ。

そこで尊徳も、氣をかへて、そんなにまでも云ふなら、そしてどんな苦勞も辭さないと云ふなら、私のために一つやさしいことをしてほしいが、やつてくれますか。」と云つた。

「どんな苦勞もいとひません。ましてやさしいことならよるこんでします。」名主は尊徳が何を云出すかと考へた。他の人も

尊徳の次の言葉を待つた。

所が尊徳は「それなら、歸つてあなたの村の内の茅を残らず刈つて下さい。私にはそれが入用なのですから、價を倍にして買ひませう。」と云つた。

名主達は驚いたが、話がうまいので、よろこんで歸つて、村中の男女、老若が集つて茅を刈つた。刈りも刈つた、千七百七十八駄の茅を刈つた。

名主はその由を尊徳に云ふと、尊徳は氣持よく金を拂つて、そしてその茅で青木村の神社や寺や民家の家根をすつかり葺きかへさせた。今までは草だらけの中に古屋根が黒ずんで見えてゐた、それも、殆ど全部雨漏のするやうな家ばかりだつた村が、すつかり面目を新にしたのだから皆驚いた。

そこで村の人達は大喜びをし、名主を始として、尊徳の處にお禮に来て、「これからどうしたらいいのですか。」と聞いた。

尊徳は改つて、「あなた達はやさしいことをして、屋根の雨漏をふせぎ、野火の心配を助つたら、それでいい、でせう。これからは仕事かむづかしくなるから、到底あなた方には出来ないと思ひます。やめた方がいい、でせう。」と云つた。

さう云はれてやめる馬鹿はない。村の人達は泣いてたのんだ。そこで尊徳は、「それ程まで云ふなら、田の荒れたのを開墾なさい。それが出来たら私がいゝやうにしてあげる。」と云つた。

村民は、一所懸命になつて開墾した。それは樂な仕事ではなかつたが、段々開墾されてゆくことは愉快なことだつた。しかし、村の人達は、水の出る時のことを考へると心配になつた。こ

んなこととしても骨折り損のくたびれまうけになるのではないか。が、彼等は尊徳を信じてゐた。尊徳はこの有様を見て喜んだ。

「今まで君達は怠けものだつた。が、心がけ一つでこんな勤勉な人間にもなれるのだ。君達がこんな立派な働手になれば、私は一つ君達のために堰をつくつて、洪水の心配がなく、灌漑がよくゆくやうにして上げよう。」

尊徳は青木村に行つて、地勢を見、東山に登つて地質を調べ、山腹に石があることを見出した。そして村の人に云つた。

「出来るだけ大きな石と大きな材木を早く川岸へ運ぶやうにして下さい。途中で出水でもあつたら無駄になるから、非常な努力をして下さい。」

31 32 33

しかし、尊徳はたゞ努力をしろとは云はなかつた。彼はよく人間の心を知つてゐる。彼は次いでかう云つた。

「役夫の勞銀は、平日なら一日米二升二合、錢二百ですが、今回は特に一日金二朱を給し、力の足りない者には一朱を與へる。怠け者は直ぐに除くことにする。」

尊徳は毎日櫻町から出て來て、酒や餅を與へた。そして、上戸は酒を飲むがいい、下戸は餅を食ふがいい。しかし、大酒をして亂れてはいけない。そして、疲れた者は半日の賃を得て歸つて休むがいい。」と云つた。

人々は喜んで「極樂普請」と云つた。だから、仕事は實にはかどつて、大木・巨石がどしどし指定された川岸へ集つた。尊徳はその大木で、昔の堰のあつた所に川幅一ぱいの大屋根を水上に作

らせた。水の上に大きな家根が出來た。出來上ると、尊徳は「誰か屋根に乗つて繩を切つて家根を沈めるやうに」と云つたが、誰も恐れて家根に乗るものはなかつた。そこで尊徳は、自分で屋根に上り、繩を切つて家根を川に沈めた。人々は驚いたが、尊徳は平氣な顔をして「危険なことを誰が命令するか」と云つた。そして、家根から下り、石や木を其の上に投げさせ、それを基礎として堰を作り、灌漑と洪水の時の用心の爲に閘門二個を設けた。皆の作つた田に水が氣持よく流れ込んだ。人々は歡呼した。それから青木村の經營法をきめ、その通り實行させたので青木村は救はれた。

これは有名な話だ。しかし、何度聞いても氣持のいゝ話である。

この話から我々が教へられる點について少し考へてみたい。尊徳が實行的に偉いのは、安請合しないことである。もし安請合したら、青木村の人の決心は強まる暇がなかつたらう。先づ第一に、尊徳は青木村の人々の心がけを直さうとした。そして、その爲に安請合はしなかつた。實際、棚からぼた餅が落ちてくるやうに、尊徳の救を待つてゐたのだつたら、いかに尊徳が偉くてもどうすることも出来なかつたであらう。だから、青木村の人々の熱心が本當にわかるまで、彼は手を下さなかつた。時の熟するのを待つてゐたのだ。

これは當然なことだが、中々出来にくいことだ。しかし彼が斷るのは、人々の決心がどの位強いかを知るためであつて、働くのは面倒だとか、厄介だとか、損するからいやだなどといふ考で

は勿論ない。尊徳はそんな考をする人とは根本的にちがふ。彼は人々が安樂に生活出来るやうになることだけを考へてゐる。自分のことは考へる必要のない、力強い男だ。救世のことにきり考へない、珍しい男だ。だから斷るのにも、不純な動機は少しもない。實際だめだと思ふから斷つたのだ。安請合したら、必ず不成功にきまつてゐたらう。

ところが、青木村の人々も感心だつた。尊徳の心持をよく知り、この人より他に救つてくれる人はないことを知つてゐた。だから、斷られても腹を立てず、ますます信頼して、どんな勞苦も辭さないから救つてくれといふ決心を見せた。

そこで、尊徳は先づ、やさしい方面から話をすゝめた。彼は青木村を見たことがあつたにちがひない。或は話を聞いたのか

も知れないが、どうも見たことがあつたのだと思ふ。彼は青木村の人々が茅が澤山あるのに、それをすてておいて利用しないで、村の神社や住居を雨もりさせて平氣であるのがまちがつてゐることに、氣がついてゐたにちがひない。彼の言葉に「人界に居て家根のもるを坐視し、道路の破損を傍觀し、橋の朽ちたるをも憂へざる者は、即ち人道の罪人なり。」といふのがあるが、青木村の人々はまさしくこの「人道の罪人」にちがひない。それで彼は茅を刈れと云つた。しかも、理由はわざと云はなかつた。始から説教はしなかつた。始から説教したら、人々は内心不服に思ひ、効果は決して上らなかつたらう。彼はその點實に賢かつた。茅を買ふと云ふのだ。捨ててあるものが金になるのだ。彼の歌にかういふのがある。

むかしより人の捨てざるなき物を拾ひ集めて民に與へん

この和歌の意味は、二宮翁夜話をよんだ人ならわかるが、一寸聞いただけでわかる人は少いと思ふ。尊徳の弟子にもよくわからない人があつて、

「この捨てざるなき物を捨てたる物とした方がいゝでせう。」と云つた。この「捨てざるなき物」が尊徳の一番大事なところだから、尊徳は云つた。「その時は人が捨てなければ拾へないでせう、それでは甚だ狭い。實に本當である。聞いた人はぎやふんと参つたにちがひない。それなら「捨てざるなき物」とはどう云ふものか。尊徳に云はせると「第一が荒野、第二借金の雜費と暇つぶし、第三富者の驕奢、第四貧しき者の怠惰」等だ。そして青木村の

茅や青木村の人の怠惰なども捨てざるなき物で、この茅を買いあつめて家根をすつかり直したのは、この歌の精神をそのまゝ實行したことになる。

青木村はその結果、面目を一新した。同時に青木村の人々の心も何となく新しくなり、何かしたくなつて來たにちがひない。そこで、今度は田の開墾をさせ、それから水利の方に力を盡くさせた。その盡くさせ方が、又實に賢い。實際から云へば、青木村のために働くのだから、金をやる必要がないと云へば、それで理窟は通るのである。それなのに、賃金を却つて多くやる。その労働のさせ方にも、少しも無理や強制はしない。身體のわるい人は休めばいいのだ。それでゐて仕事ははかどり、全體の費用は他の人がやる半分もあればすむことになる。尊徳といふと

「儉約一方の人」のやうに思つてゐる人があるやうだが、彼はそんな化石した、融通のきかない男ではない。生きた金のつかひ方を心得てゐる人間だ。それ以上人間の心の動きを知り、喜んで働かせる呼吸をのみこんでゐる人間だ。しかも、それは利己的な動機からでは全然ない。村の爲である。人々の爲である。彼は青木村を救ふだけで満足することは出來ない。次ぎ次ぎと彼の力を要する仕事が続つてゐた。彼にとつて、青木村を救つたことは、鶏が一つの卵をうんだやうなものだ。しかし、その卵は何と美しいことか。(空海及其他)

三 野口英世

野口英世
 醫學博士 理
 學博士 ロッ
 クフェラー研
 究所正員 昭
 和三年歿、年
 五十三

桑港
 アメリカ太平
 洋岸にある港
 フィラデル
 フィア
 アメリカ大西
 洋岸にある都
 會

フレキシナー
 教授
 當時ペンシル
 ヴニア大學
 の病理學主任
 教授

海洋無事船は十八日にして桑港に着いた。時は明治三十三年、即ち西曆千九百年十二月二十二日の早朝、英世二十五歳の冬であつた。幾春秋憧れの的であつたアメリカの大陸に、今や彼は生涯に記念すべき第一歩を印したのであつた。

汽車で五晝夜、英世はまづフィラデルフィア在のペンシルヴニア大學にフレキシナー教授を訪ね、大學の助手に採用され度いと申し出た。萬里の異境から遙々と自分を頼つて來たこの青年の熱心に動かされた教授は、何とかして適當な地位を得させたいと種々盡力したが、學則上、外國人を直ちに採用するわけにはゆかなかつた。たゞさへ歳末に迫つた匆忙たる雰圍氣

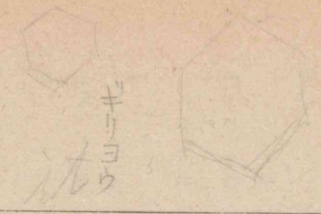
のなかに、渡米最初の希望を打碎かれ、行くに處を失つた彼の困惑と焦燥とは、見るもいたましい程であつた。しかも、この時囊中には僅かに二十餘弗を餘すのみであつた。



野口英世肖像

然るに、その年も押詰まつた三十一日の夜、教授は英世を呼んで、大學の方が駄目になつた上は、取敢へず、自分の助手として蛇毒の研究をしてはどうかと、親切に提言した。嘗て故國にあつた時ハブの研究に興味をもつたことのある彼は、喜んでこれを承諾し、翌年一月四日から、大學構内にある同教授の研究室に隣り合はせた小さい一室を與へられ、そこで研究することとなつた。

ミツチエル博士
當時費府醫學
會頭



間もなく教授は、桑港のペスト防滅の大任を引受けて同地に出張した。この間英世は教授の紹介により、蛇毒研究の大家ミツチエル博士から種々の指導を受け、深く博士から信愛せられるに至つた。英世は教授の留守中に何か新しい研究結果を得て教授の親切に報いたいと、彼特有の異常な熱心と根氣とを以て、日夜研究に精勵した。教授は三ヶ月後、大任を果して歸つて來たが、不在中の彼の新助手の研究成績を見て、その非凡な學識と伎倆とに少からず感嘆し、満足した。教授の同情は信任に變つた。

この報告論文の摘要が、ナショナルアカデミーオブサイエンスといふ米國科學研究會の機關雜誌に掲載せられるや、米國學界の注目するところとなり、米國科學研究會から、向ふ一ヶ年二

フタリ
ヨウライ

千弗の研究費が支出されることに決定し、次いでカーネギー研究所からも、約二ヶ年に亙り獎勵費が出ることになつた。

英世が學者としての地位はかく著しく高められて行つたが、彼がフレキシナー教授の助手として受ける手當は、月々二十五弗に過ぎなかつた。——科學研究會やカーネギー研究所から研究費を支給されるといつても、それはもとより私生活に費すべき性質のものではなかつた。——従つて、彼の生活は文字通りパンと水との簡素極まるもので、時にはそのパンにさへ事缺くことがないではなかつた。日本から着て行つた一張羅の洋服は、摺り切れて所々下着が見えるに至つた。しかしながら、物質的窮乏は豫て覺悟して來たところであるから、全く意に介せず、寧ろ狭いながらも一室を與へられて、朝から晩まで自由に研究に

サマエモ
ズル

ムクセル
ズル

ハナナ
ミナキ

耽ることが出来るのを何よりの喜とし、生來の根強さと勝氣とを以て一意科學研究の三昧境を邁進した。

かくて英世は、フレキシナー教授の助手として、後にはペンシルヴァニア大學助手として、蛇毒の研究に従事すること三年の間に、これに關するあらゆる實驗を遂げて、世界に於ける蛇毒の研究は、彼によつて殆ど征服し盡くされた觀があつた。この功績に酬いる爲に、カーネギー研究所では、彼を海外研究員に推薦した。

ヨーロッパに渡つた英世は、デンマークに直行し、國立血清研究所に入つた。獨逸はその頃各國から留學生が入込んで、煩瑣な空氣が漲つてゐたので、彼は閑靜にして當時血清學に新境地をもつてゐたデンマークを選んだのであつた。こゝにも彼が

時流に追從せず、超然として自己の研究道を歩む自信が見られる。

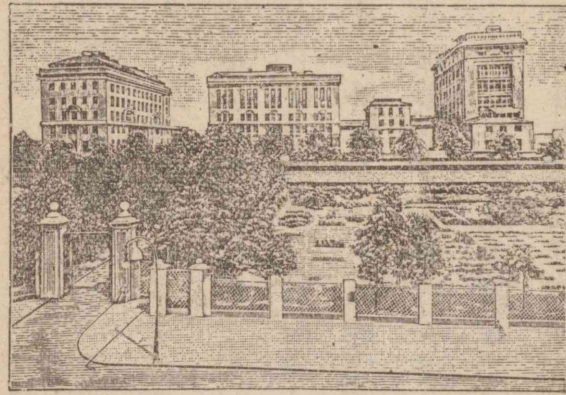
コペンハーゲン
デンマークの
首府

ネンコロ

ニューヨーク
アメリカ東海
岸にある都會
セムス

血清研究所はコペンハーゲンにあつた。この研究所に外國人の留學したのは、彼が最初であつたので、非常な好意をもつて、萬事に親切な指導を與へられた。殊に所長アレニウス・マドセン博士が懇に彼を導いてくれた。彼が生涯の研究の上に貴重な習慣となり、大研究完成の一要素となつた「仕事を正確にする觀念」を深く植込んでくれたのも、このマドセン所長であつた。彼が歐洲から歸ると、富豪ロックフェラー氏の美舉によつて、醫學研究所設置の計畫が進められてゐた。ロ氏はこの計畫の最初の資金として百萬圓を支出し、ニューヨーク市の一角に建物を借り受け、その初代の所長としてフレキシナー氏が招聘さ

れることになり、茲にロックフェラー醫學研究所の創設を見るに至つたのである。



所究研學醫—ラエフクッロ

究結果が世界人類の爲に寄與するところの多かつたのを見た

ロ氏は、引續き多額の維持費の支出を申し出で、研究題目の範圍は益、擴大し、建物の改築、所員の増加等、内容外觀共に大いに完備されるに至つた。

千九百七年、三十二歳にして英世はペンシルヴァニア大學からマスターオブサイエンスの學位を受け、又この年ロックフェラー研究所のアツソシエイトに進んだが、千九百九年、更にアツソシエイトメンバーに昇進し、千九百十四年、遂に正員メンバーの位置を獲得した。この時を以て彼が學界に於ける地歩は確立されたのである。助手として研究所に入つてから僅かに十一年、英世三十九歳の時である。又この間に明治四十四年(一九一〇)には、京都帝國大學から醫學博士の學位を授けられ、更に大正三年(一九一四)には、東京帝國大學から理學博士の學位を授け

られた。

しかし、われわれは彼の成功の早きを驚くには及ばない。それよりも、この短日月の間に百餘種の新研究を完成し、他の學者が生涯を以てしても成し得ない程の廣汎深遠な研究發見を成し遂げた彼の智力と根氣こそ、驚異に價する。

爾後十四年、即ち千九百二十八年、彼五十三歳にして、黃熱病研究の犠牲となり、西アフリカに於て英雄的な死を遂げるに至るまで、彼は他の便宜有利な地位への懇請を悉く退けて、舊師フレキシナー博士の下で、ロックフェラー研究所の爲に、一身を捧げて研究に従つた。その間、熱性黃疸、オロヤ熱、トラホーム等に關する研究に於て、世界を驚かす功績を立て、或はエクアドル國賓となつて黃熱病原體を發見する等、眞に世界的學者として、人類

の福祉に貢獻するところが少くなかつた。

英世逝去の翌日、ロックフェラー研究所では、日米兩國の半旗を掲げて哀悼の意を表し、世界の學界は對して左の如き聲明書を發した。

細菌學者野口英世の死によつて、我がロックフェラー研究所はその最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最も敬愛せられたる共働者を失ひしことを、世界全人と共に痛惜す。

彼はかく世界の英世であつた。しかし、彼は世界學界に大をなせばなす程、益、故國を慕ひ、日本人たるの自覺を深めて行つた。而して、その存在は直接間接に、わが國民の海外に於ける地位と名譽とを向上せしめる上に偉大なる貢獻をなした。彼は身を

以て學問に國境なきことを立證した眞個の學者であつたと共に、又日本魂の威力を世界に向つて發揚した國民的勇者であつた。彼の死が上聞に達するや、畏き邊からは勳二等に敘せられ、旭日重光章を授けられた。天壽を完うするに至らなかつた彼の死は、たとひ研究に一身を捧げた學者の最期にふさはしいものであるとはいへ、わが國は勿論、世界學界のために眞に惜しむべき損失であるといはねばならぬ。

(橘 輝政著、野口英世博士傳による)

如何なる逆境に陥るとするも満心の平和は決して擾亂する事なし。只管一瞬間を誠實にやる事のみが秘訣に御座候。

(野口英世書簡)

三 勿來の關

岡 本 綺 堂

寛治二年の春の末、奥州、勿來の關。

上のかたに寄せて、荒れたる關屋あり。關といふは名のみにて、今は著しく荒れたるさま見ゆ。關屋に沿うて形ばかりの關の戸あり。正面より下のかたへかけては砂白き濱邊にて、近く碧海を見る。關の戸に沿うて櫻の大樹あり。下のかたには磯馴松にまじりて櫻の立木あり。花は散りて雪の如くに敷けり。(遠寺の鐘聞ゆ。八幡太郎義家は弓を持ちて馬に乗り、安倍宗任は口をとりて従ふ。續いて佐伯次郎經正、大原六太夫則明、伴七郎助兼鎌倉權五郎景政、ほかに白旗を持ちたる軍兵等大勢従ふ。いづれも後三年の役當時の武裝なり。)

宗 任 關守やある。八幡殿のお通りであるぞ。(呼ぶ。)

岡本綺堂

名は敬二、劇作家、昭和十四年歿、年六十八

寛治二年

堀河天皇の御代(一七四八)

勿來の關

福島縣石城郡窪田村大字關田にあつた關

八幡太郎義家

源頼義の長子

天仁元年(一七六八)歿、年六十八

安倍宗任

陸奥の豪族、安倍頼時の次子

後三年役

清原氏叔姪勢

力を争つて奥羽は亂れた。義家は眞衡を授けて武衛・家衡を滅した。應徳三年（一七四六）から寛治元年（一七四七）に至る。

貞任征伐
前九年の役をいふ。安倍頼時の子貞任・宗任と共に叛いた。源頼義これを討ち、頼時・貞任を誅し、宗任を降した。天喜四年（一七二六）から康平七年（一七二四）に至る。

武衛
前九年の役に戦功のあつた清原武則の次子
家衡
清原武則の孫
眞衡の異母弟

（關守の翁、姫、孫娘、わらべ等、出で來りて迎へる。）

翁 關の者一同御出迎を仕りましてござりまする。

（義家は馬を下りて、家來に持たせたる床几にかゝる。家來どもはその左右に居並ぶ。）

義家 その昔、貞任征伐の砌にも、上り下りにこの關を越えたることあり。弓矢とる身の是非なさは、歌枕見る風流の旅にはあらで、物の具いかめしう身をかためて、再び陸奥へ向ふのぢや。關守の翁は義家を見識つてをらうな。

翁 よう存じてをりまする。大將にはいつもお變りもあらせられず、憚りながらおめでたう存じ上げまする。

義家 翁も堅固で重疊ぢや。が、別れて年をふるまゝに、關屋の廂も荒れはてて、關守の額も翁さびたわ。たゞ變らぬは關の

七二四）に至る

戸の山櫻、昔ながらに咲きにほうてゐるなう。

翁 その櫻もこの頃は潮風が荒いので、年々に枯れるばかりでござりまする。いや、かう申す翁も、姫も、潮風と年波とで、やがて枯れるかも知れませぬ。はゝゝゝ。

義家 姫もすこやかに見ゆるではないか。

姫 （進み出づ。） はい、幸に達者に暮してをりまする。あの時のいくさは九年も續いたとか承りましたが、今度もそのやうに續きませうか。

義家 それは義家にもわからぬが、敵は名に負ふ武衛・家衡ぢや。一年や二年では濟むまいぞ。

翁 御苦勞お察し申し上げます。義家の家來どもを見まはして、おゝ、どなたも皆逞しさうな方々のお揃ぢや。負けず劣

らず功名をなされて、一日も早う凱陣を祈つてをります。
經正 お、よくぞ申してくれた。武衛家衡が奥州に威勢をふるひ、榮華に耽る身となりしは、父の勳功とは申しながら、一つには我が君の御恩であるぞ。

則明 それを忘れて妄りに兵亂を起し、我が君より再三なだめらるると雖も、ろくろくに御返事も仕らず、八幡太郎ならば相手にとつて不足はないなどと廣言を吐いてゐるとは憎き奴等ぢや。

助兼 我々これより攻下つて、片端より踏潰し踏破り、源氏の武士の手なみを見せてくるるわ。

景政 彼等がいかに狂ひまはるとも、所詮は貞任の二の舞ぢや。

嫗 お、どなたも勇ましいことでもござりまする。その貞任で思ひ出しましたが、先年貞任を攻めほろぼして、都へ凱陣遊ばす時に、熊のやうな荒夷を生捕にしておつれなされましたが、おれはその後どうなされましたな。

(家來どもは顔を見合はせて、返事に困つてゐる。)

翁 さうぢや、さうぢや。あの熊のやうな大男は都大路を引さまはされて、それから鬼界が島へでも流されたか、但しは六條河原で獄門にでもかけられたか。いづれそんなことでもござりませうな。

(家來どもはいよいよ返事に困る。馬の口をとりて、うしろの方に控へゐたる宗任はこの時進み出づ。)

宗任 その熊のやうな荒夷は即ち私ぢや。この宗任ぢや。

鬼界が島
鹿兒島縣に屬
する奄美諸島
中の一といは
れる
六條河原
京都六條の賀
茂河原 昔斬
罪を行つた所

翁、姫え。

宗任 鬼界が島へも流されず、六條河原へも晒されず、八幡殿の御家來に加へられて、今では然るべき武士となつたわ。(笑ふ)

翁 (氣の毒さうに) いや、これは、これは。そのお人がそこにあるとは知らず、とんだ陰口を申しました。どうぞ堪忍して下さい。

姫 しかしまあ、そんな立派なお武士にならしやれて、こんなめでたいことはござりませぬ。

義家 我が思ふことを憚りなくいふところに質朴なる人情のしのばるるものぢや。宗任、かならず氣に障へまいぞ。

宗任 はあ。

義家 我々は暫く關屋の奥へまゐつて、あとなる人數の續くを

待たん。翁、案内してくりやれ。

翁 はあ。(立ちあがる) さあ、かうお出でなされませ。

(翁は先に立ち、義家に續いて宗任は馬の口をとり、經正、則明、助兼、景政、その餘の軍兵等、いづれも關屋の奥に入る。)

(暫くして新羅三郎義光は武装して馬を早めて出づ。)

義光 關守はをらぬか。武者一騎、うち通るぞ。(呼ぶ)

(關守の翁出づ。)

義光 大將はいづこにおはする。都より新羅三郎がまゐりしと申し上げい。

翁 かしこまりました。(關屋に入る。)

(義光は鞍を下りて、樹に馬をつなぐ。關屋のうちより義家は先



源義家來關圖 (久隅守景筆)

匡房卿
大江匡房
當
時の大學者
天永二年(一
七七)歿、
年七十一

に立ち、宗任は馬の口をとり、經正則明助兼景政の四人従ひて出づ。

義家 おゝ、義光か。

義光 兄上。おあとを慕うてまゐりました。

義家 それ、敷皮を……。

則明は持つたる敷皮を義家に敷き、景政は同じ敷皮を義光に敷く、義家と義光は相對して坐す。

義家 早速ながら、義光はいかにしてこゝまでまゐりしぞ。匡

房卿のおとりなしにて、奥州下向を許されしか。

義光 (頭をふる) いかないかな。兄上の御意見にて一旦は思

ひとまゝまりましたが、このたびの合戦は家の大事、いかに思ひ返しても、たゞこのまゝにはをられませぬ。たとひ後日にい

左兵衛佐
左兵衛府の次
官

かなるお咎めも受けなば受けよ、兄と生死を共にするが弟の道と胸をさだめ、恐れ多くも上より賜はりし左兵衛佐をうち捨てて、官も位もなきたゞの新羅三郎義光と相成つて、兄上よりも三日後れて京を立退き、夜を日についで路次を急ぎ、たゞ今、到着仕つてござりまする。御意見にそむきし義光が自まのふるまひは、幾重にもお許し下さりませ。

義家（涙を浮かべる） 家にありてこそ叱りもすれ、意見もすれ、兄の行末おぼつかなさにおのが官位もうち捨てて、陸奥のはてまで遙々慕ひ來りし弟を叱つて歸す兄があらうか。萬一後日にお咎めあらば、かならず義家が身に引受けて、その方に難儀はかけまいぞ。

宗任（思はず叫ぶ） 殿。よくぞ云はれた。新羅殿もよくぞま

ゐられた。それでこそまことの兄弟でござるわ。

義光 さだめてお叱りもあらうかと、途々も案じてをりましたが、その御言葉を承つて、義光も安堵仕りました。(經正等に向ひて) 皆も聞け。義光は兄上のお許を受けて、けふよりその方どもと一緒に行くぞ。

(經正等は皆勇み立つ。)

經正 思ひがけなく新羅殿がまゐられたは、龍に雲と云はうか、虎に翼と申さうか。

則明 千騎萬騎の身方を得たるよりも、心強う存じまする。

助兼 これぞいくさに勝つべき前兆。

景政 まことにおめでたうござりまする。

義家 (勇んで) お、皆も喜べ。前の奥州征伐には、義家は父子

二人であつたが、今度も義家は一人でない。兄弟二人が駒を竝べて、昔の戦場に再び立たうわ。いざ、うちつれて關を越えん。宗任、馬引け。

(起ちあがる。)

宗任 あいや、暫く。今この際に宗任少しくお願いがござりまする。

義家 あらためて願とは。

宗任 こゝは陸奥と常陸との國境。これまでお送り申し上げたれば、何とぞ某にお暇下しおかるるやうお願い申し上げまする。

義光 宗任は陸奥へなぜ向はぬ。

宗任 (慨然として) 陸奥は宗任の故郷、安倍の一族が減びつく

したる故郷でござりまする。國破れて山河あり。宗任徒ら
に生きながらへて、故郷の山や河を見るに忍びませぬ。

義家 さらば、このまゝ都へ歸るか。

宗任 いや、いや。再び都へ歸る心はござりませぬ。宗任、日本
の北のはてに生れましたれば、更に南のはての九州へ渡つて、
新しき天地を拓かうと存じまする。

義光 その方は都を見限つたと見ゆるな。

宗任 思ひのほかでござりました。

義家 よい、よい。この上は、その方の心まかせぢや。義家とは
違うて自由の身の上、行きたい所へ飛んで行け。

宗任 はあ、ありがたうござりまする。(經正等に) 方々、お聞き
の通りぢや。

經正 残念ながら是非に及ばぬ。

則明 こゝでお別れ申すといたさう。

助兼 道中無事を、

四人 祈り申すぞ。

宗任 さらば、殿。(會釋す。)

義家 堅固で暮せ。

(義家と義光は馬に乗る。則明と景政はその馬の口をとる。風
の音して、櫻の花は雪の如くに散る。關守の翁出づ。)

翁 おゝ、またしても花が散る。方々の鎧の袖に雪のやうに
降りかゝりまするわ。

義家 (馬上にて考へる。)

吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山ざく

らかな

宗任 その櫻花のちりぢりに、我は南へ。

義家 我は北へ。

義光 思ひ思ひに別れて行くか。

義家 さらば、宗任。

義光 無事を祈るぞ。

宗任 はあ。お別れ申しまする。

(宗任は一禮して向ふへ歩み去る。義家と義光は手綱を繰りながら、あとを見送る。櫻の花しきりに散りかゝる)――幕――

(綺堂戯曲集)

小泉八雲
ラフカディオ・

ハーン

イギリスの人
我が國に歸化
し、小泉八雲
と云つた。東
京帝國大學講
師。明治三十
五年歿、年五
十五

松江

島根縣松江市
水郷都市で古
來遊覽地とし
て名高い

洞光寺

松江市雜賀町
にある曹洞宗
の寺

三七 松江の曉

小泉 八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、耳の眞下で搏つてゐる緩やかな大きな脈のやうに響いてくる、太い柔かな、鈍い打撃の音である。その規則正しさと、そのこもつたやうな深さと、その聞えるといふよりは寧ろ感じられるやうに枕の下から揺れてくる趣とは、心臓の鼓動に似てゐる。それは米搗の杵の音なのだ。一定の拍子で、こもつたやうに響くその音は、日本人の生活に伴なふあらゆる音響の中で、私には最も哀れに思はれる。米搗の音は、日本といふ國土の脈搏だ。

それから、禪刹洞光寺の鐘の響が、街の上空に揺れる。續いて近くの材木町の地藏堂から、太鼓の憂鬱な音が晨の勤行を告げ

る。最後に、早く出て来た行商人の物賣の聲。「大根やい！蕪菁や、蕪菁！」「焚付や、焚付や！」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開け、河畔の庭から伸びてゐる、春の若葉の軟かな緑の雲越しに、朝景色を眺めやる。眼前には、宍道湖から出る大橋川の、幅廣い鏡のやうな口元が、わな、くやうに對岸の萬象を寫して、微かに光つてゐる。湖はひろびろと右手へ擴がつて、淡黒い連丘に圍まれてゐる。對岸の眞向ひにある家々は、ちやうど箱を閉ぢたやうに、戸を締切つてある。夜は明けたが、日はまだ出ないので。

遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の向岸に長く渡つてゐる。日本の昔の繪本に見るやうな星雲狀の長帶だ。それが、山とい

宍道湖

島根縣にある

一大淡水湖

面積八三・一

三平方軒

光明湖

大橋川

宍道湖から流

出して松江市

を貫流する川

ふ山の裾を蔽ひ、又、峯から岸へ、高く低く、はて知れぬ長さの紗の

やうに延びてゐる。そのため、

湖水は實際よりも遙かに大きく

見え、味爽の空と一つ色に融合つ

た、美しい幻の海となつてゐる。

山々の嶺は、霧に浮かんだ島嶼と

なり、幻のやうな一帯の丘陵は、果

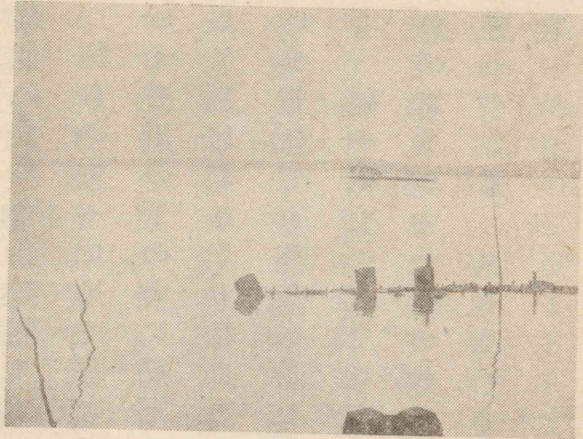
てしのない堤道かと怪しまれる

——美しい混沌だ。しかも、霧が

徐々に上るにつれて、その趣は刻

刻に變つてゆく。太陽の黄色な縁が見えてくると、今迄よりは、

あたゝかい調子の細い細い光線——分光鏡の紫と乳白色——



宍道湖

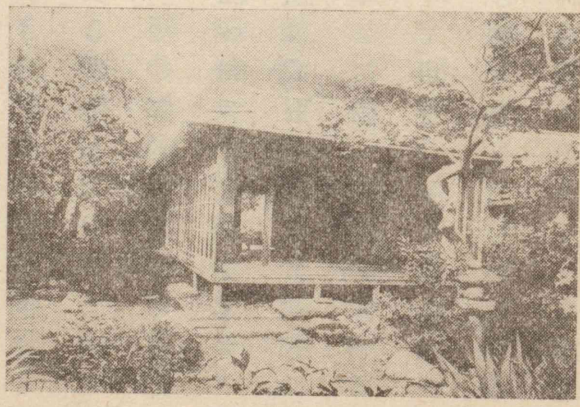
蓬萊 蓬萊山 支那
の神仙境 不
老不死の地と
考へられた靈
山

が水上を射して来る。木々の頂は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の板壁は、その生地の色が美しい靄のために蒸氣の立つ金色に變る。

朝日の方へ向くと、橋杭の數多立竝んだ木造の橋のかなた、長い大橋川の下の方に、船尾の上つた一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。私はこんな奇異に美しい船を見たことがない。正にこれ蓬萊の夢だ。霞のためにそれほど醇化されてゐる。船の精だ。がこの精は雲と同様に光線を受けてゐる。金色の霧で出来た船の像だ、そして、一見半透明に、薄青い光の中に懸つてゐる。

今度は庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる——一回、二

回、三回、四回。しかし、その主は植込に遮られて見えない。が、對岸の埠頭の石段を下りて来る男や女が見える。銘々帯に小さな藍染の手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。白い長い高い橋の上からも、別な拍手の音が、反響の如くに出てくる。遠くにある軽い優美な、新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。このすばらしい舟の上から、手も足も裸の漁師が、金色の東天を拜んでゐるのだ。



小泉八雲の舊宅

杵築大社
出雲大社のこ
と 鳥根縣簸
川郡大社町の
官幣大社 祭
神は大國主神
一畑山
簸川郡東村の
境にあり 一
畑藥師なる寺
がある
藥師如來

拍手の數が増して、今は殆ど鋭い音の連發となつた。それは人
人が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからだ。
「いとも貴き、日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗
しくなし給ふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、こ
れが無數の人々の衷心に相違ない。朝日に向つてだけ手を拍
つ者もあるが、大概は西の方杵築大社へ向つてもさうする。顔
を天のあらゆる方角へつぎつぎに向けて、百神の名を低聲に唱
へる者さへ少くない。天照大神を拜した後、一畑山を仰いで、盲
人の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、佛
教風に掌を合はせて、軽く擦つて拜む者もある。しかし、日本で
最も古風のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も古
めかしい神道の祈の文句を唱へる。「被ひ給へ、淨め給へ」とは神

藥師瑠璃光如
來の約 須彌
山の東方瑠璃
世界の教主
眼病に靈驗が
あるといふ

笑みため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始りだし、橋の上にはから
ころといふ下駄の音がだんだん高くなつてくる。大橋の上の
このからころは忘れられない音である。速くて、陽気で、音樂的
で、盛な舞踏のやうである。實際また、舞踏である。みんなが爪
先で歩いて行く。朝日のさしてゐる橋の上に多數の足がちら
ちらするのは、驚くべき光景である。その足は皆小さくて、均齊
を得てゐて、ギリシヤの古甕に畫いた人物の足のやうに軽やか
である。そして、足を運ぶには、きまつて爪先から先に下す。實
際下駄では外にしやうがない。踵は下駄にもついてゐなければ
地にもついてゐないで、足は楔形の本の臺を前に傾けては進

むのだから。

やがて、學校へ急ぐ子供達が出て来る。彼等の駆ける時、美しい飛白の著物の濶い袖がひらひらするのは、全く大きな蝶が羽ばたきをするやうである。

和船は白や黄の大きな翼をひろげ、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は煙突から煙を吐き始める。(小泉八雲全集)

くれなる細くたなびける 雲とならばやあけ

ぼのの 雲とならばや

鳩にふまれてやはらかき 草とならばやあけ

ぼのの 草とならばや

(島崎藤村)

島崎藤村
本名島崎春樹
文學者 明治
五年生

三 國史に歸れ

徳 富 蘇 峯

國史に歸れ。日本國の歴史は、大和民族の系圖である、吾人の祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、この歴史を通して知るより他に方法がない。歴史は實に忠實なる案内者であり、信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は、平等觀よりすれば、皆同胞である。されど、歴史觀よりすれば、何れの國も、皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とも等しくなく、丙國と甲國とも亦同一でない。十箇國あれば、十箇國だけの相違があり、百箇國あれば、百箇國だけの

徳富蘇峯
名は猪一郎
思想家 貴族
院議員 東京
日日新聞社
文久三年(二
五二三)生

差異がある。此の特殊の國性を維持するを得て、始めて獨立國の意義が完うせられる。獨立國の本義は、形式的に、他の干涉を絶ち、自主の體面を保つことのみにはない。何よりも精神的に自主たるにある。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させるにある。

我が大和民族最大の誇は、日本の歴史である。此の歴史の中の事實は、必ずしも、悉く敬すべく、仰ぐべきのみではない。人間は神ではない。人間の所作には、様々の過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括して言へば、日本の歴史は、大和民族の恥辱史ではなくて、光榮史である。

日本の皇室が、如何に世界に比類のない、ありがたい皇室であらせられるか、日本の國民が、一旦緩急に際しては、如何に猛烈且

勇敢に護國の精神を發揮したか、又、大和民族の中に、如何に多く世界的偉人と稱するに足る者を輩出せしめてゐるかは、歴史の示す所である。恐れ多いことながら、我が明治天皇の盛徳、大業も、國史の背景によつて、始めて明白に、精詳に、剴切に、之を會得し奉ることが出来る。國史の背景なくしては、彼の五箇條の御誓文の如き、たゞ一種の雄快なる文書たるに止まるであらう。又、彼の帝國憲法の如きも、單に乾燥無味なる一部の法文たるに止まるであらう。

凡そ固陋・頑冥の戀舊思想や、保守・退嬰の島國根性や、詭激・狂妄の破壊主義や、架空・浮誇の模倣精神は、何れも我が國史を閑却した所に生じたものといふべきであらう。徒らに現状を株守するも、國史を知らぬが爲、故なく現状に不安を抱くも、國史を知ら

五箇條の御誓文

明治元年三月

十四日明治天

皇宣し給ふ

帝國憲法

明治廿二年二

月十一日發布

ぬが爲國民的自信力を失墜するも、國史を知らぬが爲、自惚根性にて、醉生夢死するも、國史を知らぬが爲に外ならぬ。

國史に歸れとは、すべての國民が歴史家になれと云ふ意ではない。それには専門の學者がある。たゞ日本國民として、日本の歴史の、其の大なる筋道を諒解せよと云ふのである。日本國民は、豊富なる歴史を持つてゐる。此の歴史は、精神的意味に於ける、日本の寶藏である。苟も國民的に生活し、活動せんとする者は、先づ此の寶藏に向つて、總べてを求むべきである。

(國民小訓)

實業學校 國文新選 新制版 卷二 終

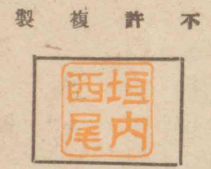
昭和十二年七月二十一日
昭和十三年一月十六日
昭和十三年七月二十一日
昭和十六年八月十五日
印刷發行
訂正再版發行
訂正再版發行
訂正再版發行

著者 垣内松三
尾實

發行兼印刷者 株式會社 文藝學社
代表者 小林竹雄

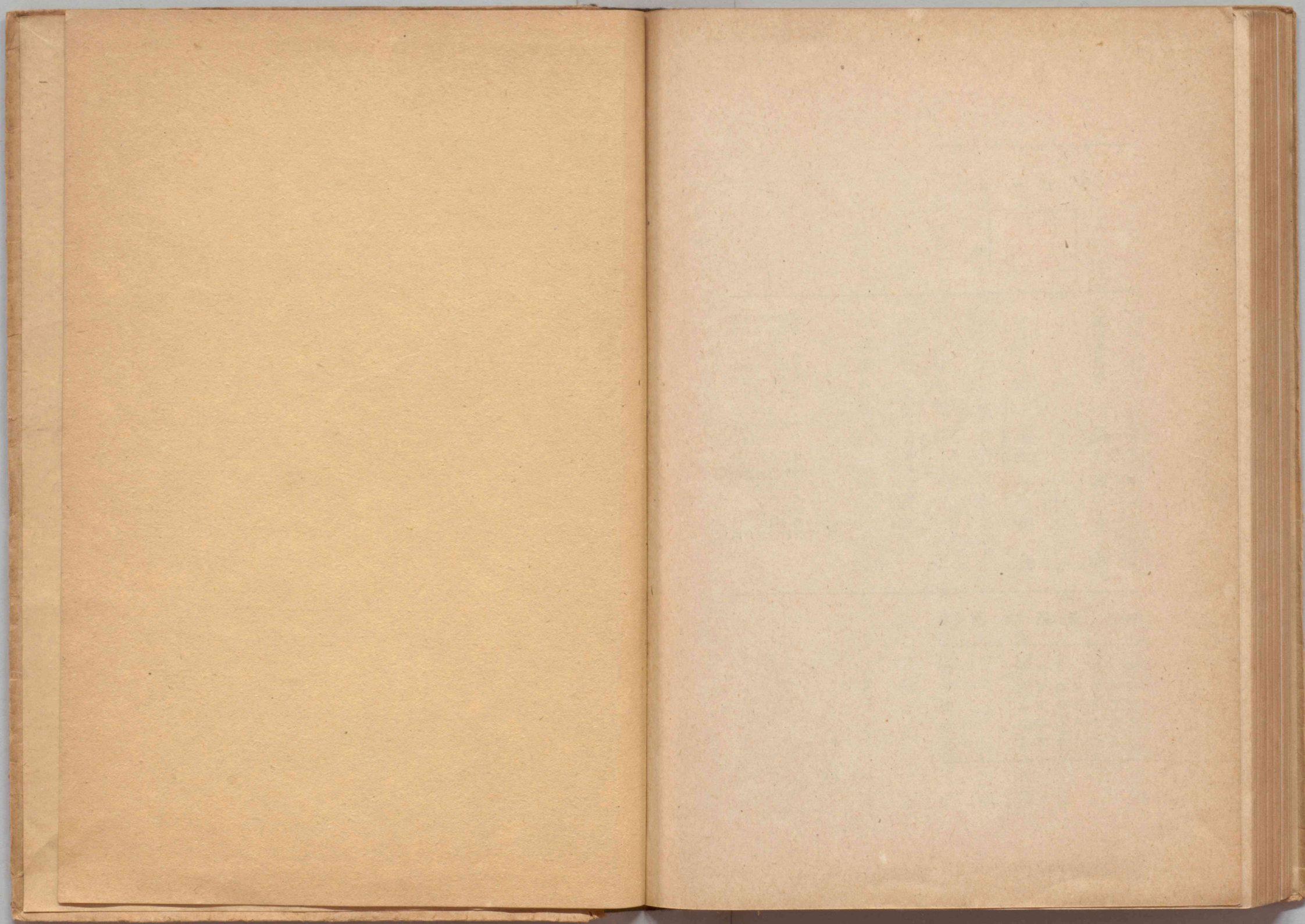
發兌 株式會社 文學社
東京市神田區榮土代町十八番地
電話 神田 四二五七番
掛 東京 三八七八番

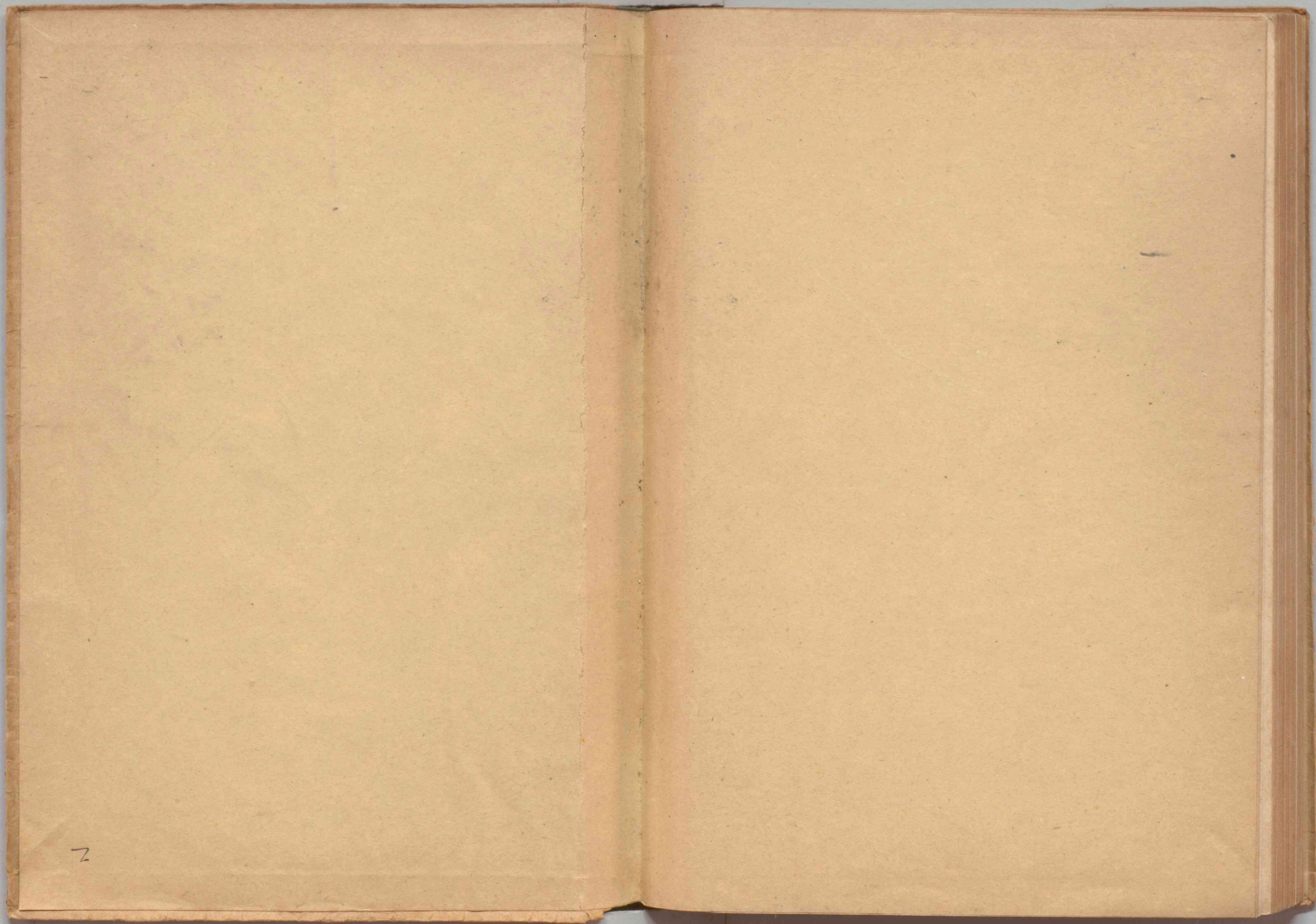
關西販賣所 株式會社 盛文館
大阪市西區町花通二丁目十八番地
電話 土佐堀 一五二三番
關 大阪 七四三番



實業學校 國文新選 新制版

卷一	定價	金九圓
卷二	定價	金八圓
卷三	定價	金八圓
卷四	定價	金八圓
卷五	定價	金八圓





2

広島大学図書

2000048922

